020079−000−4

特10−596

日蓮大士真実伝

小川　泰堂／編

M26. 12

ABH−0281

玉篇殘卷

人至貴也

四庫全書總目提要

高祖真經序

高祖因天台得道經曰蓮宮
身證高又曰非有日莫行之法華經是
經歸本誕矣吉宜祖一代仙儀宗其
經合高祖出而其說方為實說則高祖
一代仙儀即法華經也法華經即高
祖之真實傳也真實安得豈非後學

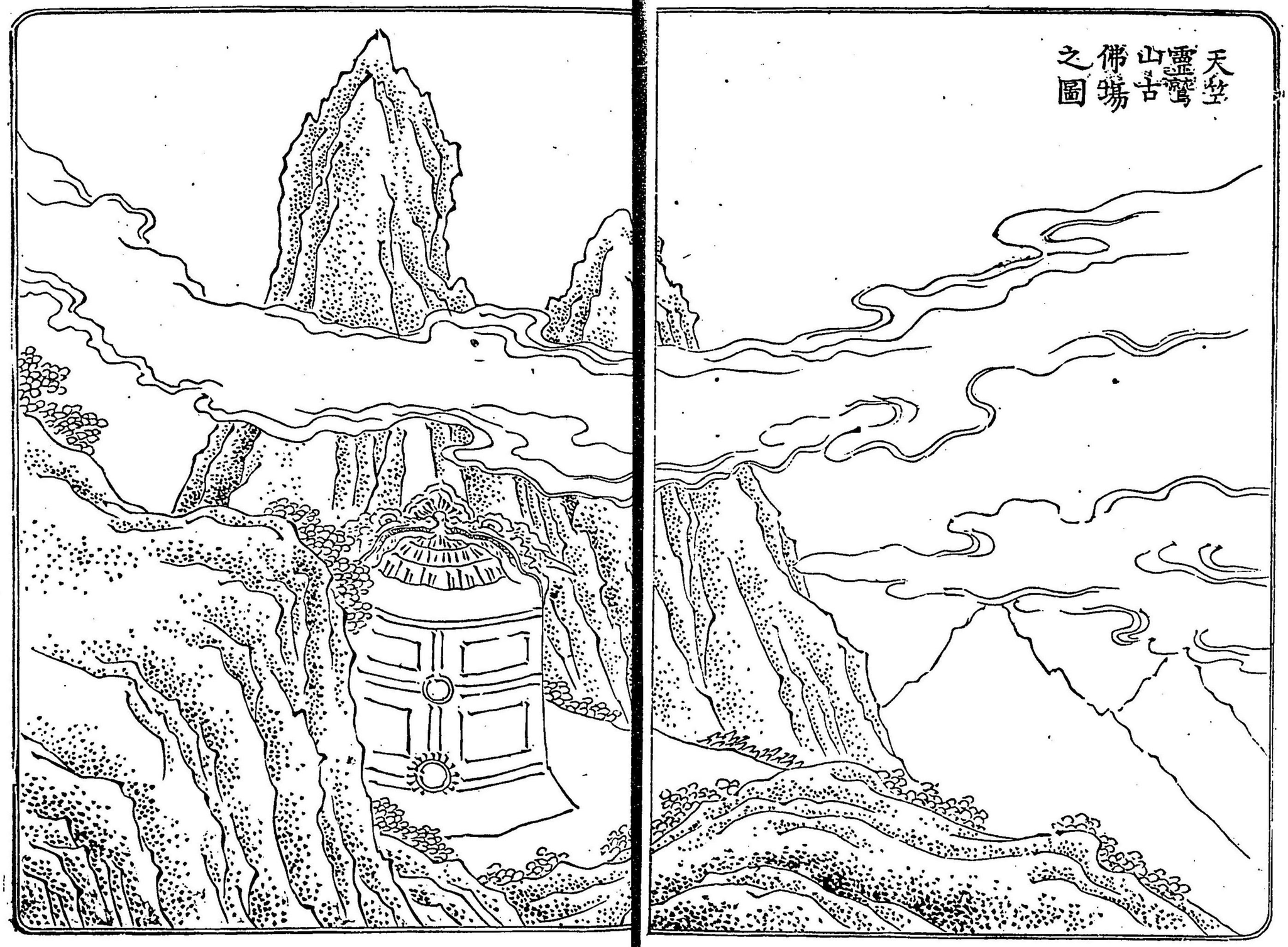
華經乎雖然直注其理以專攻之安
不能去實得公和文平易能歸於可
地德庵詳而讀之獨之讀注華經也
功德豈少可測以知爲清淨是情者乎
世親菩薩序

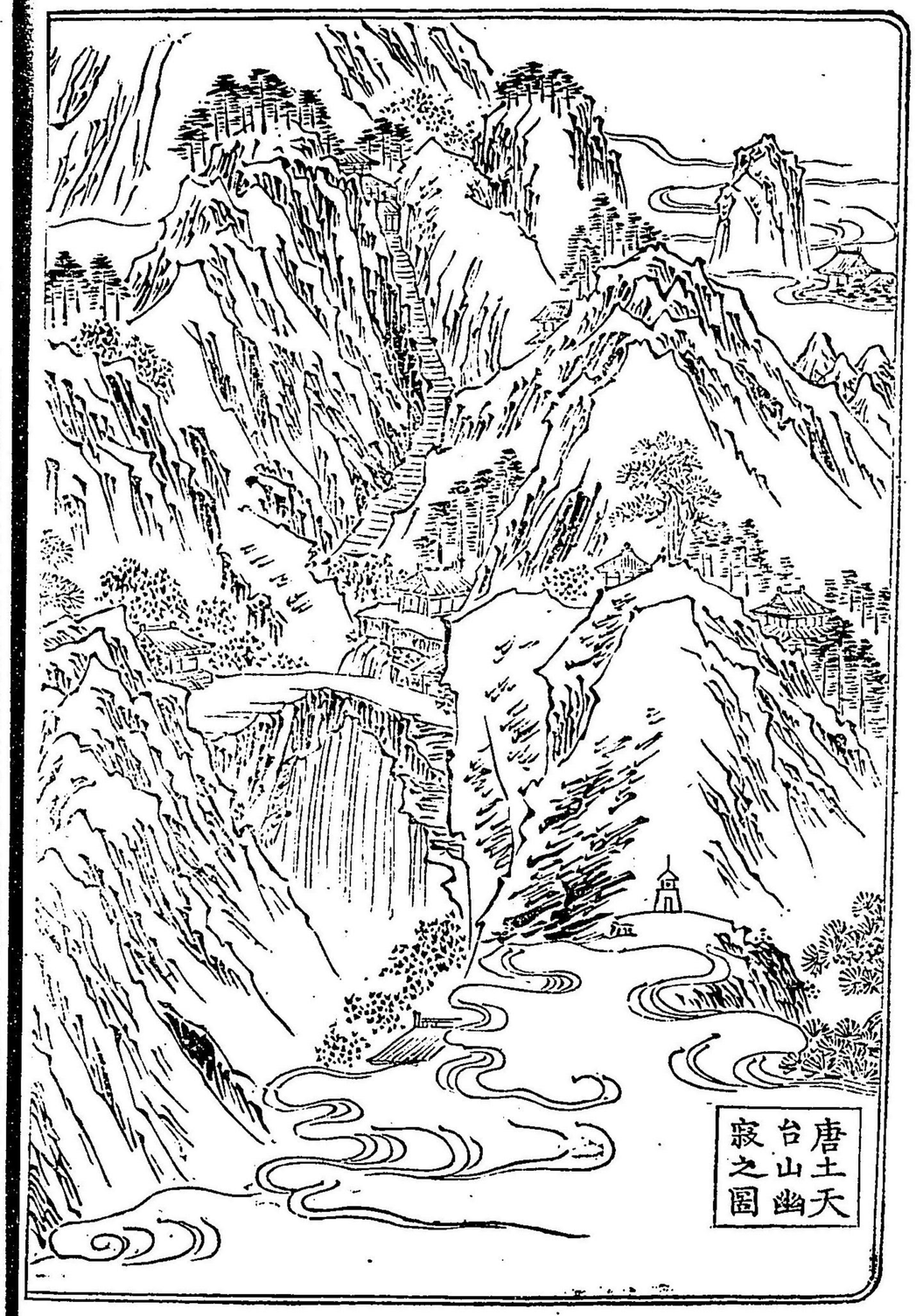
明治廿六年十一月十日

文靜撰 [illegible] 書

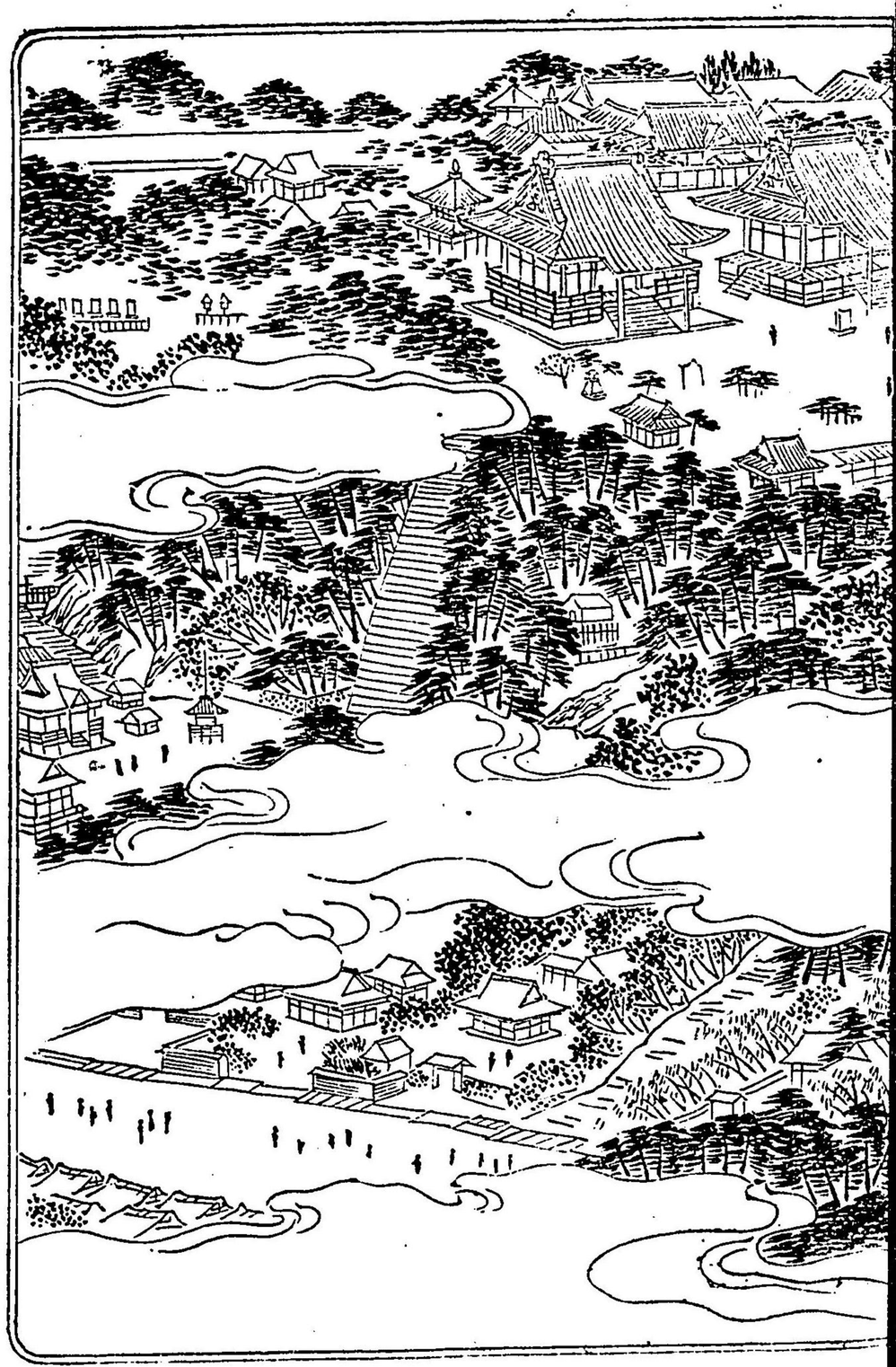
萬物各有王月元出於衆星蒼海之於江河栴檀之於林木蓮花之於草葩皆類也出於其類拔乎其萃所以王之爲王蓋牟尼聖經八萬四千亦唯有經王洛華摠持群典森羅萬類千界出依正無不因此經力然則法華經者國家之柱石群生之命脈不待言也其大洛所現之道場膳部州中有三初金仙從在竺土靈鷲峰而開兜之夫那之智顗將護于天台山扶桑之蓮師祖述于身延嶺此三國三山者誠大千界出神秀而其俊極之狀旁礴之態玲瓏之美瑰奇出勝皆是金輪涌出黃金之所成三聖者衆生之棟梁而三嶽者衆界之靈域也三聖在三嶽扶揚此經王猶三光照三千尊之又尊高之又高可仰而信俯而尊運念於彼疑心於此祥福多之遂合十指小掌曰南謨三山三身如來本結大緣寂光爲土諦觀法王洛法王瀑如斯

維時萬延元年龍舍庚申仲夏日　小川泰堂撰書


天竺靈鷲山古佛場之圖


唐土天
台山幽
寂之圖

本朝延山佛法興隆之圖



日蓮眞實傳

日蓮大士眞實傳壹之卷

大綱

自貞應元年壬午至建長二年庚戌高祖初歳より二十九

目錄

貫名家系伊谷明神奇瑞の事
貫名次郎重忠房州小湊配流の事
梅菊女靈夢を感じて懐胎の事
善日麿誕生祥瑞不測の事
善日麿村里頑童に無益の殺生を誡る事
六月雪霜を降らせ又磔石を雨す事
善日麿清澄に登山して藥王と改名の事
梅菊女藥王丸を清澄に訪給ふ事
藥王麿剃髪名を蓮長と改むる事
智慧を虛空藏に願りて一切經を讀み給ふ事
鎌倉に出て大阿然阿に淨土宗を聽給ふ事
尊海に伴れて比叡山に登り給ふ事
慈覺大師の義を不審の事
泉涌寺に入りて大覺禪師に參ずる事
三井の學室より智證の跡を尋ね給ふ事
善證に値て鎌倉の凶變を聽給ふ事
三浦泰村鎌倉に謀反法華堂にて自害の事
蓮長師南都の六宗遊學の事
江川吉久に値遇の事
高野山に登りて眞言の秘法を學び給ふ事
聖德太子の御墓山に詣給ふ事

二之巻

大綱

自建長三年辛亥至弘元元年丙辰高祖春秋三十より三十五歳

目錄

道長師比企能本と儒佛の離合を論談し給ふ事
冷泉家を訪て數島の道を聞給ふ事
眞廣法印に交て東寺御室の學室に入給ふ事
法華守護の番神蔵山に示現の事
淨本夫妻の厚情に依て京都越年の事
伊勢の神廟より靈瑞の事
鄉里に歸て兩親を慰め給ふ事
道善御坊壽で道長師を經歷の事
旭日に向て華て妙法を唱へ宗冒建立の事
東條景信の怒を避て華房に隱れ給ふ事
日蓮と改名して兩親に大戒を授給ふ事
故國を去て鎌倉へ趣き給ふ事
相州三浦米が濱着船の事
名越松葉が谷に菴室經營の事
成辨蔵山より來たりて徒弟となり日昭と改名の事
四條賴基蓮祖の教導を受る事
進士善春途中に同傘して蓮祖に歸伏の事
印東有國の一子を法弟として名を日朗と召事
蓮祖剃髮以來富木殿資財を見繼たる事
鎌倉十字の辻に立て折伏弘通の事

三之巻

大綱

自正嘉元年丁巳至文永四年丁卯高祖年齡三十六より四十六

目錄

在原池上南部等師依隨從の事
鎌倉大地震大雷の事
高祖駿州岩本實相寺の經藏に入給ふ事
天下大飢饉疫病流行人多く死亡の事
立正安國論を作て鎌倉殿を諫る事
最明寺時賴公高祖に對顏の事
松葉が谷御菴室燒討亂妨の事
高祖中山に在て百座說法敎化の事
吉田兼益より神道傳達の事
高祖伊豆國伊東に御流の事
漁者彌三郎篠見が浦に高祖の危難を救ふ事
高祖伊東朝高の重病を祈治す事
閻浮第一の釋尊高祖感得の事
北條重時逝去子息長時屢惡夢に魘るゝ事
高祖赦免を得て鎌倉に歸り給ふ事
神妙の經力高祖の母堂蘇生延壽の事
道善御房に華房に會して敎化の事
小松原横難法子檀越討死の事
市が坂の雪中老婆綿冒子を供養の事
野州宇都宮遊化の事
長七十餘度の大彗星一天に亘る事

日蓮眞實傳

高祖富木の館に越年して鎌倉に歸る事

四之卷

大綱

自文永五年戊辰至同十年癸酉高祖四十一歲より五十二歲

目錄

大元蒙古の賊軍日本に逼る瀾觴の事
高祖十一通の書を方々に贈て法論を促給ふ事
甲駿に遊化して富士山に登給ふ事
大旱魃良觀上人雨請不覺の事
高祖田邊が淵に雨を祈り給ふ事
諸宗より高祖を讒奏して其罪死刑に極る事
松葉が谷に高祖を召捕て町々を引渡事
鶴が岡八幡を諫曉して正法の威力を示し給ふ事

老婆胡麻の餅を捧げて今生の面別を歎事
龍の口に法華經の利驗を顯給ふ事
明星依智に降て高祖を擁護する事
高祖依智を發て佐渡國に趣給ふ事
難風角田の岸に着船して不圖毒蛇を度給ふ事
海上の激浪に題目を唱て龍神感應の事
佐渡國の配所御難の事
六箇國の僧塚原に來て問答の事
本間六郎重連歸依の心を發す事
北條家一門京鎌倉合戰の事
高祖一之谷に移りて化導愈々盛なる事

日蓮眞實傳

殿嶋辨財天示現して本尊を請給ふ事
高祖十界勸請の大曼陀羅を顯して本地を示す事

五之卷

大綱

自文永十一年甲戌至弘安五年壬午高祖五十三歲より六十一歲

目錄

執權時宗靈夢に感じて大士を赦免の事
日朗赦免狀を持て佐渡に渡海の事
大士佐渡を發て鎌倉に歸り給ふ事
鎌倉殿大士を館に召て慇懃に應接の事
法華宗門弘通の免狀を賜はる事
大士甲斐の國波木井實長の方たへ赴むき給ふ事
八代山梨両郡より信州蔦木まで遊化の事
石和川に鵜飼の幽靈濟度の事
身延山に幽栖閑居の事
日朗平賀忠晴の一子を將て登山す大士名を經一と賜ふ事
小室の菅智大士を毒殺せんと謀る事
大士上野殿に大橋太郎の因緣を語り給ふ事
日進鎌倉桑が谷に龍象坊と問答の事
四條頼基主家の勘氣を蒙る事
七面大明神示現影向の事
蒙古退治旗曼荼羅現證利驗の事

特10
596

日蓮眞實傳

日蓮大士眞實傳目錄

日蓮大士眞實傳目錄　六
大士發病預じめ死期を知召て池上に赴き給ふ事
經一麿に京都弘通を御遺言の事
高祖大士池上において御入滅の事
御遺狀に任て御廟を身延山に築く事
御願滿足妙法一天に光耀事

日蓮眞實傳

日蓮大士眞實傳壹之卷

東海相模州　小川泰堂編述

一天雲晴て日月淨く。四海風収つて萬邦寧からぬ例いあらじ。こゝにかしこくも。本地四八の妙相を隱し。日本國東海に應生し。末法萬年の闇を照し給ふ。日蓮大士。俗姓の先蹤を遠く考がふれば天神見屋根の神裔にして。皆極帝の御時。入鹿父子の惡逆を伐て。天下の靜謐を奏したる。正二位内大臣鎌足より十二代の正嫡。備中守共資。正暦の元年夏の頃京都を去て遠江國村柳といへる里に住居せしに其軀男子なき事を歎き神にろの傳統の冥助を祈ることゝ久し。寛弘七年庚戌の正月元日。同國引佐郡井谷明神に參詣し神前に祈誓を凝けける時。祠の前端垣のほとりに稚兒の啼聲す。共資あやしみて立出見るに盧橘の樹のもと。筒井ほりとに綾の衣につゝみたる。いと美しき嬰兒あり抱き揚てこれを觀るに氣高き男子にて。眼の光初空の旭日にかゞやき。尋常あらぬ稚兒にありければ。共資いあれゝ神の賜ならんと。懷き歸て我が子として。此をいつくしみ養けるが生長にしたがひ。雄力猛く智慧亦萬人に優れたり

共資我が女を配合て。僧中大夫共保と喚。初て姓を井伊と名乗。彼の神前の奇端を以て井桁に
盧橘を家の紋所と定めけり。かくて共保の子備中次郎共家其子九郎共直。その子新大夫惟直
惟直の子を赤佐太郎盛直といふ。盛直に三人の子あり。嫡子い次郎良直次い三郎俊直。次い貫
名四郎政直同國山名郡貫名に領居するゆえ。貫名をもつて姓とす。これ日蓮大士の祖先あり
この四郎政直に二人の子あり。長男い四郎行直。次い六郎直友なり。行直の子重實。重實の子又
二人ありて。一男い早世し。次男い次郎重忠といふ重忠に五人の子あり。嫡子い藤太重政次い
早世す。次い仲三重仲。次い日蓮大士。末子を藤平重友と號し。此子孫藤平を姓として。今猶上
總國大野の鄉に存在せり。一切の河々海に入て。皆一味の鹹となるが如く。在家の四姓沙門と
成て後に姓なしこゝをもつて其委悉をつくさず但ろの來歷をしるすにおんありける。此時
に當て。右兵衛佐源頼朝卿い。平家を西海に追落し。相州鎌倉に都を立。四夷八蠻を伐鎮め武
威を天下にかゝやかす折から貫名次郎重忠も。政直以來。遠州山名郡に在て。鎌倉に參勤し我
が領地の民を憐み。文を講じ武を磨き。舊き家名を落さじと朝暮勵む時しもあれ。當時源家の
執權職。北條四郎時政。ひそかに諸國へ人を馳。二心ある武家を探りこれを誅して天下の愁

ひを除くこと。恰も莠を拔て五穀を養ふが如し。貫名重忠い性質忠直にしく諂ふ色おく。武備
を遏しうして其職を勤む大孝い孝に似ず。大忠い不忠に混じ。平家の殘黨に志を通ずるや
のよしあやしみに預り。鎌倉に召寄。糺明をも遂ず罪なくして所領を沒收し安房國長狹郡に
流罪となりしい。建仁三年五月七日の事あり き。其価べき方とてい。東條市河の鄉小湊といへ
る海濱にて。浦山近く。松の嵐の吹あれて。寐覺の床に夢も結ばず。昨日まで賑ひ暮したる。男
女の影もとゞめず所領なければ粟飯だに炊ぐべきたつきもあらず。斯て果べき世の住家な
らねば。舊きゆかりを求め。下總國路野遂なる大野吉清が女梅菊女を迎へて妻となしぬ。此い
清原氏にして。舍人親王十世の孫裔世に賤しからぬ身にあれど。夫壻の罪おくして。配所の月
に憔悴たまひし面影をいたはり。磯が根に甘海苔を掻て日の暮るをいとはず。夜は麻を織。網
をつゝりて。宵の更るを知らず。夫壻の次郎も沖の小舟に命をまかせ。釣する海士の群に入り
て漁獵を事とし妻も夫も疆に馴ぬ。賤が仕業も恒となり其いとまにい鄉の童等に筆握術な
ど敎るにぞ。在しむかしの思はれて。物辨へぬ磯村の伏屋のうちにも敬れ。富としもおけれ
ども。物不足なく暮しける。梅菊女はいとけなきより。神に佛に能念じ事へけるが。此小湊の浦

ん。日本の東海にして。朝暾に遮る嶋山もおし。梅菊女は朝な〳〵。窓の戸しらむ曉天には明る間遲しと起出つゝ身を淨らにし香を焚。夫の行末兩親の延壽。いのらぬ日とていなかりける

斯て承久三年夏の初梅菊女れ夫壻の次郎に語るやう。今宵不測の夢こそ見つれ。常にかはらず。日天子を拜みつゝ見仰れば。日輪の光明いやまさり。八葉の金蓮華に乘給ひ海上はるかに飛來。妾が懷に入と見て。驚ささめてはべるかし。婦女の愚なる心より。正なき夢をみつるよと。叱りたまふなとありければ。次郎重忠も愕然としておどろき。我も日永の疲にて。まどろむ中に。いとも尊き白髮の老翁が玉の如き稚兒を掌の上に居これは汝に授るぞ能養て出家にせよと。再應再三ねんごろに。さし示し給ひぬ此は不測なる夢想かなと。互ひに語り合給ひける。夫より梅菊女は懷妊身となり給ひ。檜の柏に秋告て。海原くらき時雨雲夜半の霰に鐘さえて。いつしか氷る筧水の音もとだへし冬の空。今年も夢と暮にけり明れば貞應元年壬午の春。時に人皇八十五代後堀河帝萬機の政事を攝て。四海を撫育成給ふ。又鎌倉には四代の將軍。藤原頼經公あり。此は右大將頼朝卿の血緑なるをもつて。後室二位尼政子の方のはからひによりて。二歲の時鎌倉に請迎へ。當年五歲に渡らせ給ふを。將軍と仰奉り二位政子の方は。玉簾の中に。將軍を護り。武門の仕置。天下の成敗。公家の進退まで。皆これ政子の方寸にて殊に舍弟北條義時は當時の執權たり。保元平治の國亂も。きのふの昨と消はてゝ。今は言の葉にかけて。いひ出る人もなく鎌倉山の星月夜日本の大小名。弓箭とる身も取ぬ身も。心を鎌倉に寄ざるはなく。諸侯の邸宅雲をさゝへ。神社佛閣。霞と棚曳。街をひらき衢を分け。朝市夕店の繁昌は。谷七郷に賑ひて。新玉の春いく萬代か立かへり。盡せぬ聖代の壽きは。其頃中納言基綱卿の歌に

吾妻路のあまた郡のその中にいかで鎌倉さかへ初けん

と詠給ひしにも其繁昌は知られけり。かくて房州小湊の浦に奇異の事こそあれ。此里近き磯村に。誰が植おきし種もなき。蓮の若葉の生出て立葉卷葉の茂り合ひやがて白蓮華の咲出たるに華葩大いにしてろの色白銀の如く。旭日に輝き。いと美麗く見えければ。此這近の心なき浦人も。あな不審。夏ならでは咲ぬとき〳〵し此華の。未風さもる雪霜に。かく珍らしく咲たるは此浦にめでたき事のありもやすると。いと嘗く見物す。この吉瑞のあとゝめて蓮華淵とて今に猶其名所の殘りけり。さても去つとし。こゝに配流たる貫名次郎重忠その妻梅菊は。この二

月の十六日。曉天より。産の氣つき。給ひ此日きさらぎの空いと長閑に風も凪。紅旭潮にきらめきわたりさしいる庭の柴垣に。今を盛の梅の宿けふも來馴し黄鳥の。法々華經のこゑいさぎよく。次郎重忠は身を潔め日天子を拜し。妻の安産を禱りける。産舍の内にゝ。得ならぬ妙香のかをり高く。午の刻ばかりに。玉の如き男子出生あしたまひけり。此浦人の我も〳〵と音信て悦いふ者ひきもきらず。中にも齡高おとあびて。望陀木綿の布子さへ。折目の見ゆる村長が門口より次郎の主よこれ見たまへ。かゝる不測の事ありと。呼立られ。次郎立いで見てあれゝ舜花さく前栽に。忽ち泉の涌出で。高く浮上沼々と球を飛して潔よく流るゝにぞ。倖ひこの清泉を汲で産湯とかせり。彼といひ此と言夢の奇瑞も夢ならず此兒の生前いかならんと。人にゝ盲ね二親の心のうちぞ頼もしき。母梅菊もやすらに肥立。この稚兒の面貌を見るに。額廣く眉高く鼻正しくして色いと白かり。口の氣息香ばしく。其容儀凡ならねば。日天子の奇瑞に因て善日麿とこれを名付日にろひ月を重つゝ。蝶を追花を摘でいと壯健に生立給ける。實に末法五濁の興涙をしのぎ。經王法華の利益を三千界に被らしめ給ひし。日蓮大士ゝ此稚兒に在しけりされば此年をもて。むかしを逆算れば。大聖釋迦牟尼世尊月氏國。雙林において。入滅まし

くける其年より正法千年。像法千年すぎ終て末法に入て百七十一年。如來の滅後すでに二千百七十一年に相當る彼の月氏の釋迦如來ゝ。西天の國王と生れて。本果妙の功德を三界に施し今この日本の日蓮ゝ東海の下賤に生れて。本因妙の利益を。閻浮提にかゝやかし給ふ彼ゝ西天の月氏。此ゝ東海の日本なり。彼の入滅ゝ二月十五日。此誕生ゝ二月十六日。天竺の法華經ゝ。西より東に傳へ弘まりて。正像二千の雲を拂ひ。今日本の題目ゝ東に發り反て西に進み弘つて。末法萬年の冥を照す。先聖後聖誠に符節を合たるが如し。佛法修行せん輩ゝかゝる大因緣を辨へ知て。茲に悟入せずゝ。無量億劫にも。得脫の道あるべからずとぞ思はれける。實にや栴檀の二葉。頻伽の卵殼。善日麿ゝ日にまし智慧ずきて父を慕ひ母に逼賀る頃より。人に愛憐ふかく。唯假初に懷抱まゐらせし人も。長くこれをいとおしみ。暦も亦ひとたび掌打愛したるをゝ日を歴てよく遺れたまはず。慈母の懷を汚さず。乳を不吐。三四歳の頃より。世の七八歳の小兒の動靜ありて。いとおとなしく。常に家に在て母のために塵を拂ひ。席を淨むるの手を扶け。父の側に事へてゝ。墨を摺あるゝ茶をまゐらせ。萬能に心を配ること。いとも不測に思はれけり。今宵も浦の夕月に。里の頑童の三四人。友達が伴に書信て。燈火の影に居備きの

ふは彼所の礫に藥螺拾ひぬ。今朝しも背戸の楊に繩さして。雀をあまた捕たるはと。鄙風たる片言もて己が樣々語るをきゝ。昔日曆は暇掉していやとよ曆はさいつ頃慈父の寐物語にきゝはべりぬ。程近き事なるが京都に山蔭中納言とかいへる人ありて或日桂川といふ河原に往かゝり給ひし茲に鵜飼を業とする。いやしの老爺ありて。大きなる泥龜をとらへて殺さんとせしを。山蔭の卿いと憐み。身に添給し衣服。ひとつを其料に取らせ。龜を放ちて遣たまいぬ其後山蔭殿は太宰の少貳といへる官に成て。家の男女を引具して。船にうちのり。筑紫をさして下給ふ此卿に若君ありき。母は繼親にて有ければ。深く心に惡み居て。折とそよけれと過ちのやうに。此兒を舷より投落したりしが不思議や此兒波の上にありて沈給はず。能々見ありければ。數百の龜の甲。海にうかび。其兒を捧戴て衣服さへ濕ざりしを。從取揚。妻をば路より京都に追遣給ひし。その若君後に出家して。如無僧都とて道德たかき聖僧になり給ひぬ此事內裏へきこへければ。後白河の帝より。三年の間。諸國に殺生を禁たまひしときく生あるものゝ誰か命の悲しからざるべき。其身等も今に人とし生立ば浦の朝網夕釣に數限りなき命を取。世の稼業のあさましく。取るゝ命も取人も。俱に逃れぬ惡業なれば。せめて幼き其う

ちにも。無益の遊びに殺生せずば。同心報ひも渝かるべしと。まはらぬ舌にかさりたまへば。理も非も暗ぬ賤の兒が。あくび伸して眼を擦り板金剛に藁履に。かい探しつゝ歸りけり。かくて次郎夫婦も。昔日曆が心つくしの孝行に。年月の憂を忘れてくらしけるが。嘉祿二年戊の秋。鎌倉にては二位の尼。政子の方世を去給ひ。將軍御齡わづかに九歲におはしまして。世の人浮雲の思ひをなす折柄。六月九日辰の刻。美濃國蒔田の莊には。大雪降りてつもること一尺餘。夏の日影に窓を閉。燈を掲き酒を飲て。漸く寒さを凌ぐよし。同十六日鎌倉に注進す。又武藏金子の鄕には。雪交の雨降出後には大霰とあり。禽獸を多く打殺したりとゞ。其上鎌倉にも大路小路に雹のふること雪の如く。六月中雨のみ降つゝき。晴る空なく風いと寒くして。手足も冷凍けり。同く七月の初。奥州にハ小礫を降すこと。雨よりもしげく。瓦を碎き扉を破り人の傷つけるもいと多かりとゞ。これに依て今年十二月十一日改元ありて。明れば安貞二年。昔日曆七歲この年京鎌倉洪水にして。人馬の死滅大かたあらず。此よりうちつゝき。五穀登らづ。諸國に疫癘多く又辛の卯四月廿八日。鎌倉の御所に怪き鳥。數千飛群り。其形鳩の如くにして色黑く。啼て不吉の聲をつたへ。しばしゝて何地共あく飛去けり。鎌倉の僧俗その鳥を見知たるものだ

にあらぬべ。況て其名を識たる人もなし何なる凶變の瑞にやと思うち。八月大風洪水田畑山林を荒し。翌年にいたり天下大飢饉。時の執權北條泰時。五十條の憲法を立て。國政を勵めども四海の困窮こゝに究り。衣食あき民に仁惠い敎へがたしかゝる京鎌倉のありさまを。風の便にきくにつけ。次郎重忠い妻の梅菊に物語やう善日麿もはや十歳を超ぬれど。里の友達と物諍ひせしことともなく。走狂いず殺生せず。魚鳥の肉を啖ことを好まず。誰をしへねど。神に謹み佛を敬ひ親の機嫌を伺ひつ。山に登せ學問さして給はれや。出家さして給ひぬと聞事ごとに胸潰れ彼といひ此といひ。思ひ合すい十せのむかし。御身暦を懷妊せし折。出家にせよと蟹夢の告。我も五十路を越あがら。頼む方なき片海の此小湊の浦遠く。罪なき罪に身を沈め。浮ぶ時なき宿世の因緣。せめて暦を出家とせば。先祖の追福。身の得脫。御身も我も後の世の。深き功德のあからずやと。夫增が語れば妻も悅び。善日暦にしか〳〵の緒いひ喩し善師もがなと思うち。其年も暮天福元年癸巳四條天皇御諱い秀仁。後堀河帝の皇子よして。去年の冬。八十六代の王位を踐給ひ。今歳しづけき四方の春。人の心も世の沙汰もやゝ穩に成りにけり。こゝに小湊より北に當り。程遠からず清澄といふ山寺あり。眞言密宗の靈山にして寶龜二年の

開基あり。此頃の住職道善密師といへるい道德も高きよし聞傳へ次郎重忠い暦をひらき吉日を撰び善日暦を携て清澄に登り。諸佛坊に在します道善師にまみえあげ。此暦を徒弟になして給いれと。慇懃に頼みけるに道善師もいと快よく受肯つ。善日麿が容貌の優美にして遅しきを見て且惑じ且歡び。頂髮をかい撫つ。賢き兒ぞけうよりい藥王麿と改名せよとて。其儘此山にとゞめたるは。天福元年五月十二日。麿が齡十二歳の時なりけり。此より道善の御坊ふかくいたにり。手習ふ事を敎給ふに。二字三字ならずして。筆法書躰を書あすこと。年來修練の人の如し當山より南一重餘。に二間寺といふあり。此坊い道義とて。道善の俗緣の兄なりけるがけふ。茲に在して。藥王暦が凡人ならぬを見て。斯兒い往々我が宗風をも。輝やかすべきず能いつくしみて敎たまへと舌を卷て語りける。ろれより小學を始め。論語などいふ書より。すべて忠孝仁義を喩したる。儒道の書類を敎へ讀しむるに。一を聞て萬を知り。二遍三遍を過さずゝて暗。讀するをきくに筧筒の水の逆飛が如し。昔漢土の天台大師をさかりし時。父に伴はれて山寺に遊ぶ。その寺の住僧さし招ぎ。兒に尊き御經を敎て取せんぞと普門品三行ばかり。口づから敎たるに。苦もなく讀給ふゆゑ。和尙も不測に思ひ。一品を殘らず敎へたるに唯一

度にしてこれを誦じ覺えたるい。天台御年七歳の時ありしときく。今藥王が手習ふ事といひ物聽振の庸あらず東夷東條かたらみの。藻を苅海士の賤が家にかゝる。愛度兒の出生したるは。いかなる事と道者も。心のうちに驚きつ。又此山に修學する。所化兒達も並ならぬ立振舞の藥王やといはぬ者こそおかりけれ茲に母梅菊い去つ頃そのいとし兒を山に登せ遣後たえて信もせず。道法ちかき淸澄も海山隔つ心地して。彼方の天をうち詠め。人里離し山寺に手習ふ業と讀書の數々多き僧達にわらけおくもておされ。我父戀し母床しと。泣もやすると思わび。彼山深く尋んと。幾度も胸にあまりて言出るを夫次郎に窘められ。訪あとかたき淸澄の。山のはたてを我が子ぞと。霧に霞はかこちつゝ。憂年月を送られけるが。窘き婦女の心にい。思立矢もとどめ兼夫壻に詫てけふの日を。優曇華のさく心地して。磨が好る岩梨に種々の取物ろへつ。飾磨の褐の袷衣。赤取染の肌衣まで。僕の男に持つゝ。淸澄におもむきて山の登れどいかにせん。女人禁制の寺あれば五障の雲に遮られて。入事かたき密嚴淨土。心の月もいや曇り側の石に腰うち掛しばし憶ひに伏沈たまひしに。枯木を高く背負たる。寺の奴僕の山路より歸るを見かけ喃々と。呼とゝめ。此山の諸佛坊に學問せる藥王に母が參りぬ。疾出て無事ある顔

を見させよと。坊の庫裏まで言傳て給ひぬと詞せいしく頼みたまへば。寺の男いうあつきて杉の木闇森の下。茅もて葺るい裏門にや。彼方をさして喝ぎつゝ。いとも重躰に入にける。藥王いかくときゝ賢母にい似氣もあし。出家をさしにおこしたる。磨が安否を訪給ふい。投し礫を尋る迷ひ。値まじものと幾度か。思ひかへせどしかすかに。恩愛ふかき慈母を。遂で此まゝ歸しあゞ不孝の罪の深かるべし。昔唐士に曾參といふ孝子あり。他にありける日其母曾參が歸りの遲きを待わびて指を嚙給ひけれゞ。其心胸に應へ。いろぎて家に歸りしとぞ。曾子が母の嚙指の其子の胸に通じたるい親子いひとつ血肉にて冥合所感の不倶ありと思ひかへして師の坊にかくと告。寺門を出て慈母に。値給ひしに。梅菊いろれと見より走倚。藥王が手を取て此年月戀し煩ひはべるいと。喜の涙せきあへず。道理にこそと思いれけゞ。藥王磨い禮を正し。磨もさいつ年。慈父に伴はれまいらせて。此山に入し頃いさすがに里の戀しくて。時鳥なく梅雨月心の雲も晴やらず。漏ぬ軒端に袖のみぬれて。いとゝ悲しくありけれど師の御坊の情深く年月あがき敎の窓に書を讀。唐士の日本の古事をさへ。此彼と思合て此程い。心長閑き彌生空嶽いと高き松杉の。黑きに交る山櫻。さくかと見れゞ入相の。鐘の音に散花ふゝき。花より脆き

夢の世にゆめを重て猶さめぬ。惡業の因緣に繫れて。或時ハ地獄に泣。又ある時ハ天界に樂み又畜生に身を苦しめ。偶々人間に生れてハ。生老病死の四苦八苦。百年久しき胡蝶の夢。さめずバかゝる凡身の。いつか出離の期あらん。誠に百年の槃燈ハ風前の灯火。一念の發心ハ命後の礎へとかきゝはへる。暫も頓て出家して。かゝれとてしも垂乳根の撫給けん斯黑髮を剃落し佛の法弟の數に入。三寶國土の恩を報ひ。一切衆生を助る身とも成はべらバ先父母を救まいらせん。御經にも四恩のうち。父母の恩第一とこそ。佛も定させ給ふなれ。今生一世の恩愛ハ水のあわれ跡もなし。未來永々父母の。御側さらぬ大緣を。結ぶ猶ひの剃髮染衣。それをも思し譯られず。慈母の御歎き猶ふかくバ。暫が菩提の障りぞかし。此上ハ安否を問せ給はぬを。慈母の厚情と喜ぶべし。さすがに長き春の日も稍傾たり。木立の茂る淵陰ハ。里よりはやく暮るになん山路の程も心もとおくはべるいと。いと艱に急がせば。慈母も頻りぬ歎息し。しばし見ぬ間に。藥王が長者たる。菩提の月に心の闇も明げく。喩すべき子に喩されて。嬉泪に胸ふさがり。雖呼子鳥路わけて。泣々家路に歸り給ふ。此梅菊が涙を灑たまひたるを涕淚石とて今に猶。清澄の山路に殘りこゝに留ずる人々の。其むかしを思ひ出て。ともに涙をろゝぐにおん

有ける。光陰は弦を離るゝ箭よりもはやく。春と明秋と暮て。今年嘉祐三年丁酉の冬。藥王暦も十六歳にありければ道善密師道場を淨め。一山の大衆を集め。十月八日剃髮の規式嚴重に誦經梵唄みづから導師とあり。藥王暦は御聲いさぎよく。恩入無爲。眞實報恩者の文を三遍まで唱揚聲の黑聲を剃落し。紅白の袂も。墨染の袖とあらためたまひたる。此ぞむかし天竺國。淨飯大王の御子。悉達太子。御齡十九歳にして王宮を忍び出。玉の冠錦の御衣を御記念にといめ。麻の衣を玉躰に纏ひ。檀特山に分登給ひけん。昔の則の忍ばれて。哀にも尊くぞ思はれける。此より御名を是生坊遲長と呼改め。諸事を擲棄專一佛理に心をゆだね。眞言瑜伽の奥藏を學び給ひ。敎相には眞言三部及び諸論等。事相には求聞持等の印契を相承し。法兄爭顯義淨の二人ハ。所化僧多きその中にも。遲長師をふかく憐み。學問の志ざしをたすくるゆゑ。それかれと力を得て此程ハ一代藏經にとりかゝり。晝夜肺肝を碎き閲給ひしが。一日心に思すやう。佛法といへバ。釋迦一代の法なるを。今八宗十宗に立別れ。己が隨意弘る法を。我こそ佛の本意を得たれとおもひ。彼をそしりこれを譏。さらに一轍おきに似たり。抑我が本師釋尊ハ。いづれの宗旨ぞ。眞言宗か華嚴宗かまた敎外別傳の禪宗なるか。今御經を案ずるに。決して諸宗兼學

にあらず。大海の潮に二の味おく。如來の教法さだめて二の道いわらじ。其會釋を知らんにい智者とあらでい協ふべからず倖ひ當山の本尊虛空藏菩薩い東方莊嚴世界の大菩薩にして一切衆生に智惠を授けんとの誓ひありしこと。大集經に見えたり。其上法堂に安置の尊像い。實龜の開闢以來稍五百有餘年。利益多かる靈像ときけバ茲に祈願を籠ばやと。湯水を絶。食を斷じ。御堂に籠て持念する事三七日。願くい佛智を得て。如來の本懐をさとりあまねく諸宗の是非を明め。佛燈を一時に揚て。末世五濁の闇を照べし。願くい衆生利益の大願をあはれみ。日本第一の智者と成て給はゞと。丹心骨を削りて祈ける。此御堂の側に清水を湛へし池あり。此池水に蚤も猶明星の星影赫々として浮びたるは。いとも嬉しき奇瑞かあと。いよ〳〵丹誠斬念ありしに。その願滿する曉天に。夢現の境もおぼえず。朧朦たる其中に。白髮銀の如くにて御眼の光冷凄き異人。影向ありて右の御手に光明まばゆき。大寶球ともいゝつべき玉を持汝が祈る智慧を與んずとて。斯を渡し給ふ。蓮長師右の手よこれを受て。左りの袂に入收給ふ嶺の嵐の音そひて。身に降かゝる露しぐれ。佛前高く見仰れば。本尊の寶龕にかけし關鑰の。おのれと脫て金扉い八字に開てありければ。大願すでに滿足しぬと。心中の喜悅たとへを取に

物なく。此曉來の靈瑞にふかく。佛恩を報じ。本坊へかへらんと。御堂の階砌三四級下立給ふ其折柄。俄に胸膈氣逼り。夥しく血を吐て。ゆの德氣絶し倒れ臥給ひけり。同寮の所化これを見出し。坊に擔ひ歸り介保せしに。忽夢の醒たる如く。聊御身に勞を覺えず。剩へこれより境智格外にひらけ。雲霧を拂て天の三光を見るが如く萬法方寸に浮ばずといふ事なく辨舌ま た明了にして。電光の如く。一言のもとに衆理を決す。これ全く凡躰不潔の血を吐つくし。暗に六根淨を證得おし給ひける。利驗の程こそ尊とけれ

清澄寺は千光山と號す。寶龜二年不思議律師の開基にして慈覺大師これが中興たり。いま寺祿八十石。東寺流の眞言に屬す。本尊虛空藏菩薩は開山律師の靈作ありとぞ。此山は宗祖大士。初發心の靈地にして。此寺に修學ありし事七年に及ぶ。慈母梅菊が。愛別の涙をろいぎし泣涙石。普光天子の影を宿したる明星が池あり。凡躰の血を灑したる處には。その地に生ずる笹の葉に。血の染たる斑あり今に凡血の笹といひ傳ふ。まことに當山二大法基元の靈地とぞ思はれける

かくて曆仁三年戊戌の春にいたり。蓮長師はいよ〳〵勤學いとまなく。木を毬の如く丸く削

なして枕とし。御身つかれを覺ゆる時は。此枕に肘を倚てしばし氣を休給ふ。もし眠氣付ぬれば。轉傾くゆゑ快く睡につきがたし。これゝ唐土にて圓枕とて。學問に心寄なる人の。造り初めたる物ぞときく。頸に繩をかけ。股に錯を刺て睡を防ぎしも同じ心の學びの關。これは經學一世の敎。これは內象八萬四千。釋迦如來の說給ひし。一切經ときあえしは。七千三百九十九卷之されば大聖釋迦如來。十九歲にして出家まし〳〵御齡三十成道あつて。擅特の峰を出。寂滅道場において。十玄六相の理を說給ふこと三七日。これを華嚴經といふ。これ釋尊說法の最初なり。これより阿含十二年。方等十六年。般若十四。年以上四十二年。佛壽七十二歲の御時。鷲の靈山の嶺に。法座を移させ給ひ。法華本迹二門を說て。如來出世の本懷を述たまう事こゝに八年これを法華經といふ。華嚴。阿含。方等般若治華あの五時を說了らせ給ひ。御とし滿八十にして跋提河純陀が家に入て。一晝夜涅槃經。あれを遺誡に殘して。二月十五日涅槃の雲にかくれ給ひし。此一代の說相を。一切經とは名づけたり。道長師は此頃漸く一切經を閱つくし。今宵更闌かたはれ月。さし入窓に涅槃經を讀給ひしに。此御經の中に依法下依人といふ金言あり。文の心は世の季にいたれば。我が道を學ぶ者。詞を巧み我意をのべ。種々の宗旨出來すべし。これに

依て我が入滅の後は。いかに智惠かしこく。其位貴くとも人師の詞は用ふべからず我が說置經文に依て佛法は判ずべしと。末代の規を定め給ひし最後の御遺言あり。道長師は此御經を拜し。夜學の燈漿も濕ばかりに。御淚に咽び給ひ自餘の宗旨は未だあれを知ず。我因緣あり て。眞言密宗の山に出家を遂當宗の流義を學ふに。大日如來より密法綿々として。今に傳へたれども。金剛智。不空等の說を本とし日本にては弘法慈覺兩大師。私の了簡を加へたる事のみ多く。眞言一宗既に佛の法にあらずして。凡夫の法あり。亦同じ御經に釋尊ひとつの譬諭を擡給ふ。おゝに巨なる象一頭を繫ぐ盲人多く。聚りて探り見る。後に一處に會合し一人の盲目がいふ樣象は漆に塗たる桶の如し。一人はいやとよ我が見たる象は掃箒の如しと。又一人は太皷の胴の如しと。又一人は箕の如しと。衆の盲人諍て止ず。されば其耳を捉へし者は箕の如くおもひ。腹を撫し者は太皷の如くといひ。尾を撚りし者は掃箒のおとしといひ。脚を抱へしものは塗桶に似たりといはん。皆これおのれが探り見たる處を知のみにて。全き象の形を辨へざるありと說たまへり。我身不肖なれども。八宗十宗の人師。塗桶よ掃箒よと。已が得意立たる諸宗門を。十方無礙の眸子をひらき。彼の全き大象を一睨に見定べし。父母養育の恩を棄。此無

爲の敬に身を任するもの何ぞ凡僧傳來の教を守て。如來の金言を慕ハさらんや今ハ此山の書籍もよみつくしぬ。問べき師あく語るべき友なし。いかんして我志願をはたさん。此磯村山の片邊土に。むなしく心を焦すあと。いかにも惜き月日なり。いでや鎌倉に趣て。其宗々の明師に問ひあらゆる和漢の書を讀ん。智解をたすくる邇徑あらんと。今年秋の初つかた。師の御坊にしばしの暇をこひ清澄をうち立て。上總より下總にかゝり。武藏なる隅田河原に着給ひけり。これぞ名におふ武藏野や。郡ハひろく十郡にわたり。西ハ雨降山。秩父が嶽。南ハ多摩川。北に荒川この隅田川ハ東の境にして。郊原四方何百里。旅人のゆく方々に踏分て。蜘手に迷ふ途多くむかし桑平の朝臣。水禽を見て。都こひしと詠れたる。其名所もおぼつかなく。渡守の男に問へん。彼方の山ハ待乳山。おもかげにたつ嬉の森鵲の群たる千代が岡。春にあらねど霞が關かゝる果なき野原にも。名所ハ多くはべるかしと。穏末波よる枯蘆を。分つゝ片舟さしよする水棹の下に驚きて。立鳥よりも旅人をおどろかしたる秋の風。野寺の鐘を吹さそひ。日ハくるどれも虫の音に心なぐさむ花野路。入山の端の遠くして。月さへ影を宿したる。千草の露に裾うち濕り。夜も稍初更に垂ゃたるころ。海近けれども船よする。浦なきゆゑに名づけたる。帷子

の里にたどりつき。宿りを求めばやと思せども賤が棲居の舍のみなれば。人宿すべき方もなく困じ果給ひたる折。しげる。木樺の生垣を一圍なる門口より。旅の御僧よやどしまゐらせんとありければ。蓮長師ハいと喜び茲に一夜のめぐみをうけ給ひ。圍爐の端にさしよりて。折焚柴に袖を乾かし。おはせしに家の主ハ持佛に向ひ。念佛してありけるが。稱名はてゝ茲に居倚種々の物語にうち混て。蓮長師の尋給ふやう今宵こゝに止宿をめぐまれて。やどりて見れば いかにぞや幼稚者の弄器獅子の頭に狗張紙土もて造る偶人の數の雜器にうち交て佛像ところあれあやしみて。手に取見ればこはいかに。本師釋尊の立像にて。押たる金も村剝て御手に鼻に闕損じ。いと勿躰なくおぞましくと。思ふにも似ぬ念佛三昧我さへこゝに宿したる佛法師依の此家に似氣なき事と意も解ずはべるゝと。難じ給へば。主はうち笑。竹の火解に掻灰なでつ扨とよ不審は道理至極。我も初は佛と云ば同じ佛。經と云ば同じ經。神も佛も別なしと思て有しに。近頃所用の事有て。久しく鎌倉に在しに當時念佛の生如來大阿彌陀佛とて尊き聖者のおいすときゝて。其處に受戒しまゐらせて。念佛安心の要路をきくに。一代聖經。八萬四千其數多くはべれども。末代の我等が修行には。念佛三昧に如はなし。統て釋迦にも。藥師にも心うつ

して拜をば。禮拜雜行とてその修行の穢ゆゑたとへ念佛稱名するとも千中無一とて。千にひとつも往生は遂がたし。唯諸佛諸神を振棄て一向に念佛せば。よしや五逆のあればとて。弘き誓に漏やはする。斯は彌陀尊の本願にて。その御經に明白ありと。法然上人の選擇集とかいふ書を講釋して。いとありがたく說たまふ。かゝる事の實なればこそ。當時京鎌倉はいふもさら也。上臈も下臈も物識たるも知らざるも念佛する人は濱の砂の數多し。天台眞言諸宗の名僧智識さへ。今はとあへぬ人もなしかゝる。尊き敎をきゝ。家にかへりてこれまでの持佛や釋迦を捨るも惜ど。雜具の中にうち入て。納戸の陬にさし置たるを。いつの程よか小童等が持出て。笛に太鼓にうち交て。獅子と釋迦とを曜らせて。遊ぶものから打割て。風爐を焚には增ら めと。其儘にさしおきつと。語るをきゝて蓮長師は且あきれ且悲み法衣の袖に涙をおさへ。我は房州小湊とて浦崎ちかき山寺の僧なるが齡今二十に超ねどもつら〳〵佛經を見るに今此三界は釋迦一佛の有緣なり彌陀稱名をすゝむるとて本佛釋迦を禮拜するを雜行とて誡めたるはいかにぞや。翳の黃色き我口に。言はいはぬに增れども。一夜の宿に露しのぐ。惠みに報ひはべるぞよ。昔天竺伽毘羅衛城に五百の猿猴あり。折しも秋の最中ころ。月いと冴る溪河にうつりし影を臨見てわれあそ採らめと爭とも。さすがに深き淵河に猿の智惠の淺ましく。ひとつの猿が松の下枝に取つけば。又ひとつの猿ろの下の手に釣さがり。かくしつゝ五百の猿は五百尋の綱をさげたる如くして。漸く水よ手をさし入鋭と光る月影を蔦よ藤よと蔓もて。纏ひからげて採ともはてず。斯夜もすがらあすうちに。松の木垂の枝折て。五百の猿は殘りなく水に溺れて死けるとぞ本佛釋迦の月を觀ず迹佛彌陀の月影を一向專修の蔦蔓につなぎ取らんと思ふうち命の松の枝折て。奈落の底に沈みやせんと。いと懇に說喩したまひけるよ。若きにい似ぬ發明の御僧かな。夜もいたく更たるゝ。納戸に入て寢まり給へ翌日またきかんと。欠伸に念佛嘯ませて。主も其處に臥にけり。蓮長師ゝ明の朝こゝをうち立。先鎌倉に入ぬば。昨夜主の物語にきゝつる。大阿がもとに尋ゆき。當時諸宗に秀たる念佛に心を寄。淨土の安心を問ばやと。心いろげ。道はかもかず。漸く其日の未の牌その地にたどりつき。車小路といふ所にいさゝか緣故を尋ね。こゝに暫時と枕かる。鎌倉の繁昌は聞しに增る販ひと。往來せはしき市人に。旅の心を慰めつしばらく勞れを休め給ひけり。當時鎌倉の執權職北條武藏守平の泰時は。去る元仁元年六月十四日父義時の逝去あり。嫡子なれば其跡を繼て執政たり。泰時ゝ賢

良温順にして仁君の譽たかく。廉謙節義を心に存し。專天下の政道に預り。記錄所の門に鎖を掛置。不時の訟を聞給。毎月十日廿日晦日を決斷の日と定め。頭人評定衆を聚め訟への理非を決す。其政務嚴重にして。しかも慈愛ふかく。常に側の人に敬て宜ふよう人として足あとを知らざるゝ。人間一生の禍あり。足あとを知らずゝ百萬の財寶を積でも。安き心おく無理も非道もこれより起るなどいふよしを聞りて人の爲世の爲直なる道を喩給ふ故君の御側に伺候する人々は麻は交る蓬の如く。曲こゝるゝあらざりけり。時しも彌生十六日。評定所より退出の處。庭の一本の櫻花。そよふく風のおのふけふ。梢淋しく散ければ泰時しばしうち詠め。天下の政務にいとまおく。誠に花人を待ず。今年の春の色香にも飽で別るゝかなしさよと筆を染て

事しげき世のならひあろ物憂けれ花のちりぬん春もしれず

と和歌を詠じたまひき。かゝる優美にして明察なる泰時。晝夜心を政事に盡し給ふゆゑ。諸國穩にして。鎌倉も年々に販ひ增り。鶴が岡の赤橋の前にゝ常に騎馬の供待多く。長谷觀音の大路にゝ。矯飾代參の女乘輿ひきもきらず。大藏の樂師。供養終れは陪小路の不動に。開帳の標を

建綴寶街の遊女。佐々目が谷の歌舞妓。放下。物眞似。辻商人おのが樣々の稼業も。知らで被る聖代の恩。その街衢の繁昌ゝ今を盛りと見えにける。さても連長師ゝ象てきゝつる。大阿が住所をたづね給ふよ。御所より東十八町ばかり。霧が澤好見といふところに菴を結び。極樂往生の一門をひらき鎌倉中の男女をあつめ。法談す師も亦その席に交り。淨土の宗意を聽給ふに淨土宗といふゝ觀經。雙觀經阿彌陀經に。天親菩薩の往生淨土論をそへてこれを三經一論と稱しもて宗旨を建。我朝にて法然上人といふゝ美作國稻岡の人。父ゝ時國。母ゝ秦姓。ある夜靈夢に剃刀を呑と見て懷妊し。長承二年四月七日誕生在まし。生れおがらにして敏悟發明ありしが惠心僧都の往生要集を讀で初て一切の經論を捨て。念佛一宗を建立し給ふ。されべいかなる五逆十惡の凡夫ありとも。自力の根性を捨。南無阿彌陀佛とさへ唱ふれべ。此愚世界の湊を離れ九品蓮臺の彼岸へ。たやすく往生なすことゝ。ゆめ〳〵疑ひあらぬぞかし。法華眞言等の聖道門の難行雜行をバ擲置て卵糞のかゝる凡夫を救ひます大慈大悲をわすれなと建久五年甲寅。選擇集をあらはして。無常をさとす鉦撞木。わはれ尊き墨染の法衣の袖をかき合せ。黑谷吉水のわたりに道場をひらき。一向に專修念佛をすゝめ給ひける。壽永元暦の合戰

より。いまだ十年にあらざれゞ親を討れ子を殺され。兄弟を失ひ妻子に別れ。世の憂目を見たるもの。幾千萬ぞや幾億万ぞや。血腥き風いまだ街頭を去ず哄箭叫びの。脩羅のこゑ猶耳に殘りぬ。かゝる恐るしき憂世も唯一睡の夢なりけり。哀れはかなき飛花落葉の夢の世に何を樂み何をか待んと。思あゞ身もかしこきも。無常の風の心に染。亡人の菩提の爲。我が後の世の願にと。念佛の聲四海にかまびすく。何なる無道心の者なりとも。心弱くも皆法然上人の。唱名念佛になびかぬ草木はあかりけり。今法然上人建暦二年の遷化より今年暦仁元年まで。星霜わずか廿七年。敎逆はぬ十即十生。遵長師も此念佛に心を委ね。安心の法門に心耳を澄し給ひける。又この頃念佛者の語るを聞給に佐輔が谷に。然阿良忠上人とて法然上人の孫弟子にして學解ひろく念佛の得悟たしかあるよしをきゝ遵長師又こゝにも往通ひ三心四修の宗脈を受給ひける。それより延應の秋くれて。仁治もはや二年を送り給ふうち彼の好見の大阿上人。病の床に臥て。古今の興病を煩ひ。苦痛にたへかね晝夜苦の中を轉び泣叫びつゝ。虛空を掴で息絶たり。遷化の後。死骸を見るに身縮りて小兒の如く。其色黑くして墨を塗たるが如しとぞ其頭身の弟子勞の物語にきゝ。さても淺間敷ことかな。守護國界經には死人の十五相を說て。地獄に落るを明し。天台學訶止觀にも。死人の形相を委しく敎へ玉ふ。此經釋を鏡とするに大岡上人の地獄は疑なし在俗の身あらば過去の宿業も。こゝに現るともやわらん。道德圓滿の上人數年の修行ろの詮あく。臨終の正念を失ひ。最後に地獄の相を顯したるはいかにぞや。これ正しく佛意に協はぬ處ありて其現罰にあらぬやと我と問。我と答へて點頭たまひけり。又此鎌倉の繁昌に諸宗の學者。十宗の碩德春の野に立芽花の如く。いときら〳〵しくみゆるものゆゑ。かれに問これに尋。學解を凝さんと思せども。いかんせん鎌倉も泰平久しき御代の習ひ文道武道美桑多く萬般すべて花車風流になりもてゆき琵琶を彈じあるひは爪琴小鼓に囃すしらべの糸竹も。都下の白拍子。袂かざして媚を唄ひ。なまめきわたる風俗の。いつか出家に押移り錦の袈裟に七寶の珠をつらねし百八の。煩惱つゞく飽輕湖。佛事供養も布施からと濁心の貪慾無慚。まことしからぬ事のみ多く。我も亦たゞ假初の草枕。五年こゝにありければ一先安房に立かへり。其上に兎にも角にも思立ばやと。踏國の要意彼あれと調へ給ふうち。二月四日夜に入。戌の刻頃西の天に赤白の氣三筋たちて。一筋は程なく消て赤き一筋火の柱を建たるが如く。中天に衝立たり町中の男女驚て見物す。御所においては陰陽師。安

貞を召て御尋ありけるに、これは彗形の氣と名づけ俗に火柱とゝなへ、昔村上天皇康保年中あらはれたるよし書記を引て言上せば、いかなる事の前表にやと、上下安心もなかりける。蓮長師は此取沙汰を後にきゝなし、房州さして歸りたまひける。幾程なく同七日の朝一天曇りて雨にやならん、風にやあらんと見うちに、已の刻頃大地俄に震動し、山鳴谷應鎌倉府内の大小名、堂塔伽藍を搖潰し土煙天に翼ひ暗夜の如く、其中より處々に火燃出男女の泣ひめく聲いと哀れに震動の間にきこへ、物凄も懼しあんといふばかりなし、此一朝の地震に人畜牛馬等死滅損傷その邊際を知ず、御所よりは四日の火柱、七日の地震、あはせ記して京都に注進す、かゝる鎌倉の騒動を旅にきゝつゝ蓮長師ハ東條小湊に歸り着、両親のかわらぬ面影を拜し、鎌倉の物語に春の一夜も明やすく、次の朝は清澄に登、師の御坊の恙なきを喜ひ、此年月心をひそめ、修行なしたる淨土の一宗、その外諸宗の論義、古今名僧の物がたり、彼此同座の僧達へも談じ聞せ給へゝ師の道善をはじめ、二間寺の道義も、この座に在し、淨顯義淨ろの餘、青蓮明心等同寮の所化まで、耳新しき物語に感入、ろの蓮辨といひ才學といひ、一山の衆徒、膝をうつて歎歎し、師の御坊ハ喜びの涙席を沾し給ひける、清澄にしばし在すうち、小乘權大乘、法華

眞言の四門の戒行の次第を詳らかにしるし、戒躰即身就佛義と名づけ、山内の僧達に示し給ふ、これ法門筆作の初なり、かくて倩世の有樣を思ふに、鎌倉ハ當時日本の大都會なれども法を弘ひるにハよろしく道を學ぶには益なし又かゝる山寺ハ閑寂なれども書籍に乏しく其上道を談ずる友もなし、于將莫耶の名劍も屢磨ずハいかにせん、傳へきく比叡山ハ傳敎大師、四乘戒壇の山といひ、また三井寺東寺、南都の七大寺は今の僧はうとくもあれ、其宗々の開山ハ入唐渡天に難難を凌ぎ、苦修練行の跡なれば、經論書類も定て多からんいでや、彼の山々を遊學し先師の道をうかゝはやと、其心擕しつ、旅の用意も僧の身ハ、立ことやすき水禽の跡、におさしと道善御坊、又同寮へもいとまを告、今年も暮る秋の日の日影に笠をかざしつゝ、京都さして發足ありしたまひけるが、鎌倉に立寄年頃親しき人々に音信給ふに、世に國家の棟梁と賴つる、北條泰時も、此六月十五日春秋六十二歳にて、草頭一時の露と消たまひ、暗に燈灯を失ひたるが如く、政道の古實忽に亂なんとす、泰時の嫡孫四郎經時、武藏守に補せられ、鎌倉の執權となる、萬端のこと昔に似ず、人のこゝろも改り、ろのうへ去年丑の秋より、五穀登らず二年の凶作、四海こゝに困窮し、世のあさましき事いふばかりなし、蓮長師ハ鎌倉の旅の

やどりに思はずも比叡山の學僧登海といふ人に因を結び。種々佛理を談じ。年おろの友の心地して。底意やくものかたらひ。我も叡山に學問の志願あるよし語り給へば。尊海も大きに喜び。已れ座主信尊の法弟にて徑庭あれども。叡山の四俊とか。人も筭る者あるが。今般法用の事ありて鎌倉の御所に仕候し。そが用もはや果たり。御身れ才學の壯士とおぼゆるぞ。疾叡山に登り給へ。我ともあひまいらせんとありけるにぞ。閤に灯火渡りに舟願ふてもあき同伴と。遵長師れふかく喜び。秋の日あしの短くて。其夜れ懐嶋に一宿し。蕊猶くらき竹の下。けふ越わぶる足柄の關路はどなく駿河ある百度見ても雲風に姿さだめぬ富士の嶺のけふも見へけり明日れまた。宇都の山邊の蔦蔓わくるも夢か武士の。矢矧の橋の一筋に皇都をさしていそぐ身れ。間遠の渡し風寒く。旅の疲衰へうつさじと。けふはた曇る鏡山志賀の湖水底清き遵長師れ。彼の寺海に伴はれ。坂本より叡山に登給ひ。つら〳〵四境の風景をあがめ給ふよ。西北れ山城國愛宕郡にわたり。東南れ近江國滋賀郡に屬し。嶺れ四明が嶽とて。人蹟絶たる高嶺にしてこゝに登れば諸天の御聲もきこへつべし。鴨川大井の二流愛宕高雄の山々より。淀川の流れ遠く。難波津の浦より。蒼海渺々として。帆を掛たる船れ。昆蟲の蠢くに似たり東南の眼下にい

唐崎の松。粟津の濱。湖水の樂波悠々として沖の小嶋。竹生嶋れ水鳥の波に遊ぶかとあやしまる。山水の美景。四境を遶らし。萬古の風色足ずといふ事なし。其棲べき學室のわたり樹木森々と生茂り。庭に蘚蒸苔滑かに。山れ默して佛の禪定を示し。水れ語て如來の演説にかたどる憶蔗の經論れ一山の草木より多し。三千の學僧れ智解を凝してかしましからず。實や傳教大師はじめて此山を闢き給ひし時

阿耨多羅三藐三菩提の佛達我が立杣に冥加あらせ給へ

と願給ひしもいと尊く。天竺の靈山。唐土の天台山も。かくやありけん。我此山に久しく修學せば。一世の大願も茲に成就すべしと。深く喜び始めて法華經をもつて我が本分とさだめ。三塔の學衆に親み。天台章安。妙樂の釋疏を熟覽し。天台一宗の學を講ずると。其一日の學問餘の僧三年の修行もおよぼ及びがたし。こゝにおゐて當山の役寮に評議して。東塔の圓頓坊といふ一院を住職せしめ。此ころ靜明。經海又心賀などいへる。何れも三千大衆の上臈にして。博學の聖たかし。遵長師れ常に此等の人に立交り經を講じ釋を論ずるの外。他事あく月日を送り給ひけり。今朝しもまた。常にかはらず香を拈り。日課の御經に。心をうつし。梵音唄々と讀誦

し深く佛意をかんがみ給ふに。上行無邊行等の本化の大菩薩末法第五の今に出現し。法華經をもつて廣く濁惡の衆生を救ひ給ふべきよし。御經に明かなり我佛緣かひなく。進では天台傳敎に見へず。退ては彼の上行菩薩。出現の時にもいまだ逢奉らず。何をたのみ誰を師として。今經の利驗を仰がんやと。御涙そゞろに膝をうるほしける折。はや講堂に大衆を聚る鐘の聲。溪間の雲の隙もりて。皇々ときこゆるにゞ御經を。恐おさめつゝ三禮し。徐々と履を曳て講席に出勤なし給ひけり。此日學徒多く聚りて。講主より法華經と大日經との差別いかにといふ問を大衆に出す。遵長。席を進み法華經は醍醐の極說。大日經は生蘇味の椏敎。力士と小兒の腕競べ。此二經に何の論かあらん。當山は慈覺大師に至て。開基傳敎大師の法水忽ち彼の眞言の汚に濁りたりと。粗ろの條々を擧て。席を打て談じ給ひけり我朝法華の元祖傳敎大師といふは。神護應雲元年をもつて生れ名を最澄とよぶ。初め山科寺の行表僧正を師として六宗を學ぶ。後漢土に渡り。天台の敎法を傳て日本にかへり。大ひに華嚴三論等の六宗を破。南都七大寺の高僧蜂の如く起り。傳敎大師を佛敵と罵る時に延曆廿一年正月十九日。桓武帝高雄寺に行幸ありて彼の南都の六宗善議勝猷等十四人を傳敎に召合給ふ。日出ぬれば星かくれ法

華の大典ひとたび出現して一切の諸經。何の光輝かある。唐の天台は釋迦に信順して。法華を四百餘州に揭。今此傳敎は天台に相承して今經を日本に弘通す。獅子一聲吼て百獸腦腐るが如く。南都の六宗跡を削り。六十餘州傳敎大師に歸伏せり。しかるに法弟義眞圓澄はその法を守護り給ひけれども。慈覺大師弘法の眞言とおづけ。又別に理同事勝といふ義を立て。玉に瓦をそへ。酒に酢を加へたるやうに。眞言と法華と習ひ合せて。敎山の宗脈こゝに濁りたるよし。此席におゐて言出し給ひけるにゞ。一座興さめて見へにけり。兼ての學友尊海。この座におはしけるが。遵長師の袖をひかへ。講論果て我が坊にともなひかへり。筑紫背振山の茶を煎じ。拙うち豆に蕪菁の漬物おゞ取いでゝ。發應がてらうち解ての物語に。遵長師宣樣此年月天台傳敎兩大師の遺敎を深く考ふれば。慈覺大師こそ心得ぬ。身ゝこの山にありて其宗流を繼おがら。心ゝ雪と墨染の。袖にも耻ぬ師敵對今ゝ一山のとりなく。何時しか慈覺の宗風に落果たり。其綽譯を知ずして。在す君かゝ君ゝまた。いかが思すと詰り給へば。尊海もなしうつむきて。應りせず。ひろかに其大機秀發の。才智を感じける。遵長師は一山の老弱みな其實學に懷き今年元寛四年午の春。横川華芳谷淨光院に住職せしめ。圓頓坊を兼帶して名を三塔にとゝ

ろかし給ふ。三井寺。南都。高野山の遊學も皆これ。敵山修學の餘力にして春秋あはせ十二年此山に心をとゞめられ。一期の修行。全く當山に成熟するぞ思はれける。此程い一代經の要文の處を抄書し三藏要文といふ書を作て。學衆に示し給ふ。猶當山の宗風の乱れたるよしを時々參會の序をもつて。此事を歎き談じ給ども。承和このかゝ三百有餘年。慈學の學風此山に染中々ひるがへるべきにもあらず。同友の智識博學の輩も。これを聽て悅ばず遂て苦々敷おもひけるもこれ全く傳敎大師の化緣こゝに斷絶の時節にやあらんと深くなげき思しける

これより折々京都に出て。内日さす大裏山の春のあがめに。九重の空いと長閑に。百官百司の袖を列ねて參内するありさま。また赤裳曳官女上臈達の花見がてらに神詣を促し。都畫の嵯峨野に若菜を摘。土筆を折。さすがに京の夢氣色夢と悟りし世ありしも。現おゝろの移りまて。柳櫻をあざまぜし。都を昨の唐錦あがめもあかぬ風景を。遠近見めぐりつゝ。その夜い五條油の小路。天王寺屋といへる。書籍を商ふ家に宿り給ひしに。主翁淨本。性賀篤實にして才あるものゆゑ。はやくも師の尋常あらぬを察し。一向こゝにひきとゞめ。妻もろともに疎略あらずもてなしける。これより京都に出てい。いつも此天王寺屋にやどりを定め。主夫婦も他事

なく尊敬せしも。不測の大因緣にて。後年に及び主翁淨本うの妻妙運ともに法子となり。淨本い弘安三年九月十一日をもつて卒し。其孫通妙宅を轉じて寺となし。本蓮寺と號す。永祿二年中興に及び本國寺日栖上人。寺號を改む今の妙蓮寺これあり。さても蓮長師い淨本が厚き情を喜びこゝに滯留なし給ふに此頃圓爾和尙とて。普門寺に住し。臨濟を弘むる禪僧あり蓮長師折々この方に遊び給ひたるに圓爾和尙もその博學智辯を感じ其法弟等に向ひ師を指ざしかゝる器量ならでい。衆生の導師にい成がたしと語られけるゆゑ。其頃人いひ傳へて師を輕からずもてはやしけるとぞ。圓爾い後に聖一國師とて世に名高く。寛元年中九條關白道家公の本願として。一寺を建立す。蓮長師平日の交り深かりければ。結緣の爲に大なる良材を一本寄附ありしに。程なく諸堂結構して。これを京都五山の第四に准じ。惠日山東福寺といふ。今にその頃りし材木い柱とありて。これを日蓮柱と稱し。世に奇特の利益ありぞて。削り取者多かりける。又同頃聖興寺に道源といふ僧ありて。曹洞一派の禪を華洛に弘通す。蓮長師又此僧にも親しみ給へり。今京都にい道源禪師圓爾和尙といひ。又其上に唐の禪僧道隆蘭溪和尙後に鎌倉建長寺の開山となりし大覺禪師とて。世上に聞へたる唐僧の來朝して。泉涌寺の來

迎院に住居し。世の渇仰大方ならず。蓮長師これを聞給ひ。泉涌寺ハ禪律眞言淨土四宗兼學の大山にして。開基已來宗朝より渡りし經論その外佛具等もあまたありときく。能僥ひと來迎院に入。道隆禪師の會下にひそみ。禪宗の見性成佛の工夫を凝し參玄衲子の塵に交り給ひけり。此禪宗といふハ楞伽經。楞嚴經。金剛經等を大旨として其宗風他の諸宗に似もつかず。大聖世尊一切經を說終り。機緣の薪盡。跋提河の邊に入滅の時。人天四衆。五十二類悲歎の涙雨と降す迦葉尊者。雞足山の洞より。涅槃雙林のもとに來り給ふ。如來寶棺の中に在して。華を拈て見せ給へば。人天大會その意を悟る者なし迦葉尊者ひとり微笑たまふ。これ心を以て心に傳へ。正法眼藏。涅槃の妙心と名付たり。迦葉この佛心を得て。此を如來禪と稱すのちに南天竺の達磨和尙震旦に來り。其心印を傳へて。敎外別傳と名乘り。此宗門ハ不立文字と立て。一切佛經に依らず。一代聖經ハ月を指ゆびの如く。月を見て後指何の用かある。經論ハ瘡を拭ひし紙屑佛像ハ尿壺を掻さぐる棒木あり。釋尊の頭を踏で初て佛果を證すとのゝしり。腕を切て明悟し。猫を殺して悟道し。旗の動くにさとり。瓦を投て得悟す。これを直指人心見性成佛といふ讀經修學を破んじ。座禪工風をゝ專にす。凡俗の耳を驚ろかし。愚昧の膽を奪。法外不測の宗旨なり。此宗の日本に渡りしハ。仁安三年釋の榮西。天台山の敏禪師より。心印を傳へ歸朝有て建仁寺を草創し。これより禪流海內に弼布。蓮長師ハ此宗風により。しばし禪機を凝し給ひけるゆゑ又思立て江州滋賀郡三井寺に趣給ふ。この寺ハ比叡山に先立こと一百餘年。天智帝第五の皇子。大友の殿宇を寺とし。園城寺と名づけたり。本尊彌勒菩薩にして。五十六億七千万歲龍華の成道を期する暫ふかく。其三會の曉を契らん初ぞと。入相の鐘に無常の響をつたへ。志賀の花園に無我の嵐を觀ずるもいと尊し。當山の中興。智證大師ハ讃州の人あり。十四歲の時。敏山に登り義眞和尙の法子となり。後慈覺大師に與同し。口に天台を唱へ。心に眞言密部を存しかも大德にして三代の帝王の御戒師となり。世上の尊敬大かたならず。かく盛おりし蹟なれば學匠も亦多かり。ひとたび其境に入て。不測の法理をも尋ばやに其學窠に入て。智證大師傳來の舊記。書錄を讀給ふに。皆これ慈覺の同論にして。寺門山寺ともに法華經の蹟を絕し。天台傳敎ろのおもかげもといめず。日本一宗正法に背き釋尊の本懷を滅却す。哀れこの暗のうつゝに迷ふある一切衆生ハ何を頼みとして。後の世を助からんと。兩眼に御涙をうかめ忙然たる折しもあれ。澳をしあけ本院の所化見なれぬ僧を伴ひつ。蓮長御坊よ此ハ。ろの初め。此山

に剃髮したる者あるが。久しく鎌倉にありて。今又ふたゝび歸り登りし。善證といふ沙門あり此寮に同居させよと。學頭の下知なるゝとさし示せば遵長師ゝ唯々と應へ。式殿終て宣やゞさ ても床しき友を得つるかな。我さいつとし。五歳までも鎌倉に住で。親しきかたもいと多し。關東の動靜をきかん音信さへ。絶て六年をへしこゝに。夢路も遠き。鎌倉の安否を聞んうれしさよとありければ。善證坊ゝ歎息吐我れ前年齡いと弱くて。師に誘れて鎌倉に下り。大慈なる大慈寺に住。思ふに增る府内の繁華。かゝるめでたき地に棲ゐろ。世にあるかひの果報あれと送る月日の箭をはやみ。幾歳ふりし白雪の。積る病ひに師の坊の。消て跡なき我が薄命寺内の親しき友達ゝ。いと戀にといめもしたれ。近年つゝく鎌倉の凶變に袖うち拂ひかへり來ぬと。舌を卷ての物語遵長師ゝ耳を聳て。その鎌倉の凶變とゝ。いかゝなる事と根葉分て問はるゝ善證膝つくろい。されば。とよ。鎌倉將軍頼經公ときこへしは。二歳の御時關東に下向なり九歳にして。征夷大將軍に任ぜられ今年三十にも得あり給はず。どかく世を憂事に思召給ふろの根は北條一家權威にほこり將軍家はあれども無が如く其上諸國に非分の沙汰のみ聞へ彼是御意をいため給ひ明しき間なき御病惱ことに去る寛元元年。極月廿九日の事ありき。白

き虹唯一筋日輪をつらぬいて。一天に跨りたりあは。不測と御所のかしましきに。將軍家御庭に下立これを仰見給ひしに。俄に御目眩竦毛ければ。いろぎ其儘御殿につかせ給ふ。これより雨風度々吹荒て時候順當ならず是に依て其翌の辰の三月將軍家御心頭とあつて鎌倉中の神社佛閣殘りなく御順拜あり同四月廿一日御嫡子頼嗣公御元服まし〳〵京都へ奏聞のうへ征夷大將軍に任じ給ふ。御齡わづか六歳なり。同七月五日先將軍頼經公は御齡廿六歳久遠壽量院に入て御飾りをあろし。入道なし。御名を行知と稱し。年來の御本懷ありと。悅び給ひしこと心無き下賤の者まで。聞も勿躰なくかあしき限りと。皆人いひ合。世の中何となく物哀れに。頼少く覺るに。打つゝき去年三月の彗星。これまで日本にありとも聞ぬ。怪しき形ありと思ふ處に。今年寶治元年。未の三月十二日の夜。戌時に大ひある流星いでて。丑寅の方より未申の方へ飛渡る。其長五丈ばかり。虛空をわたる。その光り燈の如く。鳴響く響。大地に震動して雷電より凄しく。人皆魂を消ぬ。同十七日天氣うらゝかなる長天に。黃色なる蝶の數限りもなく飛聚り。幅一丈餘長十丈ばかり。模樣亂れず。恰かも黃色ある旗絹を。ひるがへすが如く飜々として虛空にひらめき。あるひは高く雲間にかすゝ又は近く軒端に舞けるにそ。鎌倉の町中。あゝ

よ。かしおと見物せしが。ばてい破落〳〵と飛散。さしもにひろき鎌倉中の人家に飛入て死しぬ。昔朱雀院の御宇。承平の初。常陸下野の兩國に。黄色なる胡蝶多く聚りしが程なく相馬將門。反逆して東國暫く亂れたる事ありきと。昔語りをきゝ傳へ。安き心もあらざりしに。同廿一日の事なりき由井が濱の沖俄に紅ひに變じて。その色朱を流したるが如く。大海皆血潮となり紅ひの波。岸を洗ひ。巖に生ひし磯草も。砂に交る種々の貝も。礫も。皆その色に染成て珍らしくも又恐ろしと。市中の者見物をさへ爲ざりけり。御所より執權を始。大小名までそれ〳〵由井が濱に出馬ありて。その不測を見屆給ひけり。此月十一日。奥州津輕の浦々。海の湖水血に變じ。あやしき魚數多く死して流れよりぬ。其長一丈餘。手足ハ人間の如く鱗細にして頭と尾鰭ハ魚なりしよし。彼の國司より注進す。これに依て。博士を召て御尋ありけるに。先例こゝろよからず。昔文治五年の夏。此魚あつて泰衡滅亡し。又建保元年四月。この魚鎌倉の海に見へて。和田義盛亂を興しろの一門滅亡せり。此魚の怪異ハ。世の中の不祥あるべと論なし。但し海水の血に變じたるハ。和漢兩朝前代いまだ其事をきかずといへども。大方天下の御大事あらんと言上せりときく。彼といひ是といひ。斯春の不吉の凶惡。耳目を驚かし鎌倉の上下万民み

な面色土のごとく。魂おのゝき。恐しなんど言ん方なくはべるゝと。其を見る如く語りければ蓮長師ハあまたゝび歎息し。日月二天いまだ地に墮ず。水ハ流れ。火ハ燃る。此世の滅する壞劫にはよもあらじ。其上天下の政道正しく。民を撫。下萬民ハ五常を守りて。五倫亂れずかく正しかる世の中に。天地の怒り烈しきハ。鎮護國家の佛法に。僻めるとの有もやすると。思ひあまりて口籠に獨言し給へば。善證ハ聞咎。これ不審仰かな。京鎌倉ハいふもさらなり。陸奥筑紫のさかひまで明僧知識の開きたる。ろの宗門の數多く。佛法の繁昌ハ津々浦々のはてまでも。神に佛に敬ハね。人とてもなき此國に。何を罰して。辛目を見給ふべき事かハと。詰詞にさいあらじ。神も佛も妙法の。法味なければ此國に。鬼もといめぬ空蟬の。もぬけの殼に入替る惡鬼王魔のあす事より。國も衰へ世も亂る。嗚呼あさましと言が得に。いハで止にし御意を。知るよしもあき善證がたがひに顔を見合せて。ともに愁然たるばかりなりける。斯て寶治元年も半を過。七夕津女の空ちかく殘暑のたへがたきに。時知りがほにほのめかす。桐の一葉に思立。南都の大寺。高野をも遊學せばやとおぼしめし。三井の學寮に別を告。大津より京都に出給ふに鎌倉に兵亂ありきとて。下賤者の癖として。路に語り門ゐ傳へ。いと喋々しく聞もるにぞ。蓮長

師い天王寺屋淨本がもとに立よりて。南都に學問せんと思立しその志を物がたり。且また鎌倉の騷亂といいかなる事にはべるやと尋給ふに淨本い眉根に皺よせ。いざとよ昨日。註問の書籍をもたらして六波羅殿の記錄所の庇まで參りたるに。侍所の詰衆達。その始め終りまで。詳らかに聞し給ひたる。鎌倉の爲躰。その混雜に我が用い得達ずして歸り來ぬ。法師に用おき事あがら耳の法樂おし給へと。矢背の姥が手作とて貰ひたる初穂の黍の捏餅。折敷に盛てすゝめつゝさてとよ鎌倉に在て。三浦若狹前司泰村ときこへしい。鶴が岡八幡の東の山際に邸を搆へ。しかも先執權北條泰時の聟なれば。天下の政事をも談合し。世に輕からぬ家筋に在しけるこゝに又秋田城之助義景といふい。藤九郎盛長の孫にして。代々長谷の甘繩に住居し。當時の執權北條時賴と。無二の交りにて。これまた世に威勢を振舞ける。此兩家いともに累代の諸侯にして。右府賴朝卿このかた。鎌倉の城廓天下の礎石なりけり。しかるに此兩家たがひに權威を誇ひ。年頃快よからず。おりけるより事起り。前司泰村とかく我意を行ひ。我がまゝの所行多く。將軍家の下知を蔑り非法の働き多かりければ。北條時賴深く心を痛め。泰村が野心を窺め。泰平の謀ごとをおさんと。樣々よ扱ひ給ひければ。いよ〳〵心高振。增長して無謹

の事のみ多く其兄弟一族みな。其氣に乘じて見へければ。時賴も今いその謀叛の下心を。察し用心いとまおかりける。此事を聞傳へたる近國の諸士。我も〳〵と人數を纏ひ。鎌倉さして參著し。御所をはじめ北條家の邸を守護し。事仰山に見へければ。秋田城之助い折こそよけれと表に忠義の色をあらわし。內心にい日頃の意趣を晴さんと俄に下知を傳へ。大曾根左衛門尉長泰。武藤左衛門尉賴。椛十郎公義等はじめとして。一族同意の輩三百餘騎。若宮大路より神護寺の門外に屯して。幟を作り五石疊の紋摺たる旗を。さし揚節違橋の北に陣取たり。諸國の御家人すいや。軍が始りたるぞとて。追々此手に馳加はる。三浦前司泰村い。不意を討れて驚つゝ。家臣郎等に手配を傳へ。嚴しく防ぎ戰ふ處執權北條時賴も。今いはや事破に及びたれば是非もおしと。北條陸奥守實時をもつて。將軍家の御所を固め。北條六郎時定をば。討手の大將とさだめ。五百餘騎をさしむけられば。塔の辻より馳加はる軍勢。雲霞のごとく。既でに鎌倉大亂に及よび老たる親を負ひ。泣叫ぶ兒を引携。妻よ兄よと逃惑ふ。家財を荷ひ。雜具を運こぶの狼狽に。病人を踏殺し。幼兒を倒に抱懷き。西へ東へ辻々に泣喚るこゑ物凄く。修羅鬪諍の惡道を。目前こゝに感しける。さてしも敵味方の喫のこゑは。天地にひゞき。軍馬の物音地に震動

し。諏訪兵衛入道。信濃四郎左衛門。軍勢をはげまし。北の手を攻破る處佐原十郎左衛門泰連同十郎頼連。能登左衛門尉。あれを拒んで血戰し。しばしろの裟見へさりけるが。伊豆國の住人輕又八と名乘て泰村が南の小屋に攻登り。向ふ敵三騎まで伐て落し。小屋に火を懸さりしかば折ふし風烈しく。火焔四方に散亂せし。三浦の一族はや防ぐべき手立もなく。とても逃れぬ運命あれば。徒らに燒死んより。法華堂に引退き。故右大將頼朝卿の御影の前にて。自害し前代の御恩に報奉らんと。各北の塀をうち破り。法華堂さして引て行。泰村が舍弟能登守光村い。永福寺の惣門の内にて。郎等八十騎を隨へて。目に餘る大軍を引受挑み戰てありけるが。兄泰村が引退くを見て。死生を一所にせばやと。一方の敵をうち破り。法華堂をさして落行を。數万の敵軍きびしく後を慕て。追討にぞ三浦泰村が兄弟。毛利入道西阿大隅前司重隆美作前司時綱等返し合てい引討拂てい退きつ漸く法華堂に引入けるに續て込入る敵軍をば白川七郎兄弟岡本次郎垣生小太郎佐野三郎に防せて。頼朝卿の尊像の前に居並んで。高聲に念佛し。三浦若狭前司泰村を始として一族二百七十六人家臣二百廿餘人同時に腹を搔切て同枕に死々てければ申の刻にい全く戰い果にけり。嗚呼此日いかなる日ぞや。寶治元年六月五日。累代武

威を關東にかゞやかしたる。三浦の一黨。夏草に結びし夢の跡もあく。皆滅亡に及びける又泰村が妹聖。上總權之輔秀胤は。下總國一の宮。大柳の要害に楯籠り。近邊を押領し合戰の要意取々なりと注進す。依て大須賀左衛門尉胤氏。大將として二百餘騎。鎌倉を進發す。この注進櫛の齒を挽が如く。京都六波羅へ聞へ。海山隔つ九重の。空さへ曇る心地なれば。關東よすむ民百姓の心のうち。思やられてはべるいと。息つきあへず物語るを。蓮長師い心の底に斯あらん。佛法亂れば王法亂る。左もあるべき道理ぞと。明ていはれぬ本地の內證さても恐ろしき浮世には成果ける物かなと。深き心を岩が根に下漏水のいと淺く。いらへなし給ひつゝ。其夜い淨本夫妻が。わりなくとゞむるゆへ。一夜をあかしぬれより南都に趣き給ひけり。青丹吉奈良の鄉といふい。帝王六代の都にして昔い匂ふ八重櫻。けふ九重に移しいしたれ。古き寺々の多く殘りて。佛法盛の地なればや。世に奈良學といひ傳へ。古昔經論を高くつみて。佛學の達者いと多し蓮長師い叡山にて知己の僧こゝにあるを紹介として。元興寺に入給ひ。彼の高麗國の慧灌和尚の傳來せし。唯心無境と立たる。三論宗を學び。又傍に我が朝天平七年玄昉法師の弘め初めし。倶舍宗の論三十卷を讀で。其宗意を究め給ふ。こゝに又興福寺の僧。釋の道昭律師唐にお

あて。玄賢三藏より傳へたる。法相宗といふあり。此等の諸宗をうれこれと。習ひ併合近きころい東大寺まうつり住。いく月日を送り給へども。奈良の古跡を見物せんいとまもあらず。在しけるが。此程うちつゝく彌生の空のうらゝかなるに。學室を立出給ひ。振さけ見れば春のがすむ。春日の山を眞中にて南い高間北い若艸。この三の山を羽買の山と歌によみ。また三笠の山とも世に傳ふ。萬葉集に

はし鹿の羽買の山を今朝ゆけば。飛火野の原に雉子なくなり

と見へたるもおもしろく。いま幾日ありて若菜摘てんとある。野守の池。雪消の澤に萌いでゝねよげに見ゆる若草を。己が臥處と小雄鹿の。おきふし遊ぶのどけさに心いさみて。千早振神垣の森御手洗川。清流るゝ水源の。春日の社に詣給ふ。當社い大宮四社。一の御殿と聞へしい武甕槌命にして。神護慶雲二年。この春日野よ影向ありて。天が下の草民を護ますことといと尊く思はれ。猶ろこゝと尋ねまほしくおぼせども。學ぶべき諸宗の經論。最多くて心のまゝに遊ぶによしなく。猿澤の池の玉藻のたゞさかに。昔を忍び給ふのみ。今この東大寺に在して。華嚴宗を修學なし給ふに。これい孝謙天皇勝寶六年良辨大僧正。勅を受て入唐し。廬山の惠遠法師より習傳へ華嚴經にて。三界唯一心と立。十玄六相の法門を備へたり。また成實宗ときこへたるい。躰空無生の法理とて。獅子鎧三藏が造りたる成實論を。根とする宗門なり。かれこれ學びの道に。今年戊申の秋も深くなりけるころ。長遵師い泉州左界の浦に待人ありて。東大寺をうちたち郡山小泉より龍田にかゝり。山路はさゆる霜風に散て。流るゝ紅葉は。いざとはねど濁川の。水にとゝろを誘れて。見送る淵々の唐錦。九曲坂ある石高路を數珠爪操てたからかに。書量品を唱へつゝ。徒行給さ處に僕に些の袂を持しめ。推名紬に胴服に。黒皮の行騰走。山刀を佩たる人此方を見つゝ聲をかけ。殊勝の御經いと有がたく聞はべりぬ。御身はいづれの御出家にて。何處におもむき給ふやと。問はれて後を見かへりつ。我い遵長とて天台の僧なれど今の天台い天台ならず。まして諸宗い多かれど。凡僧野師の了簡のみ多く佛の敎に似もつかず。出家とありし身の任にい。其を能く學び正さんと。南都に高野に學問なす者よはべると。應給へば。其容貌といひ。道心といひ。世よ稀ある御出家かな。我い和泉の國府に棲る。江川太郎左衛門吉久といへる者あり。明日は先祖の忌日なり枉て。一夜の供養をうけ。我が方に宿給りと。懇にありければ袖振合す多生の緣。默止がさしとろのまゝに。吉久に伴れ。上士門よ植そへし。松

の緣も不老不死。揭り框に法衣の座をうち振ひ。威儀揚々と入給へば。吉久も家の族に意を得させ一間を淨くはらはせつ敷てすゝむる花莚。色も香もある獅應い。やがて一乘の實を結ぶ大因緣とぞ知られける蓮長師い。供養追善の經終り。種々の話に取交て自他ともよ泡沫夢幻の身を忘れ後世の營み疎畧也と云ことよりして。御經よ見へたる。月の鼠日の鼠といふ事をさへ語りいで給ふ。茲よ一人ありて。廣き野原よ出で。虎よ追れて逃惑ひ。數十丈の斷崖よ落入たり斯い協はじと一株の草よ取つき。漸く其身い取とめたれど。下を見れば。物凄き淵に長十丈ばかりの鰐鮫落なば呑んと待つけたり。上を看あぐれば。彼の虎はもし登らゞ咬んと睨まへたる有樣なれば。いかゝはせんと。魂も身にそはず恐ろしく有けるに。いづくより二頭の鼠いでゝ。かはる〳〵に彼の命と取縋りたる。草の根を咬切にぞ。其人の心のうち。いかに悲しからんと思ひやらせ給へ。我等衆生の身の上。全くかくのごとくにて。人の上にいあらぬかし前の世に造りし惡業は虎と成て追來り。これに終れて。六道の廣き原中にさまよひ。唯今三惡道の深き崖に落入らん處を。いかなる過去に善根やありけん。一株の草の手に觸はりしをそれを命と取つきて漸く人間と生れたり。前の世を顧れば。惡業の虎は。鬚喰反して睨まへ居り。後の世を見渡せば。無量罪惡の鰐鮫。鰭を怒らして待懸たるを。哀れなるかな我々がいのちとすがる草の根を。月の鼠日の鼠といふゝたつの鼠。かはる〳〵に出來り。昨日は正月今は二月。けふは朔日あすは二日と。頓て限りある草の根を咬つくされあば後の世いかに成ゆくらん。されば佛法を知ずして。此あだし世にむなしく。月日を送る人を。智者といはんか賢人と譽んか。よく〳〵思ひはかり給へと語り給ふにぞ。主吉久をはじめ。一家の男女これをきゝ。一座しめりてともに菩提の心を發しける。されより年暦十五年。弘長壬戌の夏。伊豆の伊東に流罪の。頃江川吉久は同豆州韮山といふ地よ移り住て在ければ。不圖ろこよ再會し。本化の化導に預りて。法弟とあるべき因緣を。茲に結び給ひしも。宿世奇特の相遇とぞ思はれけれ。それより蓮長師は堺の津にいたり。古鄕の人に値て。御兩親の膈使をもきゝ。道善御坊まで恙なくいます由をきゝ。喜びの眉を開き給ひ。其方へ贈るべき書。など認め。此彼古鄕の物語に思はず日數を重ね給ひけるが。暮あんとする年華に驚き。ふたゝび奈良へ立歸り。東大寺より紹介を求め。招提寺の栴檀林に入給ひける。當寺は天平勝寶六年。聖武帝。唐の鑑眞和尚を我が朝に請待し。御師依淺からず。紫宸殿の側よ。大戒壇を建て。帝をはじめ大臣公卿下民に至るまで受

戒の輩四萬餘人この招提寺は戒行律宗の本寺なり。統て三論。倶舎。法相。成實。華嚴。律。これを南都の六宗といふ。邁長師は此諸宗の論釋を學び。それより藥師寺の經藏に入て。一切經をひらき。彼の宗々の流義を逐一御經に照し合て。しばし心を澄め給ふ。これ邁長元年の頃よりて。年齢廿八才の時ありけりと。茲に又同國平郡。法隆寺と云は班鳩の宮の蹟にして。聖德太子勝曼經。御講讃の舊跡あれば。邁長師も頻に其跡のしたはしく。此寺に入て三論成實を勝論も程あく高野山に登らんと。紀の路をさして。旅立給ひけり。高野山とさこへしは。紀州伊都郡に屬する。靈山にして。昔弘法大師。唐土より日本に歸り給ふ時かの唐の湊にて船に乘り。三鈷を手に捧で。日本の方に向ひ。此三古大日如來有緣の地にといまれと。空中に投給ひければ。其三古翌なけれども。高く雲に入日本の方へ飛去りけり。船中の者。これを見て驚歎せざるいなし。大同元年丙戌十月廿二日。歸朝し嵯峨天皇の御戒師とあり給ひければ。彼の唐にて投たる三古。いづくに落止りしやと。日本一州に勅命有て。その在處を尋ねしむるに。紀州伊都郡高野山にありけると奏聞す天子御感悅在まして弘仁七年弘法大師を以つて彼の山を開かしめ金堂を建て丈六の阿閦佛八尺五寸の四菩薩をたつ。今の高野山金剛峯寺是あり。邁長師い紀

の路より花坂にかゝり矢立といへる處まで登り茲にしばし休息つゝこゝより伴ひ此山の僧一人加田より歸るに連立。險しき坂を登り給ふに。路の右りに捩石とて。手をもて捩たる如に岩角あり。又押揚岩とて大盤石を押あげ。下面に左りの手の跡凹かに見ゆる彼是いかある故ありやと。尋給ふに。路連の僧うち咳嗽。さてとよむかし弘法大師。此山を開給ひしに大師の慈母うれしく思し。登山なし給ふを。弘法大師おしとゞめまゐらせ。女人結界の山なれば。惜まし きよし喩給へば。母公の宣やう。我が子の開きたる山に。其母の登られぬ道理やあると强て登山し給ひければ。一山俄に鳴動して。火を降せければ。母公の御身たちまちに燒焦れんとす大師愕て。かたへの巖を押揚その陰に母公を隱し給へり。母公御怒の牙を咬。あたりの岩をしたゝかに捩給へば。その御手の跡岩角につきぬ。今の捩石。押揚石これあり。遺恨やるかたなく。猶登り給ふに鏡石とて石面洸々として能物の影をうつす石あり。母公我が姿の此石よ移るを見たまふよ髮うち亂れ。眼血ばしり惡鬼の形よ似たり。我が身ながらもおろろしさ事よ思し召兎角女人の身ハ。生身の佛よ値奉らずバ。得脫かなひ難しと明めこれより。天野に下り巖窟に籠り。慈尊出世の曉を待て入定あし給ひし。天野慈尊院。彌勒堂これありと。喝ぎ〳〵

いと誇りがに物語るを。道長師い唯應々といらへつゝ。心のうちに思すやう。淺猿哉弘法大師唐に渡り天竺に越。難難修行の功積で。御身ひとりい佛果を得たれ。母を救ひまゐらすと惱はず。現在この山に地獄の炎を降せ。牙を咬。石を捩て。怨を末世に傳へ恥を後世に晒させ奉りし大罪。無量億劫無間の底にうの身を焦すとも。此罪猶消難かるべし。佛敎にい父母の恩第一と定め。儒典にい五刑三千。罪不孝より大なるいなしと見へたり。たとひ其身天子の御戒師とあり。下萬民に生如來と仰がるゝとも。豈本意あき事にあらずや。もし此事實ならば。眞言の宗門にい。三界の女人たすかるべき道なく。一切衆生。父母に孝行の道絶ぬべしと心に秘て山吹のいはぬ色ある花坂より實をも結ばぬ。無益語の。むかし語りに路はかゆき。五十八町總門も。やゝ程近くなりにける。これより密嚴の淫域に入。頭をめぐらして。其山嶽をうち詠め給ふに。花坂不動坂いづれも。五十有余町の險路を陟り上峯又廣き平地にして。四嶽八山屹立として。内に大日覺王の淨土を開。東西い龍の臥が如くにして流をろゝぎ。南北い虎の踞まるに似て。坊舍その間に立連ねたり。玉川の水源よりい。五逆三毒の水を流し。御廟の橋い。五障造惡の濁穢を渡さず。扁柏黑松いや茂り夏尙寒き伽藍の淸淨。又曉の枕にい。佛法僧の聲すみて無明の夢をおどろかす。此鳥いうの形容鴿鳩に似て。その色碧綠なり、其啼聲佛法僧と喚ぶが如とし歌に

我が國い御法の道の弘ければ島も唱ふる佛法僧かな

後鳥羽院の御製も思ひ出られ。誠に佛門の柱石。鎭護國家の山とぞ思いれける。當山の起源たる眞言宗といふい同し佛法のうちにも。釋尊の敎法と大ひに事かはり。毘盧舍那法身。大日如來虛空の阿伽尼陀天。法界宮にいまして。金剛薩埵の爲に。口に眞言。手に印契を結び。意に觀門を開くべき。此三密の秘法を傳へ。これを大日經と名づけ給ひ。又密敎と定む。釋迦如來い同じ佛おれども。應身下劣の凡躰にして。うの說たる御經も又いやしく。これを顯敎と名づく其相違をいいゝ。釋尊い無明の凡夫にして。大日如來の履探にも及ばず。又大日經い圓滿具足の密法にして。法華經の如きい。うの牛飼にもたらずといへり。此宗旨い中天竺の善無畏三藏と云者。將來まて唐土に渡り。玄宗皇帝の御師とありて。眞言大日經を弘通す。金剛智三藏不空三藏つゝひて天竺より來て其宗門をたつる此時に當て漢土四百餘州眞言大ひに流布せり本朝にい空海和尙。寶龜五年を以て讃岐國。多度郡に生れ。延曆廿三年五月十二日。三十二歳にして

勅命を蒙り。唐に渡り。青龍寺の惠果和尚より。眞言密法を傳來して。日本に歸り彼の傳敎の弘めたる法華經の位を考ふれば。顯密合ろの中に。大日經第一。華嚴經第二。法華經ハ第三にして。大日實經に競れバ。法華の類ハ戯論として幼稚ものゝ嚴盲に似たりと罵り。高野山を開て眞言の一宗を弘む。一天の君。尊敬淺からず。萬民誰か仰ざらん。弘仁九年の春。天下の疫癘を攘除かんと祈り給ひしかバ。夜中に日輪出たり。又朝廷にて即身成佛と云事を疑ひしかバ。手に智拳の印を結んで。南方に向て。現身に佛となり光明を放けれバ。天子ハ玉の冠を傾け大臣百官地上にひれふし給ひけり。かくて承和二年三月廿一日。金剛峯寺にして。手に毘盧の印契を結びて。入定あし給ひけり。それより後八十七年を經て。延喜廿一年十月。弘法大師と諡名を受給ふ。かゝる尊き五智の瓶水。三密の法印かろ〳〵しく他家に授くべきにあらざるを。遍長師のこりおく。其奥藏を研究せんと。庵ふり埋む雪の中に一歳を送り。明れバ建長二年の春ゝむかへ。雪間の草の初みどり。都の花より珍らしく。心も春といさみつゝ。高野を下山なし給ひ。これより。道を河内に求め。當國石川郡。太子村ある。磯長の敬福寺に。聖德太子の御廟を拜給ふ。中央ハ太子の御母。間人皇后を斂め。東に聖德皇太子。西にハ太子の御妃膳臣の大妃を安

じ。これを三骨一廟と稱し。今に御廟の丘に。惡木雜草を生せず。雨風に窮ず崩れず樹木に諸鳥翅を休めず。此を御墓山三の奇事と。いひ傳ふ。太子御入滅の后。推古天皇より後宇多帝にいたる迄。四十代の帝王。代々こゝに車駕をすゝめられ。御廟參詣ざりける。かゝる尊き聖跡なれバ遍長師も茲に參詣し。御廟の前に座具を展敷。恭敬禮拜し。法運興隆の恩德を謝し給ふに。日も夕暮て山の端に。三日月かすむ黄昏時。ゆくてをいそぐ事かはと。此廟堂の中に入て通夜ありけるに。其曉天がた廟窟の燈明ほのかに。聖德太子。衣冠正しき御服のうへに。錦襴九條の御袈裟をかけ給ひ。あり〳〵と其處に立給ふにぞ遍長師ハ讀さし給ひし經卷を。徐かに卷おさめ。うや〳〵しく御手を支。當今末法の群類のため。此法華經を弘めんとの宿願を。逸々に述給へバ。皇太子は點頭つゝ。莞爾として滿面に歡喜のいろをあらはし給ふよと思へバ。夜ハほの〳〵と明渡り。妙香のかをり。四邊に馥郁と薫じつゝ。皇太子の御影ハ。見へずなり給ひける遍長師ハ。その御後を。ふしおがみ感涙座具にしたゝりて。御頭も擡得ず。たゝまくおしき唐衣。日もさしのぼる御墓山。猶御名殘のしたはしく。禮拜誦經に時をうつし。ろの御廟堂を退出あし給ひ。これを山城國綴喜郡。男山鳩が峯に跡を垂給ひし。石清水八幡宮に參詣し。宇治より

京都に出て。天王寺屋淨本がもとに歸り。南都に高野の物語り。つもる修行の艱難を。淨本夫妻いかつ感じ。かついたはり。しばらく茲に御身の勞を休め給へと。いと懇にもてなすにぞ。我が故郷の心地しておもはず日數をかさね給ひけり

日蓮大士眞實傳卷之一畢

日蓮大士眞實傳卷之二

東海相模州　小川泰堂編述

人を醉するものは醪醴あり。雞を醉するものは螟蛉あり。雞螟蛉を啖へば醉て曉天を告ず。蕎麥の花を嘗たる蜂は醉て人を刺ず。蓮荷を咬し猫は鼠を捉ず。鳩に桑椹。蛇に茱萸。いづれもこれを嗽へば醉といふ。其道に違ひ良能を失ふは。異類もまた人間にかはることなし。今日本國の一切衆生方便權敎の酒に醉て法華眞實の正氣を失ふ其生死長夜の醉をさますべき方術もがなと蓮長師は南都の六宗高野の眞言。廣く諸宗の奥藏を覗ひ京都に歸て。しばし雄氣を養ひ在しける折。天王寺屋淨本が。年來したしかりし儒者あり。博學の名高く。月卿雲客を友とし仙洞の御所へさへ。時々は昇りて經史百家の說をも。聞へ上るよしをきゝたまひ蓮長師は一日そのかたを訪たまふに。東寺のほとり。北面雜所の住居に交り街近けれどもかしましからずいと物靜けき玄關に。物言さんとおとつれつ。五條油の小路ある。淨本が緣の者のよし言述て。案内を請ひたまひ。面會しつ。且驚き膝を撲て。先生は此企氏にはおはさぬやと有ければ彼

儒者不審はれやらず。斯のたまへども兎の毫ほど。見も聞もせぬ貴僧をば。いかで知よき識よしあらずと答れば。師は微笑て。儒者のうへには半面の識とて　襖の隙よりかいまみて其顏を半面見しさへ識人といふなるものをいかにして。幼稚心のいとけなき。吾さへ見覺へあるものを。君は吾より齢たかくて。物々しくも吾が家を訪給ひし。房州小湊の配流人貫同が兒の善日にはべるかしと。いはれて先生ひたと呆れ。幼稚ぬしさへ見覺たる年嵩高くて忘れしは我あがらおぞましかりきといひ譯て。一別以來の應答にむかしを思ひ出しけり。此儒者といふは鎌倉二代の將軍頼家公の其頃には比企の判官　能員とて世に時めきし權貴の家たるを北條時政が政子の方と心を。合せ腹惡くも能員をおのが邸に欺き迎へ名越の亭にてだまし討ろのまゝ手勢を引具して。比企が邸へ押寄ッ、不意を伐たる殘忍荼毒。比企の一族のありあく。邪見の刃に身を裂かれ。一門あゝに斷絶つす其のとき判官能員がいと〳〵季の男子ありけり。それさへ殺ろし捨つべきを。ろのころ比企の親族に伯耆坊とて戒行堅固の沙門あり鎌倉の北。山のうちある蹈菩提寺に住らしけるが。此のことをきゝつ身を捨てろの稚兒を法衣の袖に請ひうけてろの玉まの緒い取りとめつ其のまゝにい成しがたしと房州に流がされ

しい。此兒の二歳の時なりけり。これより配所に人と成。貫名の家も程近ければ。訪おとづれ腓なき配所の艱難をかたり。互ひに心をなくさめ給ひける。其後い企氏比も伯耆坊にともなはれ。京都に登り。表には東寺に入て。出家となしぬと聞へ置。實い才學いと頼母しく經學文章拙なからねば。過し流罪のつみ咎も代る月日の久くして。年々繁き諸國の成敗。今い毛を吹。疵を求むる人もあらじと。儒をもて家を興し大學三郎能本と名乘。都の人に仰がれて何不足あき身なりけり。蓮長師いむかしの好といひ。また儒道にも望みあるければ。折ろよけれと。大學三郎に厚く交り。堯舜以來。周公孔子の道とする。仁義五常の敎のもとすゝ。詩書論孟の儒書を研究。熊本に學びたまひしが。一時能本歎息し。師の才智にて儒者となり給ば世上に功高く人倫に益あらん。惜哉法外無爲の佛道に身を陷給ひしことよと歎かれければ。蓮長師は禮を正し。先生その儒を知て。未其佛を知給わず唐土宋の世に。觀文殿の大學士。張商英といふ人はろの初め强邃博學のきこへありて大觀四年六月召に應じて參殿し始て徽宋皇帝に御目見ありしに。此頃久しく旱魃にありけるが。此夜俄に大雨降出。天下を潤しければ徽宋帝御悅斜めならず。これ張商英が德の雨ありとて。震翰を染て。商霖の二字を大字に書して賜ひきゐ

れより位階相丞に登り。天下の政事にかゝつらひ其頃無雙の儒者なりしが或時大寺にて。釋尊の一代藏經たかくつんで。麗々しく莊嚴し。燈明を點じ香を焚。いと尊く飾りなす。張商英これを見て憤りを含み天竺邊土の夷狄等が書し無益の書籍を。かくまでに。尊敬することいはれあし。從來佛といふは虛無空濶の敎にして其體非ず。ろの體なき道を求んとて迷ふ人これ多し。我れこれより珣かゝり。愚昧の邪說を薙倒さんずと家に歸り。久しく籠りて無佛論といふ書をかく其妻向氏あるとき夫壻に問。君ゝ日夜何事を爲給ふや。張商英答てわれ無佛論を書て彼佛法を破らんとす。其妻笑て無佛といはんに何の論かあらん。先有佛論を書て佛道を篤と見あきらめ。後にこそ無佛論もよかるべしとありしかば。張商英默然として詞あく。これより心にかけて。一切の經論を讀。漸く儒道佛道一致なる事を辨へ。大ひに佛敎を扶たりときく。我ゐゝろみに些あれをいはん。斯天地の始終りを。佛ゝ成住壞空の四劫とて。無量萬々限り知れぬ劫を說。晉の邵康節は一元十二萬年にて。此天地ゝ滅すといふ。佛ゝ三世を敎へ。儒道には一世を示す。其說とあろに大小あるゝ。其道に大小あるもへあり。譬は蚓蟯といへる虫は。その朝生れてろの朝直に死す。世に明暮ある事を知らず。又蟬は夏生じて夏終る。世界

春秋あるを知るに由なし周公孔子の忠孝仁義を敎へて儒道といふも釋迦牟尼世尊の地獄畜生人間等の十界を立て佛道を敎るも唯夫一尺と一丈との長短の差別にて其敎法もとより一なり天地の間に二の道あく聖人に二の敎ゝあかるべし我が佛門に不殺生戒とて物の命を取ざるは儒道に示す仁なるべし不偷盜戒とて盜せざるゝ義を守るなり不邪淫戒とて道ならぬ婦女を犯さぬゝ禮あり。不妄語戒とて人を欺き僞らざるゝ信といふべし。不飲酒戒とて酒飲あとをいましめたるゝ。本心を失なはざれと敬ふる智にあらずや。君が仁義禮智信の五常も我が殺盜淫妄酒の五戒と。別あるものと思ひ給ふや。此五常五戒を持て。身を慎むゝ戒なり志ざしを善道に定むるは定あり。此二法を辨へたるは智慧なり。あの戒定慧の三學ゝ。身を修め家を齊ふ直道の根本あり。されゞ五戒三學を修行する人。家に一人あれゞ。其家十人よく治り百人あれを行へば千人和順ならん。此敎千萬人に及さゞ百萬の人おのづから睦し。爭ひ家に息刑罰國にすくなければ。國を治め天下を平かにするの道。外に求べからず。法華經第六の卷には。世を治る語言。一切みな我が正法ありと佛ゝ說たまへり。先生の本業と立給へる儒道ゝもと我が佛法十界のうち。唯人間一界の敎にして。ろれも佛の道なりと。しらせ給ゝで在すに

やと。齒に衣きせぬ物語に。大學三郎能本い袴の側に手をさし入れ。默然として始終をきゝてありけるが。これより志を佛乘に運び。儒を敬へ佛を學び。魚と水との交りも。後年鎌倉に再會し。大士の化導を扶つゝ。其身も剃髪して法弟となり。家さへ轉じて寺となし。比企が谷妙本寺。本巧院日學と喚れしい。世にも不測の前緣なりける。かくて遮長師いあの比企氏の親しかりける冷泉家にたよりて我が日の本の敬ある歌嶋の道をきかばやとろの綜を能本に語給ひければゞ。其い易き事なりとて。能本に案内せられて。冷泉家を尋たまふ。今の冷泉家爲家卿といふい。定家卿の御子にして。代々歌道の名家なり。そのうへ去つ寶治二年。勅命もて續後撰集といへる歌書二十卷を撰びて。感感にあづかり給ひしより。いよ〳〵其家かゝやきて學びの門人い。八百日ゆく濱の砂の數多し。遮長師い播磨の杉原十束に。宇鎧の混布を取ろへつ學ばかりの路の苞。僕夫にもたらしつゝ。式禮正しくおとなひ給ひければゞ。爲家卿い柳さびの立烏帽子に。縹色の水干を着し立出て面謁し。ろの志の淺からぬを祝し喜びつ。さて宜ふよう我が歌嶋の道といふい。天地の成の隨意直ある人の心を種として。萬の言の葉をいひいでゝ。尾上の松の露に咽び。谷の柏の風に暎ぐも。皆ろの調べに協ある神代のつたへ賢きも。初學初心

の輩に。唯その道を語るとも甘辛と味ひの嚼するのみ其身に益おし。直ある道の味ひい。みづから嘗て知にい如じ。皇國學い我が國の古き書類を讀こそよけれと。まづ古事記神代の卷を取いでゝ授ける。ろれより遮長師い日に〳〵あの許に立入て。古書どもを問明らめ。和歌にい奈良の都まで。古言たいしき萬葉集。神代久し〳〵傳へてし。ろのてにをはを初めとして。秘事多き數々まで心盡に學びたまひけるに爲家卿もその俊才の器量を感おぼせしが又和歌を認たる筆を見そないし此僧の才學といひ又その手蹟の妙なること道風空海佐理行成贈これを本朝の名筆とつたへよび。吾が家にも其筆跡い藏し持り。しかるに此僧の書法の絶妙なるあと。彼の四人に競るとも。をさ〳〵劣いあらぬかしと。舌を卷て驚きつ。これより爲家卿い深く師を尊敬し文庫に秘たる歌書のいろ〳〵取出て。其表題を師にかゝせ。深く秘藏なし給ひ。今に其御家に傳へけるとおん。あの頃遮長師いしばらく哦を見合。東寺に遊び給ふ。此寺い山城國紀伊郡に屬し。秘密傳法彌勒山。敬王護國寺と號て嵯峨天皇の建立ありといへり。此寺の法華堂に眞廣法師といふ僧ありて。一度師に相見て。しきりに其智德を慕ひ厚く交り尊敬大かたならず有けるが。此眞廣び紹介にて。東寺仁和寺の學室に入り。眞言に小野廣澤の二

流あるを大概これを學び給ひけるとかや

眞廣法師は此に因緣を結び後弘安四年辛巳の春。老躰を杖に扶けられ、遠く身延山に登りて。本門の大戒をうけ。ろれより法華經一千六百二十部を讀誦せり。大士滅後は日朗聖人に法を聞。常に經を讀て本化の宗を修行す　其東寺の法華堂今に我が宗門の一寺と成て成就山法華寺とて靈跡を殘せり

一日淨長師東寺の法華堂におはして眞廣法師の懇望にまゝせ法華の開經無量義經を訓讀なし給ふに眞廣は栴檀を炷らせ頭を低て其梵音をきゝすましたる折油の小路なる淨本の聲來てその微妙の讀經に會釋も遺れ竹緣に蹉り揚り共に聞法の緣を結びけるが御經終てさていふやう今日は用節ありてあれより直に天王寺に往はべる御師の望をもかねて其僧寮へ賴置たればさだめて古き類も取いだして置つらん。障あくべあそびがてらに往たまへ。御伴しまいらせんとあるに。師も悅び給ひ。御身の用の妨ならずば。伴ひてよとうち連て。淀川づたへ難波なる。天王寺に趣き給ひけり。あれゝ津の國東生郡にある古梵刹にして。用明天皇二年聖德太子みづから澁河の館にうち向はせ給ふ時。白膠木をもつて。持國。毘沙門。廣目。增長の

四大天王を刻み。怨敵退散の冥助を祈り。物部守屋を誅戮して。此寺を造立し。四天王寺と号ず日本國佛法最初の靈場にして。西の門に大鳥居をたて高二丈五尺。額ゝ小野道風の筆にして釋迦如來轉法輪處。當極樂土。東門中心の十六字を四行に書し。蓮長師ゝ此を仰ぎ見つ。ゐの寺に入り。敏達天皇六年。百濟國より始て渡りし。經論又聖德太子手づから書たまひし法華。勝曼。維摩の。三經の註釋はじめ。許多の書籍を拜見し終り。京都にかへりたまふ路のゆくてに佐女牛の八幡宮に參詣し。京都より比叡山に歸り横川淨光院にひそみて專天台の摩訶止觀を讀。智者大師の己心中の法門を了解し天台ゝ藥王菩薩の後身傳敎ゝ天台の再誕ゐる其法門の次第。古今獨步の妙說なるを悟り給ふ。然るに此叡山は宗風亂れて諸派に別れ。楞那流蘇心流。安海流。安然流など互ひに其流を爭へども龜の甲の毛の長短。兎の角の有無にて。いふに足ざる論なれば。更に取肯たまはず。唯傳敎大師の正義を求たまふのみ。ゐれまで數年諸宗にわたり一切經の被見さへ。既に三度に及び。釋尊の正脉を御手に握り。末法の要法御心に居たまひ。恰も須彌山の金輪際より湧出たるが如く。百萬の外道もうかゝふべからず。無量の魔軍も犯し難し。抑ゝ一代聖經に法華經のあるは天に日あり。國に王あり家に柱あり人に魂

あるが如し。如來出世の本懐は唯法華一經にとゝまれり。又此法華經に二の義あり。一には迹門二には本門あり。其迹門法華をば。佛藥王藥上觀音等迹化の菩薩を召て。正像二千年の弘通を許し。又本門の法華をば上行等本化の大菩薩に讓り。末法五濁の今を救はせたまふ。經文明白あり彼の迹化の藥王藥上等は既に天台傳敎等と生れて法華迹門を弘めて和漢の両朝に弘通せり。今末法に入ぬれば其天台傳敎の迹門の經法すら。猶去年の暦に似たり。御經には後五百歳中に本門の法華經。廣宣布流すべしと說給ひ。天台大師もかねてこれを召知て。後の五百歳遠く妙法に沾はんと宣ひ傳敎大師も亦法華眞實の敎は必ず後五百歳に流布すべしと正しく御毫を染て書殘し給ひし。されば今はつの末法第五の五百年。彼の神力品の附屬を受給ひし。上行菩薩出現し給ふべき時節到來せり。我身不肖なれども時を計り機を考へ。御經文に任せ。上行菩薩に先達て。此大法を弘むべしと。心決して磐石の如し。昨日に今日にうちつゞき。朝疾起て沐浴し。開結あはせ御經十卷讀誦まします其うちに。いとも妙なる異相の御神。杉の折戸の際に坐し御經聽聞なし給ふに。日に〳〵其影向の神像かはるにぞ。これを審不く思召。いま二十二品屬累品をよみさしつ。御掌を合せ南無と唱へて拜をなし。毎日にいます

其方々はそも誰やの人に在すぞと尋給へゞ彼の異人恭しく禮をなし我等は法華守護の三十番神なり。この日本を本土として。跡を垂たる神々の其むかし經鷲山の佛勅をかしこみ當具奉行と隱てし誓違はず末法に。御經守護の爲にころ。あゝに影現はべりつゝ。聖人を守りまゐらするありと右の御手を揚給へば不測やろの指尖より縷々として五色の雲を起し霞にわらず霧に似ずそが中に熱田。諏訪。廣田の神々を始として。吉備明神にいたるまで整々堂々として。天津空なる星の如く居並で。異口同音に。斯人行世間能滅衆生闇と讚歎ありしたまひける。師い泰然として謹み給ふのみ。側なる料紙硯をかいとりつ。三十番神の御名を記しとゞめ。猶法樂の心して殘りの御經讀誦なし。卷第八にいたるころ。禮を作つゝ神々も退き給へゞ萬字にめぐる多摩羅婆の香の煙の蓋るのみ。一室いさらに寂寞たり。こゝにおいて其影現の神像を。拜見のまゝ畫工を雇うて繪かゝしめたまひけれど。輕忽しく世にい傳達おかりけり。此大士自筆の三十番神の神号い今駿州沼津妙海寺に傳來し又神像の畫軸い甲州休身立正寺の寶藏に現在せり。鹹や權衡をもつて物の輕重を定む人これを諍ふべしや墨繩をうつて其曲直をたゞす世にご。を挑者あらんや唐に天台我が朝に傳敎此兩大師ひとたび出世ありし

より經論の輕重諸宗の曲直たちまちにあらはれ古往今來。離か異議を述る者あらん。されハ蓮長師ハ十年餘りの春秋をこの敵山に送り給ひ今年建長四年寅の冬傳敎大師の御廟に報恩の香花をさゝげ。山王權現に正法守護の神德を謝し奉り。數年三塔に骨肉の交りをなしたる學友に殘りなく暇を告給ふに。尊海師ハ取譯名殘を惜み。素絹に縫べき料ありとて。加賀絹一匹に別離の涙をそゝぎ馬のはなむけにぞ成給ひけるこれより蓮長師ハ京都に出て年頃日來淺からざりし淨本がもとに音信歸國の事を告たまひしに夫婦ハ驚き餘日もあらぬ冬空の雪催なすきのふけふ。御出來の御身にハいづくも暇の宿なるを何いそぎ給ふ事かいと。其誠實にとゞめられ。振分がたき旅の袖。今年ハこゝに新玉の春をむかへて。尙寒くさゆる日影にうち立たまふ。淨本夫婦ハとゞめかね。美濃上品の袷衣。綿の帽子に足袋手巾城殿の末廣取そろへ未消殘る雪路に。情も厚き溫草鞋こゝろづくしの餞別を受おさめつゝ暇を告。心いそぐハ法の爲。世に鍛たる鎭石心。本國安房に立歸り。身命を三寶に奉り。此法華經を弘通せんと今日九重にさく花の。帝都をあとに見おしつゝ。霞とゝもに打立て。吾妻をさして下り給ひける。こゝに伊勢天照皇太神ときこへしハ。日本開闢天照します御神の宗廟にして人皇の始め

神武天皇より五百三十餘年の間ハ。禁庭の內天子の御座近く崇め祀りたまひしかど。十代崇神天皇の六年。神と同座おるをおそれみ給ひ。始て御祠を和州笠縫の里にいとなみ。內裏にいませし神躰を。あゝに移し祀り。皇女豐鋤入姫尊をもつて神に事しめまたふ。後大和媛尊これにかはりて神廟に事ふ。これより神勅に任せて。祠を遷し改めたること十四次。垂仁天皇二十六年。勢州渡會郡。五十鈴川の水源に。鎭座おるべきよし神託に依て神殿を造營す今の伊勢の宗廟おれおり。蓮長師ハ道を伊勢にもとめ。間の山淨明寺といふハ天台宗にて。此寺の住僧ハ敵山にての知己おりければ。こゝにやどりて旅の裝を解。神廟に詣し給ふに。神給山春呼子鳥よびつれて。吹神風ものどかおる。みもすそ川の水淸み移る八千代の若翠。杉のむら立森々と。神さびいます廣前にぬかづきて。神拜終り。御經取出いとも靜に讀澄し法施に時をうつて給ふ。四邊しづけき神殿の扉を隔て鈴の音いとゞかすげく皇々とひゞきつゝ。榊にかけし神鏡より颯と音して輝く光明樹々の枝葉も神垣も同じ色おる紫磨金色內外へだてぬ八百萬神も納受と見えにけり師は此奇瑞をかしこみつゝ。神近前くすゝえより。傳きく天照皇太神は本地久成の尊容にて。迹を東海秋津洲に垂給ひ。衆生の利益百萬餘載。正像二千の其間ハ法

華迹門をもつて法粮として。威光精力を增たまひ今末法第五の濁世に當り。諸經の利益盡滅たり。さあれば皇太神も無明濁惡の世に堪たまはず。此迹土を捨て本懸の妙土に歸り給ふらん。此事御經文に於て。蓮長疾よりこれを知れり。我數あらぬ身なれども佛勅にまかせ。法華本門を此神州に弘通して末法當來の問をてらさんとす神慮いかにとありけれゞ大地六變に震動すり。これ此御經末法に流布すべき地動瑞とぞ知られける。あれより雲時淨明寺にといまりて日に〳〵神廟に詣で法樂の讀經いと尊く聞えける時に又妙見大菩薩の示現も有て今に其地に妙見町の名を殘す皆あれ正法の不思議とぞ思はれける

間の山淨明寺に。大士あゝに參籠の時手づから彫刻し給ひしとて。一遍首題の本尊。その下に建長六年甲寅四月十六日蓮敬白と十五字を石面に彫附たり。案ずるに宗旨建立の翌年鎌倉松葉が谷に在して。天照太神法樂の爲書認給ひしを後の人石に彫てこゝに建しものとぞ思はる。諸傳の說。又冥應論等その理當らず。

神風や伊勢の社の感應奇瑞。心にかけし注連繩。日も稍永き春霞。翅はやめてゆく鴻雁ゝ。古鄉いそぐ旅の友日數かさねて房國の彌生の空も十歲經。歸りて見れゞいとけなき稚遊びに

我植し。門の柳もやゝ老て茂るを宿の目當に。蓮長唯今歸國せりと。きゝて次郎ゝ歡びつ母梅菊ゝ取分て轉が如く走り出草鞋とかし洗足すゝめ。ろれかれと旅の疲れをいたはりて。積る話ゝ四方山に今を春部と萌出る草葉の數も及びつき其喜びゝ知られけり父の次郎ゝ心づけ何時〳〵までもこの宿にとゝめまほしう思へども道善御坊もさいつ頃より蓮長の安否ゝ聞えはべらずやと。厥を幾度か所化僧や。童兒をおあして問たまひきいろぎ。御師に見えあげ。厚き情を報てよと。いろがせゞ。蓮長師も意をゝて。やがて淸澄に登給ひ。諸佛坊におとなひ給ひたるに。師の道善は雀踊し。席にも居らず喜しとて。年月ながき學問に。ろの惟悴もみえざるはとて。喜でうち笑ひ。又修行にも程のあれ。老たる我に久しく物を思はせたるは。腹たゝしとて呵もしつ。尙時しらぬ袖の露。しばしはれまゝなかりけり。蓮長師は慇懃に。つゝしんで在すのみ事を委細に述たまはず。もしろの話の佛法の事に移らんとすれゞ。色を柔げ詞を。輕くし歟山の峯ゝ高うりき。高野山ゝ寒かりきと他の話ゝ紛らして更に佛法の事にわたり給ゝす。師の御坊も亦慈愛深くて。さのみゝ修行の事も問給はず。相互に心慰む物語り時を移し給ひける。又同寮の法兄弟。圓寂。淨顯。義淨。等始として。おさなき雛僧兒達までかはる〳〵無事を訊

しぬ。又師の坊は人を馳て。次第夫婦に悅をのべ給へば次郎。重忠も使どゝもに山に登り道善御坊に式禮し。淺からぬ慈恩を謝しはべるに。道善い手の鍬。足の踏をしらず。庫裏の司を召換て。蓮長はじめ其が父も亦院内の僧どもへも。些の愛憐にあれかれと指揮あるに。頓て折敷の木椀に。豆腐の羹。黑羹の蕗ろへ持出る弦鍋い。備後の酒の味に似ぬ。其片白い酢しても。肉いゆるさぬ差酢の和布。雁羹の椎茸とりすゝめ。過飲一座の販はしく。飯後の菓子の卷餅に。搗栗をさへ添さしつ。最十分のもてあしに。春の日影もたゞかれたれば貫名次郎は道善に。厚き造作の喜びをのべ。又蓮長師を見かへりて。明は暇を貰ふて來ませやと。いひさして。足下暗き夕黑を。送る奴僕の松火に。さし照させて高低と。麓の方に還けり。蓮長師は翌の朝御坊に言て山を下り。小淺にいたり給ひしに。御父重忠機嫌よく。師を側近く招きよせ。昨師の御坊の我にひろかに宣給やう。此山に僧多く。我法弟あまた有なれど。我山を讓べきは。此蓮長に限るかし我も六十を超たれば。程なく寺を彼にゆづり。心安かる身とならば。我身の僥倖御身達も老の恃怙にあらずやと。語たまふを聞につけ。おれまで長き旅住居。一處不住の癖づきて。又鎌倉に往もやする。京に上やしぬらんと。御師も我も心にかゝり侍かし。おれより心おをちつけて。彼

清澄の主とあり。人も仰がべ其身の立身。登庸のみか。我々夫婦も世の人に。善兒持たりと羨まれ。此世後の世安かるべし。さは思さずやとありけるにぞ。蓮長師は黙眼。しばし思案に沈みたまひけるが。武藏鎧にあらねども。さすがに懸ておもふにも。言で果べき事ならねば。思ひ切て宣やう。われこの歳月釋尊の御經を。幾度か拜み奉りしに。當時日本に弘まりし念佛眞言禪律の諸宗の祖師に誤多し。その誤を傳へても。其とも知らぬ。八宗九宗堂塔沙門のありさまは。佛法繁昌と見ゆれども。更にかひなき脫虛の殼ことに。佛の入滅より。正像二千の時くれて。今は末法第五の闇。其を照すべき御經は。法華經に限るなる。佛の敎を身に受て妙法の蓮華を一天に咲せんず。大願すでに決定せり。たとひ八宗九宗にあたまるゝとも。其をばさらに念とせず强盛に說のべて。世を救ふこころ末法の。本因妙の立行ぞと。御經には見えはべりぬと詞しづかに聞りたまへば。母梅菊は法衣の袖に取縋。厥をあしゝとはいはねども。道善御坊の深情と父上の今の詞とかれあれを。思合せて餘の事に。心移して給はるなと。女の胸は山の井の淺きものから濁いで夫壻次郎を勸つゝともにその弘通の志を障給ふあさましゝとも蓮長師は恭しく手を支へ。元より出家と成給ひしは。衣食に富で位高く。榮耀を求む爲にはあ

らじ。父母の御手を離て廿一年。千辛萬苦も法の爲世の爲にせし學問修行。その効積で御經の大小權實顯密の。諸宗の義理を直下に見あし。身をも惜まず末法の衆生を救ひ得させんと身にも不應大願も佛の敎是非なしと心定めてあるものを。今父母の障たまふい。これ唯事とも思はれずむかし唐の天台大師法華圓妙の觀念を凝して在ければ父母左右の膝により涙ながらに其行法を妨給ひし事あり。これを御經にい惡鬼入其身と說給ひ蓮長いとしと思召。御兩親の御心に。惡鬼夜叉のつけ入て。慈悲の詞に劒をかくし今正法を妨あすと覺ゆるぞ熟々思しかへられよ。受がたき人界に生をうけ値がたき佛敎に遇奉り。もし今生を默止あゞいつの世にか菩提を得てん生々世々無益に。捨たる身の骨い積ゞ山とも成ぬべし。其中に佛法の御爲に捨たる骨い指一本だにありとも覺えず幾生が間。恩愛別離にろゝぎたる涙い。大海の水より多からん。もし其うちに佛法の御爲に灑し涙一滴もあるならば。かゝる凡夫と生いせじ。今度優曇華の時を得て身を傷ひ命を捨て。佛法を修行し。御親親の御菩提をたすけ一切衆生を救はんあそ。出家とありし面目あらんと。稚幼ときより何ひとつ。兎の毛の尖の露ほども親にそむかぬ蓮長が。本懷大事を身に受て。篤く敎導あし給ひしにぞ。慈父次郎も稍顏面

のいろ解て。善らぬ事を爲兒とて。それも定まる因緣あるを。まして廣る大千世界人も渡さぬ蒼海に。法の御船と身をあして。多くの人を救べき。平等慈悲の心をゞ。いかでとゞめん止なと妻梅菊をも言喩し給ふにゞ。蓮長師い兩親を。ふし拜みその御詞ゆゑ廣宣流布の大願も。滿足すべき初なりと御歡喜の色見へて。淸澄に歸山あし給ひけり今年の春も稍暮て。卯津木花さく夏山の茂る樹間の淸澄にこゝろ澄して思すゃう今年正しく如來の滅後二千二百一年に相當る。天い一を以て淸く。地い一を得て寧く。王公い一を建て天下を治たまふ。況我が大覺世尊一佛乘を以て一大事因緣と說。一閻浮提の一切衆生の爲に一成道を示したまふ。一の數誠にもつて塔中別付に契當せり。此時を過すべからずと卯月末の二日より一室に籠り。香焚し。大禪定に入給ひ。時に御齡三十二歲建長五年四月廿八日。東雲の空ほがらかに。旭東日天にかゝやき登り給ふ時。安祥に三昧より起て。念珠を御掌に懸ながら。旭日に向ひ高聲に南無妙法蓮華經と十遍ばかり唱へさせ給ひけり。其山々の梢吹。夜半の嵐の音絕て。今朝い高嶺に萬代と唯一聲の松の音。これぞ二千二百一年の昔。大聖世尊より上行菩薩に附屬ありし。一呼百諾の金言。末法相應。本因下種の題目といふあり。賢くも此本化大慈の日輪。今東海にさし登り

平等大慧の光明大千界を照し靈未來際の闇を除たまふ始にして誠に法運開闢の時節とぞ思はれける。此日兼て人を馳て觸たりければ。午の刻頃より鎌の男女。壇越の人々別て當郡の地頭。東條左衛門景信も。若侍に下僕召連。忍びやかに登山す。南面の本堂に錐り得立ぬ參詣い。今日しも當山の遺長坊。數年京學の功積で。歸來て此山に始て法を說なればいかなる尊き事ありや都學びの法門を。聞まものとかしまし。波羅婆梨多耶の眞言と南無阿陀々の念佛に。しべしい鳴も止さりけり。遺長師い出堂の太鼓をうたせ。徐々と高坐にのぼり薰香散華に心を澄せ。四弘誓願を唱つゝ法華經の紐を解。第六の卷を讀あげたまひ。顏色を和氣。梵音しづかに宣やう。我年來一切經論に亘。廣く諸宗を學びたり。八宗十宗見ざる事なく聞ざる事なく。大集月藏經の第九の卷を見るに。如來入滅より五百年の間をゞ解脫の時とて。單に成佛する人多し。又次の五百年をゞ禪定の時とて。坐禪工夫を疑して得道する者多しこれまでを正法千年といふ又次の五百年を讀誦の時とて。能御經を讀修行して得益を蒙る。又次の五百年い造塔の時とて。堂塔伽藍を造りもて。利益を得べき時節あり。これを像法の千年といふ。此二千年過終て。後五百年を白法隱沒の時と名づけ。如來一代の聖經。利益一切に盡果て

一切衆生成佛の道たえたり。これ末法萬年の始あり。其うへ正像二千年の間い。本已有善とて佛に成べき種を。兼て釋尊より植置れたる衆生なり。今末法に入て二百年。當世の衆生い本未有善とて。本より耕さず耘らず。種を植ざる赤凡夫ぞ。抑佛の種といふい。妙法蓮華經の五字あり。此事經文に明白あるぞよ。然るを淨土宗の法然い。少乘下劣の念佛を弘むるとて。撰擇集といふ書を筆て。其法華經を捨よ閉よと爲り。禪宗い敎外別傳とて。法華經を蔑ろり。眞言い天に二の日あく。國に二人の王なきものを。大日如來を本佛と立て釋尊を落し。法華い大日の屋取にも足らずと謗り。律宗い二百五十戒三百戒を算へ持て。大乘法華の經王に隨ず。かゝる諸宗の邪流をば。法華經第二譬喩品に佛說て宣はく。佛の種を斷す者なり。其人命終て無間地獄に落て。無量劫にもうかぶ時あがるべしと見へたるぞ。耳あり眼あらんものい。これを見聞て邪正を辨へよ。念佛は無間に墮る惡法。禪宗は天魔の眷屬。眞言い國を亡す邪法。律宗い國賊なる事敢て私の詞にあらず。皆御經文にて見定たり。諸宗無得道墮地獄の根元。法華獨一の利益さらに疑なし。時知島の不如歸。今い雲井に聲高し山田の早苗植後れ。實のりの秋に後悔なす。時は今法華經流布の時。我はこれ如來の使あるはと。弓手に御經たかく捧げ。妻手に

高座を打て說示たまふにぞ。一會俄にかしましくあな勿躰なし。彌陀を謗り。おのが宗旨の眞言まで。顯にまかせて言罵を狂僧に。あたゝ耳を穢したりと。口々に惡口し。或は怒り又は笑ひ珠數を輪組てさす腕を。屈まる腰に又添て。最婆來よと牛ゝ牛。馬ゝ馬連いく群か。堂を蹴立て歸りゆく。あれ本化の弘通。末法下種の始なり。就中圓智坊との此山に年を拾ひし老和尙。澁啞たる聲怒らし。我も法華經を信じもて。讚誦する事五十年。又三年此方ゝ。一字三禮に書寫をもしたれ。何を痴迷て。さばかりに法華經を信じたりとて。諸宗を惡口はべるぞや。たれかある其狂者の蓮長を。疾挽出せといきまきて。老のかひなき拳を振り。疎に殘る齒を咬でいとかしましく叫喚けり。地頭の左衛門景信は。諸佛坊に突と入て。道善御坊よあの躰見をろおはしたるか。他の事は角もあれ。御師の事といひ。此地頭景信に。綾怠無禮の蓮長奴獅子の高座を引をろし。切て捨るは易けれど。無垢淸淨の此山の。靈地を穢すをおろれ見て。其塲は免し置たれどかゝる不法の痴漢を。其まゝ置ば地頭の不念。寺門の恥辱。我請受て連戻らん。許たまへと有りければ。道善坊は恐懼歷。公の怒も道理あがら。狂氣の蓮長をいかにせん。其儘あの坊に預たまひね。能言懲して正氣にかへらば。今日の鹿忽は我より詫んと。ひたすらに宥られたる鬼棘。さしもの地頭も詮かたなく。頰ふくらして立出ぬ。道善坊ゝひたと呆れ。蓮長師を坊に招き。性根の强きその耳に。老の廻らぬ舌をもて。いふも無益の事あがら。十二の夏より手に育て。見處多き法弟ありと。末頼母しき年月も。却て後のわたとなり。此寺をさへ讓べき。心搏も水の泡消もへし。改め難きとあらば。此山には置がたしいづくへなりともみをかくし。願ふゝ東條景信が眼に當らぬやう心をつけよ。此教訓の身にしみて。先非後悔せしうへゝ。疾我坊にかへりあよと幼稚者を懲すが如く窘めもしつ叱もしつ夕日さし入遣戸口。送るよしあき師の恩を。後に見おして往穴に。寢林もとめて立疑ぐ。雀色時藪陰の。下路さして降給へゝ誰ともわかぬ二人連。後を慕ふて追來にぞ。近くなるまゝ斜視れば。あれ別人あらず法兄の淨顯義淨の二人にぞありける。ともに師にうち向。今庫裏のしもべの語をきくに。地頭の怒尙解ず山を下らば待伏て。切て棄んと半途の辻堂に待とかきく。此道をくだり玉はゝいと危し。さすれば小湊の親のいへには猶往がたし。我々がよき隱處を思つきたり。此方へ來り給ひねと後と前とに淨顯義淨師をいたはりて岨徑の。けはしき間道うちめぐり。その夜の闇にまぎれつゝ。當郡西條の

鄉。華房の蓮華寺といふ。眞言密寺に身をかくし。其難をのがれたまふ。不測や此經を末法に弘通せば。刀杖をもて惡人に迫れ。又常住の寺を擯出されんと。御經に說れたる。刀杖遠離の法難は。今日あゝに現前たりさいあれ又諸天善神。晝夜に守護あるべきよし五の卷の御經に違はず。今宵危き劍難を。兩人に救はれさるも此將奇特の經力なり

華房の蓮華寺。今に眞言宗にて現在す。又淨顯義淨の二人は。後年大士の化道に受戒ゝしたれども。其頃大山の住職にて。綱位輕からざるをもつて。名利につながれて。其宗門を出ず。然れども內心深く其宗義を信じ淨顯ゝ日專義淨ゝ日在と。呼弘安元年大士筆を染て本尊を書し。あれを授與ありしあと祖書に見えたり

かくて華房蓮華寺の住僧青蓮坊の方に在しけるが此華房の里ゟ近邊阿彌陀堂を建立す。邊鄙の地あれは開堂供養の導師に立べき人なし幸ひ遠長御坊ゝ南都高野に學びたる。希代の學者あるよし言傳ふ。此堂の供養をつとめ。村の男女に念佛を勸め給はれと。檜も匂ふ新造の御堂せましと押合つ。師の說法を待處に。香染の袈裟搖揚つゝ講席にすゝみ。御經開て宣やう釋尊一代の說法。大に分て二とあす。華嚴。阿含。方等。般若の十餘年の經々ゝ權經とて時を待

間の權の方便。又後八年の法華經あろ。如來出世の一大事。これを眞實經と名付なり。其ゝ私の義にあらず。四十二年の說法終り。さて佛の宣やう。これまで種々に說法せしゝ。皆方便にして未だ眞實を顯さずと。さしきつて斷り給ひたる御經ゝこれなりけりと。無量義經。說法品を取いでゝ。未顯眞實とある其文をさし示し其上彌陀ゝ西方十萬億土。他方の佛に在すなる。此土有緣の釋迦世尊。法華經第二の卷に今此三界ゝ皆我が有あり。其中の衆生ゝ悉く我子ありとあるものを我が親を捨て他人を尊むを道といふべきか。されべこそ念佛等の御經ゝあさましくも四十二年のうち方等部の經なれべ。名有て實なき極樂往生賴むかひなき阿彌陀佛その理も譯ずして。念佛開祖の法然御坊。煙のやうある阿彌陀を捉へ。本佛釋迦をふり捨よと。人を惑す地獄の罪業。たとへべ家に飼れし狗子の。下男奴僕に尾を搖て。主人を見てゝ却て吼る。賤きに狎。尊を惡む狗の眞似する諸宗の元祖この事を天台大師ゝ狗作務に狎たりと釋し給ひしぞと說かゝるを。群衆の中より聲かけて。佛を謗る狂氣の其賢僧を引出せ打よ擲と伏鉦の撞木を杖に立騷ぐ。遠長師ゝ斯ゐそゐらんと高座を退き蓮華寺へ立戻りたまへども。今ゝ此寺へも入奉らず。さらべこれより鎌倉に立超て彼の地に法を弘めんと。心決して小

湊にいたり両親にいとまを告んと音信給ふに。前日の不興にゝ似もつかず次郎夫婦ゝ門口まで出迎。上座に押居。鎌倉に弘通あるべき其志をも聞終り。さて宜やう。前の日細々と示されし教訓に我を折て。能々思めぐらせゞ。語るゝ今が初若菜。とし若き時我々夫婦。ある夜の夢に云々の。不測の事を見てしより。御身を懐妊なしつるも思へゞ遠き夢語それにつけても今日此頃諸宗の祖師も及びなき。道に心をかけ橋の。かけて弘むる御經あるを。老前近き身を忘れ。難波の浦のよしあしも。我が子と思ふ煩悩心。今生後生の罪ふかしと母もろともに觀念しけふより有無の亂髪。心に剃て菩提に入。御身が弘むる妙法の妙の一字は未來まで。我が子の受し紀念ぞと此を唄にいたゞきて。蓮華に捧日輪の夢の奇瑞の二を取。我ゝ妙日其母ゝ妙蓮と法名を定めんと。持佛の前に誓ひしぞ。御身が鎌倉におもむきて。後五百歳の御代の春。法運めでたく開く日を。指折かぞへて待ぞかしと涙ながらに宜にぞ。師も諸ともに露時雨。うれし涙に袖ぬれて。今日御兩親の得脱ゝ衆生教化の始なり。又御夢の吉瑞とて。御名を妙日妙蓮と聞うへからは慈父の日の字と慈母の蓮の字と此二字をもて我が名とし今日より日蓮と改名せん明なることと日に如ものあらんや清きこと蓮華に勝ものやあるされば此二字ゝ取

も直さず父母なり。これより鎌倉に立越て尊無過上の立行を開き。佛勅の如く。此法華經三千界に流布するあらゞ我が力用にあらずして。其ゝ父母の功德なりと。三誦一身三人の。親子ゝ浄き筒井筒。盧橘の香をあめて。けふ汲初る法の水。日蓮大士ゝ。懐中より御經を取出て今身より佛身に至まで能持南無妙法蓮華經と。慈父妙日御母妙蓮の御額に。御經おしあて授たまふ。これ我が宗門において本門受戒の始なり。父母御喜にたへ給はず。昨日ゝ我が子。今日よりゝ未來永劫懇業を救ひ給はる大導師。布施の品々ろれかれと。取揃もて供養しつ。門外に見送る老夫婦。おれまで灑し愛別の。身を知雨にふりかへて今ゝ嬉しき歓喜の涙。心直なる一筋の門田の。畔を高壁に。御題目を唱へつゝ鎌倉さして發足あし給ひけり。さても日蓮大士ゝ。五月の中旬船の便を求つゝ相摸の國へ渡海せんと。名古の海邊に趣き給ひしに。此程梅雨を。吹送るその北風に浪高く。往來の船も道絶て困果給ふ所に平郡泉澤と云里に。權ゝ頭太郎といへる人有けり。もと伊勢の國の由緒ある人なるが。久しく此地に住てありしが不圖大士に相見し一樹の蔭の旅の宿ろの弟次郎三郎ともに大士を敬つ。其化導を蒙るに。思はず日數を重てし大士ゝ此頃渡海なす風の日和を待わびて。後の山に攀渉り。海上はるかにみはたし八

大龍王護念の爲。爰時御經よみ場給ひしに。龍神納受やまし〳〵けん。されより空晴風穏になりにける。此地の里人ろの奇特を言傳へ。地名を南無妙法谷と稱す。今い略して南無谷と。よびなせり泉澤權の太夫兄弟その母の爲に法華堂をいとなむ弘安二年日念聖人をつかはして開堂して寺となし名付て成就山妙福寺といふ。妙福い其母の法名にして。大士自筆の本尊を授與あし給へり。斯いされより廿六年の後の事なり。其讀經ありし古蹟い。法華塚とて今に現存せり

南無谷妙福寺の開基日念師い松本坊と号し。もと天台博學の僧なり。宿緣有て眞間の日頂聖人に値て改宗し。又大士を拜して。別頭の秘法を受。命に依て此寺を草創し。大士を開山と仰ぎ。其身は二世に居又日頂聖人の畜恩を忘れず。寺をば眞間の末寺とせり

さても日蓮大師い。風凪海平にして。船出をいさむ口とゝに便船を求めつゝ。ろよ吹南風に眺帆片帆。取表楫に聲かはし。船路やすらに相摸なる。三浦郡浜田の浦。米が濱に着船し給ひける此浦の渚い遠淺くて船を岸には寄がたし。砂にさゝはる舷に大士い法衣の裾を揭持己に下立たまふを見て。流藻拾ふ海人が走より。我渡しまゐらせん御裾ぬらす給ふおとて。大師を

背に負奉り。片山岸の岩根まで。うつ敷波の荒磯を渡しまゐらせしに大師ろの志を喜つ見かへりたまふに其男の踵に血しほの流るゝを驚きて。いかに爲しやと問給へば。藻螺の殼に踏つけて。其角に踵を傷りはべると應ければ。大士憐みたまひ。持る藥もあらざれば。是好良藥の御經取出夏の日影の潮照。暑をしのぐ濱庇。巖の狹間に立よりて。しばし御經讀誦あし西をさしてぞ立去たまひける。不測やあれより此磯に生る藻螺の角折て。今の世までも。米が濱角あし藻螺の奇特をば。此地を尋て知ぬべし後年あゝに寺を建。ろの靈跡をさし示す。猿海山龍本寺とぞ聞へける。大師はこれより山路にかゝり。心無の里より守殿明神を遥拜し。多古江川を渡りたまふ。あゝい三位維盛の御子。六代御前の討れ給ひし處にて流るゝ川を最期川とよび傳へ其御墓も青葉かくれに見へ渡り誠に一朝の花と時めきし平家一門のなれの果いと哀れに思し出。御題目を唱へつゝ榛に暗き木下闇ゆくて嶮しき名越坂洞なす。山の切通し水無月ちかき此頃の暑き日影にたへたまはず。茂る木蔭に一掬の水もがなと。求給ひしにぞ。岩の間にとく〳〵と。音して清水の涌出たり。大士喜で御手に結び。如以甘露と。おしいたゞき咽をうるほしたまひける其味甘くして且清冷に。類ひ稀なる水なりとて。其頃鎌倉五名水の

第一と稱し・今に名超の道側に殘り・いかゐる旱魃よも・酒ことゐく日蓮水と尊稱す・大士鎌倉に入て世の眞相を見聞あしたまふに思へゞ此地に遊學せしもはや十二年の一昔去る寛元二年執權北條經時鎌倉四代の將軍頼經公を京都に追遣せりの御子六歲にならせ給ふ頼嗣を將軍とおし奉り此幼君の補佐を名とし北條一家我意の振舞多かりければ前將軍頼經公京都に在てあれを惡み北條を討亡すべき御謀叛を企て給ひける此事はやく露顯に及びければ今の將軍頼嗣公漸く御齡十四歲ゐるを謀叛人の子ゐりとて深く惡奉り相摸守時頼陸奥守重時の兩人より京都に奏聞し頼嗣公を退け後嵯峨天皇第一の皇子宗尊親王とて御年十一歲なるを關東に迎へ征夷大將軍に任じさらに世の中も事あらたまりて見えにける日蓮大士は鎌倉大町の南名越の東の山際にいさゝかなる餘地ありしをあゝに土を均し地を坦め杣木の柱ふしゝゆく竹掘わさして椽とし尾花刈吹我葺も七堂伽藍にいやまさる久遠本果の古佛塔大師ゝあゝに日を送り經文讀誦の外さらに他事なく見えにける大町米町材木座傘町名越ゐの邊の人うはさして彼處に御經よみすます道德不思議の僧ありとて尊き事に語つたへけるとゐん大師ゝ鎌倉府内の諸宗門北條一門歸依の僧天下の有樣世の姿まで心をとゝめ猥の言を出し

たまえず身を如法堅固にまもりつゝ雄氣を養ひ在すうち社司大伴に紹介を來め鶴が岡の經藏に入給ふあれゝ去る建暦元年十月十九日實朝將軍永福寺において供養ありし宋本開元の目錄五千四十八卷の藏經なり此等の事に秋暮てきのふの露に置かへる大路の霜の村消に履音しづかにおとづるゝ者あり大士誰そといらへて對面あるに三十あまりの氣高き法師容貌柔和に小膝を折大士を三禮し奉り我ゝ叡山に修學あす成辨といふ未熟の僧にはべるが久しく彼の山に在學すあれまで年頃學びたる天台傳敎両大師の書類をもつて三堂の學者に論談するに法門さらに相合ず尙弘く其義理を尋やしに慈覺大師ゝ傳敎の法弟にありながら還て其法流を亂したる法敵なりと見定てゝの不審を學頭に告しかば其元ゝ遵長が弟子にいゐらぬやと問れて其ゝ辨へず其遵長といいかなる人そと尋しかゞあれゝ近き頃房州より來て此山に學問せしが慈覺大師を佛敵法敵と罵るゆゑ夫ゝ傳敎を知て未だ慈覺を知ぬなりと言諭しても心解ずそのまゝ山を退きぬ御坊の問るゝ處能其遵長に似たるゝと聞も嬉しゝその人は何國にありやと尋しに無動寺の尊海といへる僧その席にありて遵長ゐろ國にかへり近き頃ゝ名を日遵と改めて鎌倉に見えたれど風の便にきゝけるとさし示されて嬉しくも其師

に値べ我が胸の月に隈なす雲霧も晴ずやいとて山を下り音羽の瀧のおとにきく其名ばかりを知邊にて漸くこゝに尋ね得しと其眞心の尊びはいはねど色に見えにける大士いその始終聞終り不測にも同道ふむ菩提の樹わたす教のあからずやと此より師側に在て日々に疑難の條々を書もて大士に問奉り大士喜でこれを解釋寢食を忘れて教化あし給ふに成辨い坐に感涙拭ひあへず幾日もあらで本化の宗流を識得て晴し心のうれしさに本門の大戒を受て改て法弟となり給ふ大士も此鎌倉に入てかゝる學匠の法弟を得玉ひし事實に百萬の珍寶を得たる心地して其が父の名を祐昭と云よし聞召其昭の字に我が一字をそへて日昭とぞ名れけるこれより水に薪に朝夕の炊さへまめやかに立舞て大士に事へ給ひける一日大士御經半途に日昭を召れ我幼年よりの志願こゝに滿足し上行所傳の妙法を四海に弘むなる書此御經を經の如く弘るあらば三類の强敵とて當時の名僧智識第一に怒を發し上に讒奏を搆へ上も亦其邪正その善惡を正さず度〳〵島へも流しあるひは頸に及ぶべしと今聽さしたる五の卷勸持品二十行の偈の文に見えたり御身我が弟子ながらも我よりひとつ齡たかし今日本國中に充滿る念佛眞言禪の諸宗この諸經中王の法華經の勅命に背き方便下劣の分際を忘れ

法華の利益を奪はんとす我是より忠勤を抽で征伐に取かゝり其權門の諸宗を退治し一天四海みな妙法の民とあさんとす然いあれども敵い多勢我れい唯一人あり身命を期とするとも獅子をもつて磐石にうち當るより猶危し若我討死をもなすあらば末法萬年の群類を誰かたすくる者あらん御身けふよりじを決し日蓮大敵と合戰を挑みいかに成ゆく事ありとも必ずあれをと顧見ず信心有緣の味方を圓めつゝいて旗を揚られよ共に討死するも忠又惜からぬ身を存命て再び家を興すこと却て拔群の大忠なるぞ努々忘れ給あといと丁寧に宜へば日昭師も涙に咽び歡ならぬ身も法の爲難事を忍び御遺狀にい戻らじと心安かれとありければ大士い御兄の色を顯し給ひ日昭師も同者に勸持品をぞ讀上給ひける此六老僧の第一位大成辨阿闍梨日昭上人とて大士當に殿堂と唱給ひしい此御坊にぞおはしける抑此日昭聖人と云い下總國葛飾郡平賀の郷に平賀祐昭と云者の子と其い福有よして田園に富郡鄕に尊敬せられ輕からぬ鄕民と兄弟三人にて姉い印東次部左衛門有國に嫁す又一人の舍弟あり日昭師い承久三年をもつて生る生質篤實にしてをさなきより禮儀正しく進退度にかなふ殊に書籍を讀事を好で僧に交り寺に遊ぶことを樂とす十二歳の頃より靜なる事を愛し人に應對する

を喜ばず父祐昭才智の人にて夙く其宿緣を察して十六歲の時出家せしむ後年敵山に於て奇遇の因緣を挽鎌倉に下て日蓮大士の上足となり末代法華弘通の後殿と定られ大士鎌倉府內を追出されし事二十餘度また伊豆に三年佐渡に四年の流罪に處し又龍の口の死罪大難かゝる大士の急難にも兼ての約束日昭師ゝ些もあれを念とせず歸依の人々隨身の徒弟等四散に落行べき味方の殘兵を圓め濱土の邊をかくれ住大法將日蓮が法運遂に開くべき時節をはかり給ひしはこれも亦六萬の副將軍本化薩埵の再身とこそ思はれけれ

日照聖人鎌倉末葉が谷に來て大士の法弟となりしは三十三の時にして大士より歸ひとつ立起給ふ年齡といひ道學といひ智德圓滿の法弟ゆゑ後陣の任を命じ給ひしも又宜なり。我が宗運既に開け大士入滅の後ゝ鎌倉の濱土に歸り。師恩報謝の爲。心と喪に籠り。讀經禮讚十三年に及ぶ。おゝに比叡山の尊海。老屈して九十一歲日蓮大士宗門を弘め給ひしより。成辨も亦ろの弟子となり師匠の跡を繼て在すとき。昔なつかしく正安二年の春。書通を鎌倉に贈り。本門の大戒を受ざるを悔たまふ文脉を見て。日昭聖人も此時七十九歲おしかたの空戀しくや思しけん二人の弟子に扶けられ遙々京都に登給ひければ尊

師ゝ面もひがけなき今生の對面を喜びむかし日蓮聖人いまだ遠長といひし頃鎌倉の旅の舍に初て知己とあり我も昔しゝ男山。盛なる身ゝ張つよく。聖人を此比叡山に連來しも今指折算れば。六十餘年の昔なりと。老の瞼に淚をうかめ。在し世の物語にとりまぜて。本化別頭の法門を談じ。受戒終て鎌倉へ歸けり。日昭聖人五十餘年の間法を護て在したる。由井の濱土の蟹居の草庵。この程越後信濃兩國の太守風間信濃守信昭。大檀那と成て一寺を造立し。弘演山妙法華寺と名づけ。法弟日祐をもつて住持とす時に元享三年三月廿六日。日昭聖人世壽百三歲にして示寂おし給ふ。大士內滅より四十三年の後なり。此濱土の靈地も程なく正慶建武の亂に戰場となり妙法華寺も兵火の爲に燒失おはれ日祐聖人ゝ寶物わづかに襟にかけて池上に。逃去。漸く豆州雲金村に東金山妙本寺を健ていさゝか古蹟をとゞむ其後法孫十三代日包聖人文緣年中同國田方郡賀殿村に鎌倉濱土妙法華寺の號をもつて一寺を建立す元和年中第十六代日亮聖人新に今の伊豆玉澤を開基し昔の寺号に倣て妙法華寺と稱し山號ゝ經王山と改む第二十一代一乘院日養聖人ゝ俗姓陰山氏にして紀府水府兩館の御母堂養珠院殿阿萬の方の姪なり此ゆゑを

もて當山とれより美觀を盡し諸堂魏々として一方の大本山といはれり實にや開山日昭
大聖人のむかし由井の濱土に竹を編流よる藻汐草をかき集め家根を葺つゝ雨露を凌ぎ
わびてし五十年艱難辛苦の護法の功德後年こゝに顯はれけりと別て尊く思はれけり
愚者い愚を知らずしらざるゆゑにこれを愚といふ賢明哉本化の肉身日蓮大士去る建長五
年この鎌倉に來り今年甲寅の四月廿八日名越松葉が谷の御草庵に天照太神三十番神を勸請
し奉り御筆を取て南無妙法蓮華經の七字を大文字に御認有てこれを法樂に捧給ひ名越
の往還間近ある處に高座を儲說法利生の花を雨せ給ふに去年よりこゝかしこに噂の聞えた
る事なれば米町辻町の邊より遠近に語傳へ言繼て聽聞する者いと多し高祖大士い一代の御
經に權教あり實教あり方便あり眞實あり又正法あり邪法ある事を說喩し日出ぬれば星かく
れ末法の今に至ていい法華經の外諸經に利益いあらぬよし懇懃にさし示給ふこと幼稚に乳房
を與ふる母の如し一日いかめしく太刀を佩たるひとりの武士人目を憚る編笠深く御庵室の
外表に佇立始終聽聞し居たりけるが說法果て笠脫棄聖人にいさゝか不審あり如來元來僞り
なしいつはりなきゆゑ佛といふ念佛眞言禪律の經々を方便無得道と說給ふいその所聞なき

に似たりとありければ大士笑を含給ひされば塔を建んにい先ろの足代を組これを方便
といふ大塔全く成就せば足代を取捨るなりあれを眞實といふ大聖世尊法華經の大寶塔を造
立せん爲に四十餘年の間禪念佛の諸經の足代を說たまふ今あれを切棄るを正直捨方便と御
經に見えたるはと明示し給へば彼の武士しばし默然としてありけるが立て三禮し率り此程
出勤のかへるさに度々聖人の御演說をきゝまゐらせ何となく御德の慕はしく今日しも見參
に入るうれしさよ我い北條の一門江馬遠江守の近臣にて四條金吾賴基といふ者あるが近
き頃建長寺の道隆禪師に參禪し專に坐禪工夫を凝しはべろうち聖人の說法に心傾きふ
かく隨喜し奉るにあそと疑ひある條々を問まゐらせ遂々ろの理に感伏し忽ち邪を捨て正法
に歸したりけりこれぞ江馬殿の家臣にて府內に名高く武勇の勝れたるのみならず文學あと
に學たかく醫師の術にさへ達し篤實の聞へある雄士あるがこれより深く大士を尊信し勤仕
の暇にい日夜御側に在て法をきゝ妻も亦ともに歸依し率り朝夕の食物より其折々の衣服ま
で心にかけ供養し奉りける頃しも水無月盡の暑をいとひつゝ夕日傾く酉時日蓮大士い筋違
橋より若宮小路にかゝり名越の方に歸らんと思しる途中俄に白雨ふりいでたるにかざす

法衣の袖笠も凌ぎかねたる礫雨いかゝいせんと見たまふ處に袴の裾を高く取揚年猶わかき侍のうれある御僧よ此傘に入給へとさし招くにそいと嬉しく會釋して其人に伴はれたまふ他生の緣の傘やどり我れ名越へ歸なる御身い何地へ往給ふやと問れて我も名越の者ありと答給へばそれよき同伴ありさあらば御僧彼の地に日蓮といへる法師を知たまふや大士答て我い其日蓮にて侍るといへば彼の侍うち驚きさいつ頃より人の語をきゝはべるに天下の御歸依淺からざる禪宗を天魔の眷屬と宣ふよし出家にも似ぬ雜言と我いいはねど世間の取沙汰實にさる綷もいはるゝにやと遠く詰ればうちうなつき出家の身い元來佛の使なり世を畏れ人に媚てこれをいはずい道立ず抑禪の宗流い敎外別傳と學び不立文字と示すありかゝる宗旨を御經には我入滅の後は大士大悲をもつて文字と成て衆生を利益せんもし佛敎に依らずして成佛得脫すといふ者あらば天魔の眷屬ありと說おかせ給ふ禪宗の魔族外道あると御經分明なり天魔を天魔とさしていふ我が惡言と思ひたまふはいかにそやと難じかへされ半句も出ず我い進士太郎善春とて北條家の近臣なり明鏡四條頼基が聖人の門に入て勤れども受がはず今日はた不測の合傘に觸る扶の法の緣型あらためて敎を受んと目禮し心も

雨もやゝ晴し辻は邪正の別路いとまを告て歸りける進士善春いこれより大士を信ずる心厚明暮些の暇にも御菴室を訪まゐらせゝに在日を多かりける夏去秋も吳竹の軒端を拂ふ音さゝて燈檠はそき有明がた大士い奇異ある夢を見るなはしけり山も崩るゝばかりの大雷の鳴はためき此菴室の茅の庇をうちぬきて其所に墮たりと見るうちに忽ち天氣朗かにありけりと側の人にうの御夢を語給ふ折から下總國葛島郡能手の人印東次郎左衛門有國聖人にまみえまいらせたきよし言入るにそ日昭師案内して席に居らしむ有國恭しく額つきて我度々此地に來り聖人の說法を聞奉り其深妙の法蓮夜に忘れがたく鎌に歸て妻にも語らひ一人の男子吉祥といふ麿を徒弟に附んと遙々此兒を携來ぬ此兒の母い法弟日昭の姉なれば伯父甥といひ法兄弟宿世奇特の因緣とおぼし願ひに任給ひねとありければ日蓮大士悅たまひ雷の墮たりと夢見しその席に處もはからず吉祥麿が座したるも正しく此兒の法弟となるべき瑞相あらんと其儘御側にさし置せたまひ天朗ありし夢に因みて日朗と名付給ふ此時齡十歲にありけるが常に大士の御膝近く事へ奉り給仕のいとま手蹟學問を勵むゐと一方あらず見えにけり

日朗聖人は寛元三年乙巳四月八日の誕生にして幼少の時より外柔和にして内に勇猛の氣を含みかりそめにも他と童と交り遊ばず穏おくして稍年高たる人の如くありけり大士御一生の間よく事へて孝行第一と曙れ給ひ大國阿闍梨といひ又筑後公と稱す大士滅後三十九年元應元年庚申の正月廿一日に示寂す御遺命に依て松葉が谷に荼毗し阿蘇畠の山の頂に葬る塚の上の松を墮涙の松といふ此地は文應元年宗祖松葉が谷に燒討に値給ひし時御身をかくしたる巖窟あり越中阿闍梨朗慶聖人と丶に寺を建て猿畠山法性寺といふ日朗聖人に九人の弟子あり世にこれを九老僧とて日像日輪日善日傳日範日印日登日行朗慶の九人をいふ其うち朗慶師は荏原義宗の末子なり

茲に下総國葛飾郡八幡の郷若宮の里に富木播磨守胤繼といふ諸侯ありけり清和天皇十代の後胤にして本國は西州富木の城主たりしが今は此下総國若宮に住居し上総下総兩國に知行を領し世に聞えたる名家なり貫名の次郎重忠が妻梅菊が父は此富木氏の一族あり梅菊貫名が妻となりしより悲れや聚がる宿世の緣富木胤繼も折を得て鎌倉殿に訴訟貫名が無實の事を言解て本領安堵させんものと久しく心に掛られたれど天下に非分の訴のみ多く政所

の混雜に言出ずべき潮もなくそのまゝ月日を經うちに貫名の一子善日麿が出家と成しを喜びたまひ我もと佛法師依あれば何卒これを能出家に生立し大道利生の聖人ともあさば彼の家を再興より百倍ならんと鎌倉の遊學叡山の修行二十年の食料衣服贈る管なる両親は世に棄られし羽抜鳥我が子を翼翅もなく富木の家より何くれと皆これを惠まれしは龍に水を施し火に風を添るが如しかゝる大導師を養立し富木の大功實に佛門の柱石とも謂つべしあくて日蓮大士はいよ〳〵鎌倉に供法の志をさだめ妙法の幟を一天にひるがへさんと思ものからかゝる重恩の富木殿に一度此法門を傳へずば須彌八萬の頂より高かる恩を知らぬに似たりと年今霜月初旬かた武藏にかゝり下總國若宮の館におもむきかくと案内を請けるに生憎に殿は今朝鎌倉に參勤の首途して船よりかしこに赴き給ひぬときゝて大士は本意なくは思せども時今已牌の螺角にいすゝしはやかり便船もとめて御後慕ひ御船に追付奉らんとうこ〳〵に暇を告二子の漢に立出て船場はるかに見やりたまへは高樓造の御座船に紅白吹貫の船印水色に桔梗の紋の幕打廻し水子楫取は一様の出立に陣笠し稽柏子取て唄連船出後し地風に冲合遠く漕出るを日蓮大士は檜の笠をさし揚て富木殿の御船しばしと呼

たまへば富木殿耳を聳て幕の人見よりかいまみ給ふにまがふ方なき蓮長師ありければ後の僧あれへと麾のした直に小船に迎來て目通ちかく招入たまふに日蓮大士兩手を支へ謹んで絶て久しき拶挨の詞眞中に富木胤綱大士をはつたと睨へていかに其方天魔破旬の其身に入去年古鄕安房にかへり諸宗を惡口なすよしい慥にうれと聞定ぬ悔てかへらぬ事ながらあの年月衣食を贈り性根の惡き道心を養立し身の罪障いつか汝を招寄言德さんと思ひしも繁き公務にいとまなく今日のいままで過したり我目前に諸宗を焚り惡言なさば一殺多生の慈悲なれば細顆討て捨んずといきまき給へば大士些も臆し給はず富木殿しばし待さまへ法門ひとつ語告さん本より殿の信仰深き比叡山慈覺大士の邪流の法門妃の腹に卑夫の種を孕たるやうに法華と眞言とを習合せて法華經を穢し其上此法門佛の意に協ふやいかにと佛前に七日の間祈誓を凝したる五日目の夜寅の時日輪を的として放箭の弦音たかく鳴ひゝき日天子を射て落したりと夢に見てさてい我が法佛意に的中したりと喜でろの宗義を弘めし事あれど邪法の證據あり釋尊の御名をば日種とよぶうれゆゑにころ須跋多羅い日の落るを夢に見て佛の御入滅近けれと知又唐土に築といへる國王は日を的として箭を放ちて其國を亡

したり又我朝い日本とて日の御神を主とすゐれを射落て吉夢と思ひたる慈覺大師いよも正氣には在すまじ定て惡魔の入たるあらんと眞言と法華とい七段の相違ある事を問に答へ酷るに感じ眞言亡國の法理を說給ふに富木殿い握りし拳の張ゆるみ宿因催す後悔懺悔大士に深く鹿忽を託たちまち眞言の珠數を切り今身より佛身にいたるまで能持べき妙法の誓の船のいと早く武州久良岐郡六浦の濱に着船し互ひゝ再會を期して立別給ひ日蓮大士い是より一心決定し名越の庵室を根城と定め日昭聖人いまた後殿の任を身にひき受大士の御手を扶法弟檀越を敎化して專別頭の法門を弘通なし給ひければ大法將日蓮大士い日に〳〵辻町の東小町往還の路に立て往來の人の足をとゞめ念佛い無間地獄の業因よ禪宗い天魔の邪法眞言い國を亡す大惡法律い國の賊なりと聲を限りに喚はり給ひ末法當今の衆生の爲にい南無妙法蓮華經の外たすかるべき正法なしと御經に卷かへし繰かへし說示たまへゞ流る水を塞が如く眠る獅子を擲がおとく立つたふ僧俗男女黑山の如く眼を怒らし牙を咬惡口過言をするもあり氣の狂ひたる痴者ありと笑ふもあり阿彌陀如來の現罰いかゝるものとて石瓦礫古履雨あられ御身に當るを事ともせず諸宗無得道墮地獄と高聲に喚はり給へゞ一人の老

人あまたの群集押わけて人の騒ぐを窺めつゝ御身い出家にありながら心きたなくも路端に立て說法し人に罵打るゝが修行あらんやいと見苦と懇ぶりに言詰るを大士いいやとよ畏給へむかし不輕菩薩い石瓦を擲うたれながら法華經を弘たまひ又龍樹菩薩い赤き旗を建王城をめぐる事七年法道三藏い面に火印を當られあがら佛法を弘む今末法の一切衆生五濁亂離に心濁海を山と見西を東と心得る天地轉倒の濁惡世正法を弘る者怨敵あくて餘ふべきやと言懲せば首を抱て後込す又一人の脊侍御出家に物言さん儒道佛道ともに禮義あり往還に佇立で其大法を說とい非禮の振舞心得がたしと立かゝるを人間い座して食するが禮あれども亂軍急塲の兵粮い立て食するも亦禮あるを知給はずやと返し難じて打針に又立替てされはとよ念佛禪の諸宗門御上に立畫法なるをろの好惡をいふ事い片腹痛しといひ詰るを王侯貴人い皆在家の俗衆なり在俗何ぞ法の邪正を知召さん在家の衆に佛法の偏圓邪正を敎てろれを導くが出家の本業あるぞよと逸々に既聞せ給へども道理を曲る邪智愚昧皆口々に罵りて果い崩るゝ人の山黃昏時に法戰はてゝ御題目高らかに唱へつゝ御庵室に立戻り給ふかく日々の辻說法に諸宗惡口の塵を揚僧俗誹謗のひゝきを傳へ鎌倉殿昵近諸士の面々も此をきゝ是を見れどもいかにともせんすべおく鎌倉一圓の取沙汰區々なるに建長寺の道隆禪師光明寺の良忠上人極樂寺の良觀大佛殿の別當隆觀ろの餘多寶寺長樂寺等みおこの頃道學の譽たかく萬人の歸依深き名僧なるが松葉の谷の日蓮とかいふ痴迷僧が面白く諸宗を謗り往返とぞあれも一時の流行あらんと口にい嘲哢し笑へども心のうちにい胸焦れ腸熱し怒の劍を鍛けるこれぞ末法三類の强敵の一種にして僧聖僧上慢とて後年遂に法華の大怨敵とぞなりにける其辻說法の古蹟小町の路傍に日蓮聖人腰懸石とて今にその俤い殘りけり今年乙卯も歲暮て康元元年丙辰二月廿九日の事ありけるが俄に大雨大風吹荒て關東洪水おなじ六月十四日の曉天鶴が岡八幡宮の社震動して鎌倉中に鳴ひゝく其日の己の刻ごろ空に白鷺ほどのもの飛めぐり忽ち碎て火の車の形をおし大さ五尺ばかりにて絹を裂が如き響して一道の跡を東西の方に飛去りけり白鷺の飛星い前代未聞のよしかたり傳へすべて去る寅年より諸國に凶變多く四年このかた五穀登らず氣候不順にして寒中桃櫻の花さき暑中却て雪霜をふらせ田畑次第に痩損じかくてい人命いかに繫ぐらんと末恐しき世の有樣なりけり執權北條時賴も十一月飾をおろし禪門に入覺丁坊道崇入道と稱しろの子正壽麿七歲

おのけるを將軍の御前に於て元服せしめ宗の一字を賜つて宗時と名乘一族重時の次男武藏守長時をもつて補佐となし大事ハ皆時頼入道決斷せられける此頃青砥左衛門藤綱とハふ泰行あり此人ハ始眞言宗の僧なりしが佛法ハ僞り多しとて廿一歳の時還俗して廿八歳にて鎌倉殿に奉公し天下の政道にあづかる常に細布の直垂に布の大口を着て問註所に出勤し朝夕の膳部ハ乾たる魚と燒鹽の外とゝのへず其廉直世に知處あり上にハ最明寺時頼あり下にハ此青砥ありて四海の成敗上下の仕置道に當らずといふ事あしこのうへ世に變災あくば世間に物ハおもはじと萬人ひとしく天下の靜謐をぞ祈ける時に日蓮大士ハ日々十字の辻に立て而强毒之の皷をうち諸宗權門を攻伐給ふに珠數を切て降參するもありいよ〳〵怒て怨むもあり妻の信じて夫に迫れ子の歸依して親に怒らるゝも亦すくなからず折伏弘通のろの中に房州天津の領主工藤左近之亟吉隆御所勤番のいとま化導を受て檀越となるこゝに又池上右衛門太夫宗仲といふ士あり代々作事の奉行をもて將軍家に事へ武州荏原郡千束の鄕を領地に給り池上に住居し天下に墨繩をもつて職とする者ハ屬命をこの池上に受ざるはなしおゝをもつて田園ゆたかに家富さかへ春秋両度鎌倉に出勤のいとま建長壽福両山に入て禪學

を修行しけるがちがごろ名越に諸宗を悪口する僧あるよしかゝる者には近寄ぬこそよけれとて途中にて大士の說法を見れば耳を塞で往過ける然るに此池上宗仲兼て四條金吾頼基は親しき友ありければ頼基種々に敎導して名越に伴ひしが宗仲一度大士に目見えけり涙ながらに前非を悔て受戒せり其弟兵衛志もともに檀越となる又池上の緣家に荏原左衛門義宗といふ人ありけり八幡太郎義家の曾孫にして武州荏原を領して中延に居住し世に武名の聞えありて荏原殿と稱す近き頃大士に師檀の契を結びけるが此家に先祖甲斐守頼信以來頼義義家三代軍中守護の八幡の神像あり一夜靈夢の神勅に依て大士に點眼を願ふ後年に及び義宗の子德次郎といひしを日郎聖人の法弟となし九老僧のうち朝慶聖人これなり此師中延に一寺を建立し祠を立て八幡宮を安置し八幡山妙法蓮寺と號す今に中延の八幡宮とて諸人渴仰せりこゝに鎌倉炭賣川の邊に住賤しき者ありて夙く父母に死別れ世に力なき孤獨の童とし十六になりけるが宿世に植し種ありや深く大士を歸依し奉り賤の子なればかひなくてせめて世を早うせし両親の菩提のため御菴室に炊せばやと願ひければ其意にまかせ名を熊王と呼いと眞實に事ける此時にいたり歸依の檀越池上荏原富木四條我も〳〵と供養を捧

松葉が谷の御草室にハ朝夕の煙賑しく法弟隨身の輩も何一不足なく道心の内に衣食ありとハかゝる事やいふ成べし又甲州巨摩郡波木井に住居ある南部六郎實長といふ人あり新羅義光六代の血統にして當國飯野御牧波木井三が郷の領主たり性質篤實にして思慮明かに深く佛法を信ず初て大士に相見舊來の權宗を棄て本門の大戒を受信力こゝに勝れて一宗に輝き後年其領内の身延山を大士に寄附したり末法萬年妙經流布の基を開きたまひし大檀那にぞ在しける

日蓮大士眞實傳二之卷畢

日蓮大士眞實傳三之卷

東海相摸州　小川泰堂編述

世法ハもと佛法佛法本より世法あり天晴ぬれバ地明かに法華を識る者豈世法にうとからん法華の信者ふかく此理を察すべしされバ建長康元もきのふと暮今年正嘉元年丁巳の春にいたり四季の氣候不順にて四月の月蝕五月の日蝕ともに恒あらず同十八日海の潮泥に變じたるこハいかにと思ふうちにその夜子の刻大地震そのうへ三月より此方雨一滴もふらず田畠涸乾て野に一株の青草だにおし六月加賀法印雨請七月鶴が岡の僧正も雨請ありけれども一切に驗なく大地燒焦れて人間さへ命つくべしとも思れずありけるに八月朔日より地震ゆりはじめ同廿三日夜の戌時地震のありさま地底しバらく鳴動するよと見へしが大地を搖揚たる事大凡二丈ばかり大名小名堂塔伽藍の差別なく其外町家農民の住居海郎の磯舍にいたるまで瞬内に微塵となり人畜ともに大半これが爲に命を喪ひたま〳〵免れたる人も傷つかざるハ稀なりけり其山岳の鳴ゞよむこゑすさまじく大地ハ三尺五尺ひゝ破れて泥水を吹出

し又青き火焔十丈二十丈所々より長空に立登りそれより百日ばかりの間震動止ず又十月十三日一天俄に五色の雲を搖亂す又いかゐる憂目にや見るらんと思ふうち鉾の如き電光八方に散亂し人の眼を貫ぬくばかりしゞしゝて大雷鳴はためき礫扇障子をうち外す又同十五日にも大雷地震おりかさなり打つゞく凶變ゝ東鑑に載て詳かなりこゝにゝその大略を述るのみかゝれゞ鎌倉をはじめ關東廿八か國。農民ゝ鰯鍬を取らず。漁者ゝ網を曳によしなく米穀諸色賣買の道絶果てよし天災を免れたるも。餓死者ぞ多かりける。日蓮大士此ありさまを見そなはしてあまたゝび。歎息し近年の凶變。別て今年の有樣ゝ。時運にもあらず。天災にもあらず。全く給華經流布の時節なるを。念佛眞言の諸宗門その。大法の妨をあす。天怒り地罰し給ふに疑あらじ。此事を房州淸澄。南都の藥師寺。下總土橋東漸寺。鎌倉鶴が岡と四度まで一切經藏に入てこれを考へ置たり。今一度藏經を開て。證據となるべき諸經の要文を撰ばんと。正嘉二年正月六日。鎌倉を立て駿州岩本實相寺の經藏に趣きたまふ。日朗師は御側さらず櫃包を背に負て。大士に從ひ奉りけり。七日の夕月山の端にかくれ沼津の海邊に行暮て。やどるべき方もなく。俳ひあやしき茅葺の辻堂のありければ。ゝに一夜を明しつゝ。今宵は七

草の嘉辰なればとて。香を炷て御經誦讀在しけるにぞ。軒端に近き海原より。龍燈しば〳〵往來して。夜も亦還て晝の如し。これ正しく八大龍王護念の供養とぞ知られける。此堂はもと當地の齋藤彌三郎利安。先代妙覺寺門の爲に。營む處なるが。此龍燈の奇瑞を感じ。明の朝山本重安と共に來て大士に朝餉を奉り。この日は强てとゝめ參らせ一家。のこりなく受戒して。御題目を唱へつれ。大ひに佛事をいとなみけり

後年中老僧但馬房日實。山本重安が宅地を寺とし。龍王山妙海寺と號し。また齋藤利安も家を轉じて滿松山妙覺寺といふ。兩寺ともに今に毎年正月八日。法會を修してむかしの式法をのこすとぞ

駿州富士郡岩本實相寺といふは比叡山橫川に屬する天台の寺院あり當山の一切經は智證大師唐土より二部を持來り。一部三井寺に納めたるは。治承の兵亂に燒失し一部此山に傳來す高祖大士この經藏に入り給ひしに。常院の學頭。智海法印はじめて高祖に値まゐらせたるに。世に嘲するとは其人躰。天地雲泥の相違にして。道德たかく。智解ひろし。智海は恐れうやまひよき折柄ありとて。磨訶止觀の講釋を願ふ。これに依て藏經を讀給ふいとま。時々止觀を講論

なし給ふに聽聞するとの甚だ多くして。歸依の心を發すものも亦すくなからず。就中當山に伯耆坊といふ所化ありて。齡十四歳こは美濃國司櫛善根が裔孫。大井庄司の子にして。甲州巨摩郡鰍澤の人なり母は駿州由井氏。河合入道の娘なり。ろの母腹に白き蓮華の生ずると夢見て懐姙し寛元四年丙午の五月八日に出生し頭の頂に黒子七ありて七曜破軍の星に似たり八歳の時兩親携て岩本實相寺に登り。播磨二位阿闍梨律師の從弟とあす。此見は我が一宗の豪傑にあらんとて。三井寺に登す。此頃母の身まかりたるに依て其葛藤にとて歸り來て當山に居。高祖大士の容貌を拜し。しきりに隨喜の心を起せり。學頭智海はやく其意を察し。ひそかに我が家にまねきさて言やう我ふかく日蓮聖人の大德を慕ひ願くハ其弟子となりく履をも採んと思へとも。いかにせん三井寺より。當山の學頭に附られし。我が身の上ハ爲すべなし御身ハいまだ若輩おれども末たのもしき器量なり熟世上を考ふるに諸宗の佛法皆末枯たり。今出家の本懐を遂んとおもハゝ。聖人の法弟となりて。一佛乘を學び給へと。懇にすゝめけるにそ。伯耆坊よろこびの涙せきあへず在しけるが。此春の季高祖の慈父次郎重忠逝去あるしよし。房州より告來り。大士これを聞て哀感にたへず。聲をあげて哭慟あし給ひ。三五日の

程ハ飲食もなし給はず。歎きに暮もやゝ暮て。涙をうゝぐ竹の杖。力おき身を扶けられやがて鎌倉に歸り給ふ。こゝに彼の伯耆坊ハ智海法印の前らひにて。ひろかに實相寺をのがれ出海く沼津にて大士に追つき奉り。その志願をのべて。歎きけるにそ。これを不便に思召。ともに鎌倉に携かへり。名を日興と召れ。また其母の夢の綜をきこしめし。後年百蓮阿闍梨と稱し六老僧第三に列り給ひけり

日興聖人。大士入滅の後その遺命に任せ。五老僧とともに身延山に籠り。常在院を建て。こゝに喪を終り。其後輪番に此山を守護あし給ひける。茲に大檀那。波木井六郎實長。ある時身延久遠寺に詣で。大士の滅後わづかに七年。樗蠶食礎石苔に埋む實長歎息して。六老僧に談じ給ふやう。此山を輪番に守護すると。高祖の遺命おれハこれを改めがたしといへども。法の爲山の爲甚だよろしき處にあらず。その故ハ當山に主職あし。當番の主ハこゝに居事旅の舍に居るが如く。疎ずるとにハあられども。各 我が寺の修復に心取れ本化栖神の靈場も。年を追て衰ふる事のありもやせん。早く住持を定て。万年の榮へを計るハいかにとありければ。各 詞を揃へ。法ハ出家に依て久住し。寺ハ檀那に因て榮ふ波木井

殿い寺の永續を專一にする任なれば。其義貴尊に信すべしとありけるに。日興聖人ひとりこれを承諾たまはず。法子檀越の身として。師の遺狀に背く法やある。寺の盛衰い在家の御身等が預る處にあらずと答へ給ふ波木井殿甚だ不興の色をあらはし一座の老僧皆然りとす。實師獨非禮の言を述給ふいいはれなし。今日より御身と交を絶んとありければ。日興聖人も法衣の袖を拂て立給ふ。それより時の當番日向聖人をもつて身延山の住職となしけるにそ。日興聖人いよ〳〵波木井殿と中絶たれば。富木比企。池上も自然音信を通ぜず大檀那四人かくの如きゆえ。日昭日朗日向日頂日持の五人も。みな疎緣になりゆき日興聖人い唯一人。背くまじとおほせども。自然と身延一山は敵の城廓のやうにおりゆきけるにそ。十月の初めつかた。鰍澤に在して一通の書を認め。下野坊日忍を使として。波木井殿につかはし。和談の心ありけれども。實長一言の返事にさへ及ばれずこゝにおゐて日興聖人も憤りを含み。房州北野郡保田村に後を隱し。門を杜て讀經あし給ふと久し。今の中谷山妙本寺ろの古跡あり。上野殿い法の因ふかゝりければ。後年日興聖人を迎へて大石寺を建立し又北山に本門寺を建正慶元年壬申の二月七日日興聖

人示寂す時に八十八歳なりけり。此傳によく心をこめて見るべし。日興聖人い勝劣一涙を立んとて。身延に背きたるにあらず身延山と中不合になりもきしゆえ。おのづから一涙の流義も發れり。誠に師檀の中間にいさゝか是非を諍てより。平等一味の海に別派の波を起したる事悲むべし。願くい其末流を汲ん者我慢偏執の風を收め。相互ひに平等大慈の本懷に根づかい。眞如の法水從來諍ふ處なからん。若又彼と此とい黑白の相違ある別流おりと專らバ高祖大士かねて六老僧と稱して末頼しく御覽ありしい御目違ひかと日興聖人五老僧とゝもに二十年來。高祖の御側に在て。法門を聞給ひしは盧耳か塔中別付上行所傳の法理に。何そ二三の別流あらん。廣く考へ深く察して。一を一と信じ不二摩訶衍の佛海に歸入し。現當の大願を滿足せん事。佛門の肝心おらんかし

さても高祖大士は旅裝をとゝのへ給ひ日朗師を將て房州小湊におもむき慈母を慰めつ樒の青葉摘とりて。ろゝぐ涙を手向種御經。誦讀いと懇に百ケ日の佛事はてゝ。鎌倉にかへり給ひけり。いづくも打つゞく饑災に。人の心も惱りはて。年々五穀登らずして。淺ましき事のみ多かるに。今年八月朔日颶風洪水にて。非命に死するもの數をしらず。おゐて其廿八日の夜は

熒惑といふ惡星いでゝ、一天の星みな光を奪はれ、しかのみあらず、往星長さ四丈ばかりあるが、乾より巽の方へ飛わたるろのひゝき、山岳に鳴響く。これより諸國大飢饉、ろのうへ疫病流行し、万民なげきの中に今年もくれて、明れば正元元年の春、歳あらたまれど喜き祝ふ聲もなく、國中民の食盡て、ろのうへ疫病いよ〳〵はげしく、いさゝかも手脚の惱ふ者は、病煩らひあがらも、籠を提、鎌を腰にして野山をさまよひあるき、木の皮草の根をせゝり、ろれを咬ながら倒れ死するも多かりき、また兆行惱ばず家に居者は、肌に苦み病に惱み泣呻吟、親子兄弟夫婦の間に、いさゝかの喰物を得れば、互ひにゆづりあひ、其大切と思ひ、最愛と思ふ人にまづすゝめて、瞑しむるゆゑに、情ふかく實ある者は、其家のうちにも人よりはやく命を失ひける。荏原義宗、名越の御庵室に來り、高祖大士に物語やう、けふしも村岡の邊りに通行かゝり咽喉の乾きたるまゝ水を一滴貰はゝやと、或る農家に立入たるに主翁とおぼしき五十ばかりの男壁に倚かゝりいと惱ましげに見へければ、流行の病に苦しみ、はべるかと問バ、頭をうち振て九旬ばかの食料つきはて糖に藥に咬つくし、壁土をさへ口に含み、今は食たへ廿日、あまり妻はろの菰莚の下に死てある、土間の曲竈の下には弟の死骸もあり、その亡骸をさへ取欲むべきすべなしと、涙を拭ふ袂さへ手を攝かねし蟲の意息、納戸のかたをさし覗けば何やらん古葛籠のうちに、搖むしる物音するにぞ、あれは何ぞと尋れば、されはよ、五歳と七歳ある男子二人ありて、妻は夫をいたはるとて、己れは食ずふたりの兒等にのみあたへつゝ、それゆへ早く死したりき、五七日このかたは二人の兒童も聲泣嗄し、慈母は何處へおはしたるぞ、餘さま早く物喰して給ひねと、此世からある餓鬼道の飢にくるしみたへかねてや、兄弟たがいに攝合頬先手脚に嚙つきて、血しほに染るありさまの、眼も當られぬ振舞を、今は見兼て兄の方を櫃に入、弟を古葛籠に入、見給ふ如く繩もてからげをきたるゝ、千代もと願る我が子さへ、早く死ねかしと願ふのみと粥をすゝりて物がたるを、聞てあはれさやるかたなく、腰につけたる一袋の乾米をとりいだし、彼の主翁にあたへたるに、主翁ゝゝおれを押戴御志ゝうれしけれど、とても生ながらふべき親子が命あらぬを、今おもひひに食物を得て、一時なりとも生延おバ、又一時の憂目や見ん、許し給とさし戻しぬ、さて恐ろしき事かなと、歸る途中の噂にもいつぞやより京都に人を啖ことはじまりて、新に葬りし墓を發、又往倒れたる、人の肉を啖ふよし、此頃鎌倉にも移り來て、昨夕巨袋坂の墓所にて、死人を啖ひ居たる者ありと、取々人の語り

はべるとありければ。日蓮大士も共に哀れを催して。御法衣の袖を絞り給ひ。されば末法法華經の弘まらせ給ふべき時節なるを。諸宗の邪義に障られて。正法の立ざるを。天怒り。地罰し給ふなり。いでや此事訣を鎌倉殿に訴上ん上一人此事を辨へ給ふ程ならば。下万民の幸ならんと一卷の書をつゝり給ひ。正法を立て國を安くする義を取て。これを立正安國論と名づけられ。兼て前年京都にて圖らず面會ありし。比企大學三郎能本の。近き頃鎌倉に召下され儒道に天文を兼て。御所に昵近し大士とゝ。師檀の契淺からざりければ。幸彼の安國論を大學三郎に見せて。文章の連續。文字の誤過をしらべ給ひけり。例せば天台よ徐陵あり。妙樂に梁肅あり。傳教に眞綱ありて。其時の豪傑の儒者。佛法を扶翼たり。今高祖大士に能本ありて此安國論を校正しけるも。みなこれ三寶諸天の所爲とぞ知られける

大學三郎能本の住居せる。比企が谷といふゝ。去る建仁三年九月二日父判官能員北條時政の氣に滅亡ありし。其舊地なるを押領し。文章博士をもつて。世に時めきしが。前年比企滅の時庭前の池に入水して果たりし。姉聟肢の局の靈魂猶得脫せず祟を爲とて御所より此地におゐて。一日願寫の法華經の供養を樂らる。大學三郎も亦法華堂を。いとゝあみ

高祖大士を請待して。佛事をいとなみ。姉聟肢の局の靈を。蛇苦止大明神といはひ祀り給ふ。これ比企が谷法華堂の始めなり。これより妙本寺ともりて二百年の後當山の檀越。佐竹常源入道。家督の事について。管領上杉憲定と合戰し。佐竹入道此山に稍籠り。應永廿九年十月三日。早天より軍始り。其夕方上杉方より燒草を積で。寺ゐ火をかけ。既に堂塔灰とあらんと見るうちに。井戸の中より一道の白氣立昇り。忽ち震動雷電し。大雨篠を衝が如く。燃へ立柴もたゝちに濕りて。火ゐ消たり。此時黑雲の內に。大象をも呑べきほどの大蛇。紅ひの舌を閃々とひらめかし。火燄を沸と吐出し。伽藍の燒亡を護ると見ければ。兵士ども異恐れて逃失けり。されゐ去ぬる弘安三年。日蓮大士認め給ひし。十界の本尊を。此時の住持日行聖人。此兵乱に灰とあるべきを悲しみ。この井桁の裏に隱し給ひたるが。此御本尊の不測を現しさるなり。これより蛇形の曼陀羅と世に言傳ふ。本尊紙中長三尺二寸廣二尺三寸七分。今に比企が谷に現存す。此時佐竹常源も。大將の分十三騎。釋迦堂の前に切腹して相果けり。此等ゐ祖傳に預らざる事なれども。比企靈場の兵亂また本尊蛇形の曼陀羅の利驗によつて茲に附す

今茲正元二年の春。疫病愈々止ず。二月十四日十五日の兩日。日輪の色赤くして物の色皆紅ひに見ゆ。すべて去年より日蝕月蝕時ならずして度々かゝり。一天溟暴りて日の色さへ定かならず。これゝ世の滅する時節にや成果けんと。人々生たる心地もせざりけるこゝに駿州富士郡上野に領居する。南條兵衛七郎といふ人あり。北條時政の親族にして。駿河國を大半に支配あし。世に上野殿と稱して輕からぬ家柄なり。上野一門ゝもと岩本實相寺の檀越たりしが岩本の一山擧て。高祖大士を尊崇なすにぞ。上野殿もあれより大士に師檀の契りを結び。深く信仰し奉りけれども。國中の政事にいとまなくして。度々高祖に値奉るとかたく。唯時々布施を捧げ。衣食を供養してその厚志を靈されければ。高祖も又其間暇なきを察し。文通を以て節々御教導ありけるあり。又日興師ゝ本岩本に所化さりし時より。上野殿知己ありければ。折に觸てゝ我が邸に請待し。高見に見ゆる心地して。讃で教化を受給ふ。日興師も亦其信力の厚きを喜び。自高祖の御側に在て。朝夕聞つる法門を逐々に書といめ。上野殿へおくり給ふ。世に此を日興記と言傳るあり。時に文應元年庚申の七月十六日。高祖大士ゝ奉行宿谷左衛門尉光則が邸に推參し。拙僧ゝ御府内名越に住居なす。日蓮といふ者にはべり。近來ゝ天地の

變災。一代聖經の鏡にかけて。當世日本國をうつし見て書認たる。立正安國論といふ一冊の書なり。これいさゝか國恩に報ひ奉るのみ。頃くゝ前執權時頼公の賢覽に備へ給れと。其書をさし出されけれゞ。左衛門光則請取。頓て御所に出住あし。此旨披露に及びたるに。將軍の御前におゐて。北條一門をはじめ。列國の諸侍伺候し侍讀學士。比企大學三郎を召て。その書を讀しめ給ふに。その趣意に曰く。國ゝ法に依て榮え法ゝ人に依てたつ。近年うちつゞきたる。天變地夭ゝ。末法應時の法華經。諸宗の惡義に利益あらはれず。其正法誹謗の罪深く諸天善神ゝ此國を捨て守らず。惡鬼國土に充滿するゆゑあり。金光明經にゝ正法に背けゞ。其國に七難おこると見へたり。其七難の中。五難はこれまで顯れたれど。二難いまだ起らず。其二難とゝ此國に軍起ると。異國より此國を攻るとの二なり。又藥師經の三災すでに二ツ起りて。なほ一を殘す。兵革とて戰の災なり。若國王百官此法華經を御信用なく。いよ〳〵念佛禪律等の御歸依ふかくゝ此國の滅亡程近きにあらん。これ我が言にあらず。釋迦牟尼世尊。金口の佛說ありとぞ書たりける。時頼はじめ。並居る諸士も一同に。顏見合互ひに詞もなかりけり北條時頼此書を見て甚だ快よからず。同廿四日高祖大士を我が邸に召寄。東の壺に喚入てみづから對面有

て宣ふやう。今度一卷の書をさし出して。天下の政事を侮り。萬人の信心を惑はす事。出家沙門の所行にあるべきやと仰ありければ。大士答てむかし周の世に賤き嫠婦あり。我が機抒を織ずして。周の天下の亂れんとせしを。案じ煩ひし老婆心。左傳の昭公廿四年に見へはべりぬ況て天下の安危は。佛法の邪正に依これを告さずは出家の本業に違ふに似たり。抑々法華經は正法の中の。正法にして諸經に優れて在すこと一切の江河の中には。海の第一なゝが如く一切の山嶽のうちには。須彌山の第一なるが如く。又一切の星の中には。月を第一と仰が如く闇に燈火。渡りに船響へば高十六万八千由旬の須彌山を。堀回めて硯となし大千世界の草の葉を筆に結ひ。大海を硯水として。これをしるすとも。書つくし難きは。法華經の功德あり然るを諸宗の經々に其廣大の利益をおし塞んと。邪正混じて明白ならず。願くは公深くこれを察し給ひ。はやく念佛眞言禪律の諸宗を停止して。我が一乘法を御歸依あらば四海の太平とならんこと。掌を反すよりも速かならんと有ければ。時頼面色怒りをあらはし。一人の詞を信じて。何ぞ三國傳來の諸宗を破らんと。中啓扇取て立揚り。裾うち拂て入給ふを。高祖大士は御聲たかく。若我が言を御用ひあくば。自界叛逆難とて。御一門に同士討の軍はじまり他國侵逼難

とて。他方の國より此國を侵さるべし。其時臍を噬給はんぞと。喚はり給ひしにぞ。近衆眷從の面々も。あな恐ろしきことをいふ日蓮かなと。面色かはつて見へにける。これ天下諫言のはじめなり。あれより忠言耳に逆ひ。北條時頼同重時とも に高祖大士をふかく忌惡み給ふことゝはありぬ。上一人の心。下万民におしうつり。彼の名越の日蓮坊。いまは北條殿も疎んじ給ふときく。討殺したりとも咎はあらじ。阿彌陀如來の怨敵。目に物見せんと百人ばかり手に〳〵得物持携ひ。名越の御庵室へ押寄さり。時に八月廿七日。今宵は當る庚申。帝釋天へ法樂せんと大師は暫し御經讀誦し終り。月もや出ると。遠戸細目に押明て。東の空をうち見やり給ふ折竹縁づたへ白き狼大士の御袖をしきりに。史ければ。こゝ不審と思しめしながらも何ある事の喩しにやと彼にひかれて往給ふに。路いと暗き山つゝき。東をさして七八町。山王堂より奥まりたる。狐の洞に入奉る。大士西の方を顧み給へば。我が菴室とおぼしき邊り。おびたゝしき物音哄の聲。猛火猛々として天を焦しければ。さては我が菴室ゝ燒失するにかと思しける。此夜御菴室にゝ。人すくなくして進士太郎善春と。能登坊と。唯二人ありけるが念佛禪の諸門徒ども日蓮を漏すなと。聲々に喚かはし。松火を投懸々々燒討にそ。進士善春刀おつとり振はあし。無

益の殺生なすまじと。當るを幸ひ。棟打に。薙倒し蹂躙る。登能坊も樫の棚棒はやうち折て近倚敵を捉捕へ。目よりも高くさし揚て。丁と投たる人礫。討手の雜人かなはじと皆いづくへか逃散て。夜ゝほの〳〵と明にける。高祖大士は人しらぬ岩窟のうちに。御經をよみすまして在しけるに。不測や猿のうち群て柴。栗。覆盆子。榧の實なんどかはる〳〵手折もて供養し奉るにぞおもはずこれに飢を忘れ。こゝにかくれ給ふこと三日の間。後年此處に寺を立て。猿御畑法性寺とて。今にろの靈場をとゝめけり。其頃鎌倉市中には日蓮名越にて燒死したりと。專一風聲せしとかや。さても富木播磨守は。怜悧たる家來をつかはし。大士の在處を探り索め。漸く山王堂の山奥にこれを尋當り御手を取てひそかに下總の國若宮の館に伴ひ參らせ富木殿その無事を喜び。尊敬日頃に百倍し邸搆のうちに。法華堂をいとなみ。茲に法莚を開らき家門一族のこりなく。大戒を受奉りこれより日々の說法敎化の外他事あらざりけり。けふしも富木の法華堂に來りて。受戒せし曾谷入道敎信といふは。代々越前の國を領し當國曾谷に居住す。此人佛緣淺からず。日を追て大法を證得せり。二人の子あり。嫡子は四郎左衛門直秀といひ次は女子にて芝崎と呼ぶ。生長して。千葉大隅守胤貞の室とある。兄弟ともに大士の化導に預り淸淨

堅固の信心者にぞおはしける

曾谷敎信後年身延山に登て剃髮して。法蓮日禮と名を賜ひ。家に歸て法蓮寺を建立す承應四年辛卯五月朔日。八十歲にして示寂す。嫡子四郎右衛門直秀。家督を繼て信力父に劣らず。妹芝崎は父存生の日。鼻和地藏堂を本化の寺とし。日朗聖人を請して開堂す長谷山本土寺といふ。夫壻大隅守逝去の後。尼と成て妙林と號し其居宅を寺となして。禮林寺と名づく。兄四郎右衛門は後に山城入道道崇と云。其子典久。末子を大士の法弟とす。筑前坊日合あれなり。山城入道その日合の爲に。千葉郡野呂の邸を寺となし。妙興寺と号す又平賀六代日福も。入道の孫なり曾谷の一族本化の宗を信じたを事斯の如し

高祖大士。法華堂に在て。日々の說法。夜々の講談老若男女取交て。聽聞するものいと多かりける。中にも當國白井の住士。秋元太郎一座の說法いまだ聞終らずして。珠數を切て改宗す又柏井村に鐘阿彌といふ念佛者ありしが念佛無間の法門を難じ來て一言のもとに念佛を捨て法弟となる。名を日唱と賜ふ。これまでの念佛を盲滅んとて。眼を末拳を握り强情に題目を唱ふ其聲夜とおく晝とおく。一村にひゝくこれに依て首題坊と呼給ひしなり。その子も亦法弟と

成て日惠といひ。父の家に轉じて寺とす。今島山唱行寺これなり。斯化導のその中に此所より一里ばかり去て。千足といふ里ありその地の人なりとて。年闌ける婦人日に〳〵來て聽聞す。ある日我が法名と御本尊とを請大士本尊を審て法名を妙正と與へ給ふ。婦人喜んで歸りける。其鄕の人もまた茲に居たれど。もろの婦人を見知らずとてあやしんで。ろの後をしたひ覗ひけるに。千足村の池に入て見へず。本尊は池の邊りの櫻の枝にかけたり。これより奇異の事也とて。祠を建て。妙正大明神と崇め。今ハ姥神とて疱瘡の守護神と仰ぐ。かゝる不測を語りつたへ。參詣群集のその中にも。太田左衛門乘明ハ。八脉重く身分いやしからず。富木の內室ハ此大田乘明の姉なりければ。日々こゝに在て大士の化導を蒙り。粗その宗意を辨へ師を踏依すること大方ならず。嫡子太郎を剃髮せしめ法弟とす。師の阿闍梨日高これなり

太田乘明老後にいたり夫婦別々の家に住んで五辛を食せず肉を喰ず法衣を着し袈裟を掛たりこれに依て高祖も常に聖人と喚び給ひ其宅をも直に本妙寺と稱せらる弘安四年四月廿六日に寂す

栴檀の林に毒草なく須彌山に近づく鳥ハ皆金色あり皆谷秋元太田をはじめ此法堂に入て邪

宗を捨て正法に歸する者其數を知らず數化の果敢ゆくにおもはず日數を重じ給ひ鹿の木枯吹絕て霜冴わたる庭傳富木胤繼は法華堂に入來り優曇華の花咲き匂ふ千歲の一時御說法も既に昨日ハ百座に滿給ひぬ鎌倉名越の御庵室も去ぬる八月燒討の後番匠左官を遣はして今は漸く成就なしたりと今朝しも鎌倉より告げ來りぬとく御入在て大法弘通なし給へ法弟も檀越も待わびたりと聞はべりぬとありけるにも高祖大士ハろの志意の淺からざるそよろあび其日鎌倉にぞもむきかへり再び本化折伏の幟を颺し給ひけり

富木播磨守胤繼は性來書を讀こと好んで篤く佛乘を信じ日蓮大士いまだ遠長たりし時より衣食資財を見繼て學問修行をはげまし給へり實に末法万年宗門第一の大旦那なりおゝをもつて日蓮もし上行の再誕ならバ富木殿ハ無邊行あるべし火を盛にするもの〻風なりと遊ばしたるハ此ゆゑありけり百座說法の道場ハ寺と成て正中山妙法華經と名づけ大士手づから彫刻ありし一尊四菩薩たま鬼子母神を廻て本尊とし大士を開山とし富木胤繼ハ建治二年の夏身延山に登り大士の御手を勞して剃髮し名を常修院日常又常忍と號す大士入滅の後初て袈裟をかけて中山第二世を繼大士御在世の時かねて此

人の志の堅固なるを知召て一切の寄類い多く此家へ傳給ひしもを今此山に納るに高祖の直筆一百餘通に及ぶ靈未來門外不出と定め今猶其掟を護る在世の時より六老中老ともに富木殿を敬ひ見ること大士にかはらず正安元年己亥三月廿日八十四歳にして示寂す。中山三代日高四代日祐聖人此人い當國佐倉の城主。千葉大隅守貞胤の子おりあれに依て佐倉より。當山に寺領一萬石を寄附す。あれより寺門盛におりもき。關東關西末山末寺。五千七百餘ケ寺におよび。今に連綿として日常聖人の餘光宗門にかゝやくあと。仰で尊び俯て信ずべし

國に道あり。法に傳へあり。我が神國の道の學びといふい。京都吉田殿三位兼益これが長上ゝり。おゝに吉田の御神領。武州都築郡恩田。御厨の代官益行といふもの年來日昭聖人と交り厚かりれば。高祖大士これをよき紹介おりとて。益行の吹擧に依て。吉田家に門入なし給ひしに兼益一度詞を交へて。大ひに驚き。日蓮聖人い一代孤經の才覺を極たる異人あれば。三十二尊の神號より。神秘口訣の相承。殘るところなく傳へたるよしい二位兼益の筆記に審詳なりこれを法華勸請にわらされば。諸神に利益おしといふ。日蓮所立神道の根元おり。此頃高祖大士

い折伏弘通の鋒尖するどく。愈々諸宗を攻なびけ。俗男女。落降て徒弟となり。檀越となるもの日を追て盛なり。さるに北條陸奥守重時。諸人の讒言を信とし。大士を惡む事甚しけれども いかんせん今い通世の身の上おればとて。徒に牙を咬でおはしけるが。執權時宗。幼少につき。重時の子長時。天下の政事を佐補する身とおりければ。これを能き時節せりと。重時ひろかに。子息長時にあれを談じ。時に弘長元年庚酉五月十二日の朝琵琶小路の。辻に日蓮大士を召捕へ問註所の吟味も遂ずして。情もあく由比が濱にひきもてゆき。船にうちのせ。伊豆の伊東へ流罪とぞきこへける。荏原池上進士等の檀越も。我も〳〵と驚き聚まりてありけれども はや嚴重の囚人なれば。番の兵士棒うち振四邊へ人を近よせず。かゝる處へ日朗聖人。この日比企が谷に在しけるが。斯ときくより徒跣にて由比が濱邊に駈來り給ふに。いまや御出船と見へければ。かよはき腕に纜おを引とゞめ我れい流人日蓮が弟子の日朗に。はべるかし。我をも共に同船させて給ひねと聲を限りに宣へば。船人いかりの聲あらゝげ。おのれ青道心奴。太切の御用船に浪籍おさば。目に物見せんと持たる械を振揚て。綱に縋りし右の手をはつしとうてば日朗聖人。なにかいしばしもこらゆべき。一聲あつと叫びつゝ。磯の渚に打すへられ。其

傾動と倒れ給ふ。餘處の見る眼も〳〵中にあはれ果なき。ありさまあり。日蓮大士い船梁に立揚り。官人の衆中よ彼い幼少より我が弟子にて。しばしも側を離れざる。不便の者よはべるかし何條一言の暇を告させ給はれと。會釋して。此方に向ひ。日朝々々と御聲高に喚給へば。ろの墓はしき御聲の。耳に入てや起揚り。御船だ未だ出ざりしかあら婦しや。南無妙法蓮華經と合す掌も。右い折れて片腕。あげて泣入血の涙。大士も瞼をしばたゝき。いかに日朗日頃の教化を忘れたるよな。今末法に御經を弘れば。杖もて打れあるい又。遠く流罪に成べしと。法華經勸持品に。說おかれたる其明文。二千餘年の今日唯今。汝い打擲われい流罪。如來の金言違はぬうへい。再宣流布も疑ひおし。頓て赦免の時を得て。再びめぐり値までい。法の御爲ろの身を愛せよ此地と伊東い西東。八重の潮路い遠くとも。潮日東天に登り給いゝ。日朗鎌倉に在とおもふべし月西山に傾くを見るときい。日蓮伊東にありと知れ。さらば〳〵と念珠を摺。此經難持。若暫持者と。寶塔品の偈文を唱給へば。御船い波にゆられつゝ。一聲い高く一聲い低く。一句い伸一句い縮り。波の間に〳〵遠ざかり。沖合はるかに漕出たり。歸依の男女隨身の法弟達異口同音に御題目を唱へつゝあだおみならぬ磯際に。袖しぼりつゝ見送るうち。沙風吹たつ朝潮に御

船い見へずなりにけり。日朗はじめ法弟檀越。御名殘の暮はしくて。御船にきあへし。此經難持自然に節づく御經を。ろの節に唱へ。覺へ。冲中節の此經難持とて。今の世までも傳へけり。斯て御船い西をさして。走りけるが。程なく西風吹起り。潮と風とに立合て。逆卷波をおしきり〳〵ろの日の申の頃。伊豆の岬に近きけり。船中の官人。大士に向ひけふい生憎風あれて。船の進退自由あらず。あれ見給へ。後處の黑き茂りこそ。伊東の浦にはべるかし。此處の磯傳ひ程近ければ。步行給へと。船よりおろしまいらせて。鎌倉さして走りさりぬ。大士いかゝる蒼海の。船にゆられて御心惱しく。殿に腰をうちかけて。見やり給ふに。往べき伊東も程遠く。巖石峨々と横たはり。苔なめらかに水草生。岩にせかれてうつ涙は。白蛇のかけり狂ふに似たり。大士い御聲しづかに題目し。しば〳〵休らひ給ふ折から。蘆の一葉のさゝ小船竹の子笠に腰簑して。櫓拍子高く漕ぎ來り。大士を見て大ひに驚き。御僧は天より降ておはせしか。驚に捕れて來給へるかあれは伊東が岬の魚狙岩とて。磯根別れし離島。今さしみつる上潮時。この黃昔は汐みちて頓て隱るゝ孤閑の巖石。あゝ危ひかあと。舌を卷ての物がたり。大士いこれに惡答して。我い鎌倉の日蓮といふ僧にて。伊豆の伊東に流罪の身なるが。愛に追揚蹄りしは。死ば死ねかし活とて

も活がひもなく鎌倉に忌憎まれし者とおもひ。芥のおとく棄たるならんと。語り給へば何おもひけん漁者い小舟を岸にさしよせ。我いかしあの川名といふ磯村に。彌三郎とて。日に〳〵此岬に漁業して。世を渡る者あるが。今宵は亡母の十三回忌の待夜にあれど。佛事いさておき此風の荒吹に。命を的の殺生も。なさねば協はぬ業報人。御僧をたすけ參らせおばせめての追善いざこの船に召れよと。御手を取て舟にうちのせ奉り。人顔不分灯ともし頃。そのが伏屋の背戸近き。邊りの岸に舟さしよせ。妻の名を呼立れば。妻も戻りの遲きを案じ。紙燭ともして走りいで。船のうちに大士の在すを見て。うち愕くを。夫彌三郎爾々なりと言さとす。話半途に灯を吹消し。今日しも村の莊官より。流罪の出家を締依なさば。辛き目見せんと囑たるはと耳に口よせさゝやくにぞ。彌三郎も心得て。人に知れていあしかりおんと。ひろかに我が家にしのばせ奉り。妻もとも〳〵駈走り。手水洗足何くぬと。足はぬがちの痩世帶。心ばかりの夕餉を供饗し。掛て見かくす。孤蘿。納戸のかたに休らい せ奉り。これより夫婦い人知れず大士の教化よあつかり。茲にかくまひ供養すること。三十日餘り。高祖もふかく感じたまひ。男いさもあるべき事おれど。婦人の身として。共に我をあはれみ。何處も米の乏しき時節なるに。久しくはぐくみ給はりし事。いつの世にか忘れいべらん。定めし我が父母の伊豆の川奈に生れ來り給へるかさらずゞいかで鎌倉殿に。いみ憑まれ天下の人に嫌いれたる日蓮に。かくまで信仰あし給はんやとて。御涙とゝもによろあび給ひけり

大士船より上陸たまひし處い。篠見が浦とて伊東より南二里その磯を今日蓮崎といふ。小田原北條の家臣。今村若狭守。この地を領したりし時。初めて堂をいとおむ萬治二年江戸大久寺の日靈聊。あれを寺とおして。海岸山蓮着寺と名づく。今い越後本成寺の末寺あり。又川奈い篠見が浦を去事一里餘。彌三郎姓い上原と云大士い船守と喚給ふ。其跡寺と成て。船守山蓮慶寺といふ。蓮慶い彌三郎の法名

雨あらば。宿もかるべき夕暮の。霧にぞいたく袖ぬらしける。今日本國に。佛法渡て七百餘年念佛眞言禪の諸宗似て非分なる如法の毒氣。いつしか上下萬人の骨髓に染徹り。今正法の法華經弘まらせ給ふべきを。憑み嫉むと。たとへば梟の晝を嫌ひ。蚯蚓の日の光りを畏るゝに似たり。其上鎌倉におわても。御府内を憚りなく。名越の御菴室に火を放ち。夜中狠藉なしたる無法人にい何の詮議もなく正法弘通の高祖大士をゞ遠く此島に苦しめたるい世界不測の政道

なり日蓮大士彌三郎夫婦に語り給ふやう傳へきく一向門徒の親鸞上人い一流をたて妻を妻として色欲あく肉を食して食念なく堅く菩提をあゝろざすあれを淸淨の梵行と名づくるいとて。三衣を身に纏ひあがら。肉食妻帶を表幟とす。釋尊一代の聖經に。かつて例あき魚鳥を喫ひ。妻子を養ふ。法外の僧い。却て万人の歸依をうけ。又身に一分の過失なく唯一切衆生を救はんと勵む日蓮い。かゝる賣に値へり。天い地となり。陸い海となり。子い親をうち家臣い主君を煞り轉倒乱離の世なればあろ。今惡鬼國に充滿し。種々の凶變有て。五穀登らず惡病も流行す此うへいかに成ゆく世あるらんとありければ彌三郎もさしうつむき斯おそろしき惡世に い御題目の外頼みいわらしと夫婦愈々信心をはげましけるとゝに當國伊東の領主莊司八郎左衛門朝高。五月の中旬より。流行の毒病に犯され。既に正氣を失ひ見へずいぶせき大病に。醫藥祈念の驗も見へずはや念の際と見もるにゞ此伊東の親類に綾部正淸といふ者あり深く事を考ふるに此國へ流され來りし日蓮聖人鎌倉殿の惡みはさることなれど其弘る御經は法華經といふ尊き御經なりときくそのうへ不測の名僧とて御府内にも信ずる人の多しとぞいふあるあはれ領主の病ひを救ん事を願まゞやとみづから大士に見へ奉りその祈念を翻ひければ。大士眉うちひそめ宜ふやう。御經文にもし正法の妨あさば。其頭七分に碎くべしと鬼子母神。十羅刹女の誓ひあり。今ろの誹謗正法の罪を憎んで。諸天の怒り甚し。我願るとも協へしとも覺へずと辭退なし給ふを。正淸強て願ひ奉りければ。六月十七日。伊東和田の邸に入給ひ朝高の。枕邊に坐して讀經おし給ふに。三日にして正氣にかへり。五日にして病ひ大半に除く。朝高正淸を始め。妻も族もその奇特に驚き晝夜擧て題目を修行す。朝高すでに本復に及びければ我が命は聖人の賜なりとて大士を仰ぎ奉ること大方あらず或時朝高聖人い何を持佛と成給ふやとありければ。久遠の釋尊なりとて。ろの法門を喩し給ふ。朝高よろあんでいふやう。茲にひとつの妙なることあり。前年よりあの伊東が崎の。海上に。夜々光明を放ちたりしが。一躰の佛像を漁者の網に曳揚たり。あい阿彌陀如來なりとて。近鄕聚て念佛せり。しかるにろの頃熱病諸方に起りて。死するもの多し彼の佛像いよく見まゐらすれば。釋迦如來なりけれゞ村中の者呆れはて熱病の流行も此佛の所爲ならんいさはしき佛かあとて我が方に持來りぬ。我れも生類除はるけれど。地頭の任に預りあきぬ。これを聖人にまゐらせばやとて座うち拂て大士に渡し奉りけり。高祖い御法衣の袖もて。これを受取おしいたゞき。拜し給ふ

に。相存微妙の釋尊の立像にありければ。尊ひかゝ久遠の本佛。久しく苦みの海に沈んで在したるも。今末法第五の時を得て。光を放ち出現ありしは。正しく法華經の弘さらせ給ふべき時節なりと。御涙にかきくれて。しばし自我偈の文を唱給ひける。誠に久成の釋尊肉身の上行菩薩にめぐり値。本地の世界に御對面ありし。其師弟の御喜びは。本結大線の現證にやあらんといとも尊く思はれける

伊東が崎。海中出現の釋尊は。大士一代の隨身佛にして。いま京都本國寺に安置す八郎朝高その出現近き海邊に海光山佛現寺を建立す。今は總堂と號し。大行寺妙照寺蓮昌寺龍仙寺廣仙寺いづれも伊東山と號して。其靈場を護る又朝高の邸に寺と成て。佛光寺といふ

今日將暮き夏の日の樹の葉にろよく。風もあき。茅の軒端にはし近く。大士は夕涼して在しけるが。庭の切戸に音づるゝ人あり。誰あるにやと見かへり給へば。去つとし和泉にてゆくりなく因をゝる。江川太郎左衛門吉久。種々の布施物もたらして尋ね來つ。絶て久しき面會をよろこび。我は近きあろもかりありて此韮山といふ處に住はべりぬ近來聖人のあゝに在すとき

ゝ。むかし戀しく訪たてまつりぬときゝあへければ。大士もよろこび年來の修行路より。今は弘むる妙法の。深き法門をかたり給ふにぞ。吉久謹んで御經を頂戴し。あれより深く佛乘を信じ一門のありあく改宗し。時々此配所におとづれて。供養を捧げ給ひけり。さても鎌倉に在ては工藤吉隆をはじめ四條。進士。池上等伊豆の伊東へ人を馳。衣服品々を送り奉ることひきもきらず。日朗日興も。折々かしあに安否を訪。大士の慈あきを言續で。共に喜びあへりけり時に天台の僧大乘坊松葉が谷に來て。日蓮聖人の法弟とあらん事を願へどもいかにせん伊東に流罪とあれば力なし。一の徒弟日昭聖人は。大士に代て法弟檀越を教育ありければ。大乘坊も日昭師の法弟とあして給はれと。望めども。日昭師は兼て思召す事有て。元より弟子を取給はず。茲に聖人の法弟あまたあれば。何れありとも御身撰みて。師匠と頼み給へとありければ。大乘坊しばし御花室にと。ゝまり。其弟子衆の立振舞。またその學力を見あたりしが。心に感ずる處ありて。一日日朗聖人に向ひ。我あの程あゝに在て。本化の宗流を見もし聞もし。いよ〳〵末法の要行は法華經に。限る事を粗辨へはべりぬ。されば玉をつらね。錦を織が如く。僧俗ともにあまた御弟子い在せども。我宿緣あるにや。頻りに御師を慕しく。おもひはべる。何卒我を徒弟

とおして給はれとありけるに。日朗聖人笑て宣ふやう。御身い廿一歳。我い十八歳師匠の若くて弟子の年長たるも。似つかはしからずとて。辞退あし給ふを。大乗坊あれをきゝこい淺ましき仰かな。百歳の翁も迷へバ小兒あり。背に負し兒に淺瀬を歩へられたる例もあり。齢の多少に優劣いあらじと。理をせめて聞ふにぞ。これをゆるして授戒させ。師弟の契約を成給ひける大乗坊日澄ときこへしい此人なり。弱聖の日朗聖人を師と頼みたる日澄師。凡人ならず。又齢高き日澄より師と撰ばれたる日朗聖人の智徳人品五百年のむかしを。今に察して。いと尊く思はれけり

日朗聖人い。大士に別れ奉りてより。猶ろの御名殘の忘れがたく。朝夕由比が濱にいて、伊東の方をふし拜み。御繰經ありけるが。豆夜波間に光明かゝやき靈木の流れ倚ければ日朗聖人これを得て。手ゴから高祖の尊像を彫刻し奉り。これを尊敬すること生身の大士に事ふるが如く。飯を供じ。茶を献じ。丁寧が親につかへし無二の孝心。おろそかあらず在けるが。諸天感應の時いたり。御赦免有て。大士鎌倉へかへり給ひ。此像を御覧有て汝が至心の誠にて。我精神の此像にや入ぬらん。伊豆の配所に在て。目どろむ夢に。日朗を見し事いく度ゼやと。悦び感じ給ひける。これ高祖大士の尊像を彫刻の始めなり。この尊像もとい武州碑文谷法華寺に安置ありしが。元禄年中故有て同國堀の内村。日四山妙法寺日性聖人の時。此寺に移し奉る。しかしてより此かた。現證救護の利益いちじるく。世上に敬むれり。又大士伊豆において。伊東入郎朝高が病ひを加持するとて御したゝめの護符を日朗聖人へ御相傳ありしを。此尊像に因みて。今にこの妙法寺に傳へ。世に尾張護符と稱して。信心師依の輩。奇特をいのるもの多し。こゝに又日朗聖人の徒弟となりし。大乗坊日澄といふい。相州小田原の人にして。濱名豊後守時成の子なり。三歳にして父母を失ひ。祖母の妙珍といへるに育てられ。亂國の世のならひさしるの大家も人に。押領せられ程なく家も亡びければ。自髪を切て天台の僧となりて。今本化の宗に歸す、後元享辛酉年。父母の邸跡を小田原にたづねて。妙珍山蓮昌寺といふ一寺を建立せり。又尾州名古屋妙光山本覚寺も。此師の草創なり

むかし前漢の世に子定國と云へる官吏。誤て孝行の婦女を刑罪ければ天下三年雨ふらず又燕の惠王。人の讒奏を信として。忠臣鄒衍を獄舍に繫けれバ。六月霜をふらす一人の非道すら

かくの如し。いかにいはんや。國のため世のために。正法を弘通する僧を流罪に處して。いかで其現報のあかるべき。弘長元年五月。高祖を伊豆に流してよりいくほどもあく。陸奥守重時たいあらぬ病ひに犯されて。氣狂はしくあり。其年十一月三日。あへなく逝去し。其子長時また競權時宗も。毎夜あしき夢にのみ魘れ。重時炎の車に乘て。苦しむ形狀も。長時の幻現に見へ病ひあらねど五体麻痺。胸うちさはいで何となく。物怖ろしく覺へければ。僧をあまた請待して一日五部の法華經を書しめ。其追善を營。猶日蓮を赦しかへさずば。恐しかりなんと心に悔み。今年弘長二年十一月十一日。赦免の狀を認めさせてありければ。其彼と障る事ありて。その年もくれ今夏五月廿二日。高祖伊東の海邊に立て。日天子を拜し讀經ありしに。異相の人來てこの地もはや御名殘ありとて。禮拜して去りぬ。大士あやしみ思しけるに。其人鎌倉より知文をつたへて。伊東に來る。其狀に日蓮法師赦免あるべきよし。仰出さる。早々召返さるべし家敵久家承るとゞ書たりける。あれによつて大士。彼の地の人々に別れを告て。鎌倉にかへり給ひければ。時依の信者みな〳〵御花室に馳聚り。かはる〴〵に喜びをのべ。徒弟達いいづれも嬉し涙にくれたりける。其夜人々皆霊樂のもとに聚り。三年ぶのかた當地のありさまをかたり。大法すでに關東に擴き。聖人の御本懐も稍滿足の色現れたり。此上い折伏を御罷わつて宗門の御教化のみあらまほしと。口々に諫めけれども大士さらに聞入給はず。今末法强毒のはじめあり折伏を捨ゞ病に藥を止るが如く慈悲に似て慈悲にあらず猶このうへに他宗權門を征伐せば三類の强敵いよ〳〵烈しかるべし其時こそ御經の利驗も現るべしとてます〳〵說相募りけり此秋八月廿四日朝より雨風烈しく人家を吹潰し山崩れて谷を埋め大雷八方に鳴はためき由比の湊には大船八十餘艘微塵に碎けるとゞ同十一月廿二日にはさしも賢君のきこへありし最明寺殿ことし三十七歳にして逝去ありしかば上下の諸人親に別れし幼稚に等く世に力なく見へにけり爰に駿州蒲原郡。松野の邑主松野六郎左衛門といふ人あり。同國上野なる南條兵衛の通家なるを以て高祖大士の檀越とあり夫婦ともに歸依淺からずありけるが松千代といふ一子あり。はじめうの母夢に遨華の咲と見て懷妊せり。八歳の時四書を誦し生長に隨て。十三經。十七史。諸史百家の書をよみよく文章をつゞり性質凡人ならず名利を物の數とせず出家とあらん事をねがひ比叡山に登て剃髮しけれども彼の山の宗法心に協はずとて本國に歸り或時岩本實相寺に遊んで學頭智海法印に此事を語る智海聲をひろめて今

鎌倉に日蓮といふ名僧あり。實に當今の英雄なり我先頃この山の沙彌伯耆坊をすゝめて其法弟とおしぬ。今は日興と改名して。隨身するよしきゝぬ。御身も佛敎の根元をきはめんとおぼさば。鎌倉へゆき給へとありけるにぞ。夫れ近き頃我が両親の師仗ある僧なれば。因緣淺からずとて。松葉が谷に來り。寺の頽末を物がたりけるにぞ。大士も別て喜び給ひ。遵華院日持と名を賜ひき。此時廿一歳。後年六老僧の一人に加へられ。能登阿闍梨。日持聖人と稱したる英傑あり

松野六郎左衛門。本願として其地に一寺を建立し。日持聖人を開山とするの徒弟日敎日圓等。その後を繼でありけるが。後年兵亂の爲に寺院頽廢し。元和四年紀伊の后室根珠院殿松野の地理狹小とて。同郡有度郡沓が谷に移し。伽藍を再營なし給へり。今の眞松山遵永寺これ。日持聖人は。高祖大士入滅の後つら〳〵思召やう。我が師本化の再誕として此寺本國宿緣厚く。こゝに聖跡あし給ひ大法今大半國中に弘まつたり。此國の弘通は日昭日持等にてはや事たりぬべし。閻浮提廣宣流布とあるからは。日本一國は物の數ならず。願くは我れこれより外國異朝に渡り。佛緣うすき蠻夷の諸國を弘通せんと。大願を發し給ひ。茲年永仁二年甲午九月十三日。高祖の十三回忌を我山に營み。十月十三日御正當身延山に登て。大士の御廟を拜して。御暇を告奉り。明れば永仁三年正月元日齡加て四十六歳。元朝の喜ひに盃を擧。法を法弟に讓り。寺を檀越に任せ。唯一人法衣を振て旅立たまひ。奥州津輕より弘前にかゝり路の傍の大石に題目を書て。これを日本の名殘として。松前より鉄鞦に渡りて。行衛知られず成給ひける。こゝをもつて日持聖人ハ今に正月元日旅立の日をもつて。命日正當と仰奉るなり。それより年歷五百年ろの敎化利益の跡一切知るべからずといへども。和漢ともに太平久しく。彼國々より渡る番船いと多き中に日持聖人化導の跡と覺ゆる事最も多し行唐懸志地理の部に分轄阜平の西に法華の五社といふ祠あり。又法華村あり題目ばかり。唱へて諸宗の僧の入事を許さず又遵華寺といふ寺あり東國輿地勝覽といふ書に朝鮮の開城府に題目を唱ふる妙遵寺あり長瑞府に遵華院。慶山縣の法華寺。靈光縣の遵華寺。みな法華をもつて。その宗旨を立るよし其書に記す。又文祿年中。朝鮮征伐の時大明より加勢の軍中に題目の旗見へたる事。清正紀事といふ書に記せり近年相州浦賀の船。難風に流されて。唐土にいたる。船中十六人船長勘右

衛門日蓮宗の信者にありければ十界の本尊を檜に掛て十六人高麗に題目を唱ふ彼の國の人々これを見て小船をもつて迎へたりけれども言語一切に譯らず彼のもの勘右衛門の袖を曳て多く寺々に參詣せしむ寺院凡十八ヶ寺みな當宗門にてろの内の大寺を日蓮山法華經寺としるす此寺に日持聖人の墓あり石碑に五月十八日とあり年號い唐國の年號にして見馴ざる文字ゆゑ船乘にい讀ずして歸りぬと年譜異效に見へたりこれみな日持聖人・眼縣弘通の跡にしてあれを見聞こと雨夜の星の心地して。床しくも亦尊くぞおもはれける

此秋の最中の月もやゝ虧て。初鴈の昔を渡るあり。古鄉の空なつかしく。日蓮大士しきりに慈母の事案じわび。日朗ろの徒弟日澄の兩人を將て。旅立つゝ。安房の國におもむき給ひ絶て久しき我が宿をそれと昔信たまひしに。鹹よ藥と取交て。家内に人の立騷ぐにぞ。何事にやと尋ねたまへば。御母公此程病にふして在せしが。今朝しも秋の良寒に俄に痞のさしつめて。唯今相はて給ひぬと。きくより大士い走りより。日蓮にはやるいと。嘆くどさけべど亡魂の消て果あき今はの訣れ。大士い心取直し。其機感の厚きい定業も又かへし。轉ずる法華の利益。今一度

我が母を蘇生させて給はれと。本尊を書したゝめ。擬牙の松にこれを掛け。御經讀誦ありける に。病即消滅の文にいたり。綽切れたりし慈母の氣息次第に立かへり。御眼を見ひらき手を擧て。南無妙法蓮華經と唱へ給へば。大士い嬉しく傍側に寄。厚き御介保に日を經て次第に快復あし給ひ涙あがらに御物語りかぎりしられぬうれしさに思はずこゝに日數をかさねたまひけりこの頃安房上總の兩國に疫病大ひに流行し死するもの多かりければ彼の御母をいのり活し給ひたる其奇特を言傳へしたりつぎて大士を尊信し此惡病を攘除き給はれと願ふにぞ大士い白布に御題目をしたゝめ其端を船の艫に結びつけてこれを海に流し曳つゝ浦々海上を潤めぐらし又小湊ちかき澳津の村なる井戸の中に護符を御認りありし石を沈めこの水を諸人に飲しめ給ふ程に忽ち疫病退散して萬人の嘆悦いはんかたなかりき今その非の邊りに寺を建て嚴長山釋迦本寺と稱しけるこゝに當國男金村に小林民部實信といふものあり一子藤十郎齡四歲にして性質凡あらず常に寺に遊ぶを喜び出家を見て嬉しみ戲にも帛紗を結んで袈裟とし木の實をつらねて珠數を造る父實信もこれ前生の約束ならんとて貫名い舊き朋友をいひ幸ひ其子の出家となり道學たかき日蓮聖人心おかれぬ昔の好みをもて此兒十一

歳ありけるを高祖に奉りければいと愛み給ひ御側さらず出家の學行滿足して後年六老僧の其一人として大士入滅の後身延山第二世民部郷日向聖人い此見にぞ在ける

日向聖人い佐渡阿闍梨と號す博學智辯にして問答に長じたり高祖の滅後十九年正安二年の秋中老師天目鎌倉圓成寺において本迹勝劣といふ義流を立圓極實義抄を造て大ひに門派を募る日向聖人名越に在してこれを聞召天目を召給ふて御身い大士の御側に在の日短し在世の時曾谷敎信誤て其義を立しも大士丁寧に敎へ給ひしこれは御身等も知非あらずやと法理を說て曉し給しに尙心解ず久七か條を問聖人猶また其邪義を折く天目も懺悔して退きたり其餘宗門に嬰れ多し後年藥原兼綱本願として上總國垣生郡藥原に一寺を建立し師を開山とす今の常在山妙光寺これり正和三年甲寅九月三日六十三歳にして示寂す

斯て高祖大士は師匠道善御坊に敎導養育の恩を報せんと九月中旬華房の蓮華寺に入て清澄にかくと通達おし給ふ此蓮華寺は眞言宗にして住持淨圓といふも清澄にての知己にて十二年前此寺を彼の念佛宗の爲に追出されし事もありけりと身の上の昔語によろへつ

ゝ諸宗と法華との勝劣をかたり給ふを淨圓種々に難じければむおしく詞に言窮んより組にしるしといめんと九月廿二日あれを書したゝめ住持淨圓に渡し給ふこれを念佛無間書と名づけたり道善和尙は紫竹の杖に扶けられ越おやみたる老の坂けはしき路をたどりつゝ蓮長に値んぞとて遙々華房の屋に來り大士を見て心弱くも涙にくれ繰かへしたる繰言も根實わかぬ身の果敢おさ言で止なば幼き時物よみ手習ふすべをさへ敎へ給ひし師の恩をいつか報ずる時あらんと思ひきりつゝ念佛諸宗墮在地獄の業あるよし聞耳うとき老僧に物がたり しばし淨圓坊に止宿して夜を日にあかぬ敎化の法問濁る心の底すみて釋尊の本佛おりしといふよしを稱辨へて清澄に歸山なし給ひけりこゝに去る建長五年宗旨建立の其日より根ざし久しき東條左衛門この國の念佛者をかたらひ高祖大士に種々に難じ綺へども雀の鷹を怨み蚯蚓の巴蛇に敵たふ如くかゝる邊鄙の念佛者果敢おき禪宗の瘦顯にて いかで嚙得ん本化の鉄壁みな逸々に攻伏られ口おしくも嚙呀をなしてありけるが此頃天津の領主工藤左近之丞吉隆大士に歸依し奉り時しも十一月十一日使を華房へ遣して高祖を招待し奉るにぞ程遠からぬ天津なれば午の刻頃華房を立出給ひ御伴には日朗日澄鏡忍

乘觀・師俱の男女十餘人、高聲に御題目を唱へつゝ猶に莞たる畔徑、天津をさして急ぎ給ふ處に彼の法敵東條左衛門景信は、衆て期したる眼力の腹心、小手腹卷に身を固め、前後に伏たる百餘人、小松原の路眞中、大士を矢頃に遣すおし合圖を鳴して打て出、射る箭ゝ雹、劍ゝ稲妻師俱の信者のうの中に鋭忍左藤次長英等物の用に立べきゝわつか四五人に過ざれども手頃の獲物を引提て大士に御怪俄あらせじと目に餘る狼藉人に馳合しばしこらへて見へけるが東條景信馬上に在て鎧を合せ縱横無礙に蹴たつるにぞ何かはもつて支ゆべき鋭忍坊ゝ亂軍のうちに肩先切れて動と坐す左藤次も左りの股に矢を射ぬかれ乘觀長英ゝ袖を結びし玉襷きかけし掩ひも法の爲身は惜まねと多勢に無勢すでに危く見へける處に工藤近之丞吉隆ゝ東條濱荻の住土北浦忠吾同忠内を連立て大士を途中に出迎へけるが此躰を見て大ひに驚き右手差の垂緒を取て袖ひき絞り袴の側を端折つゝ眞一文字に馳來るを東條馬上きつと見て弓に箭番ひて切て放つを工藤ゝ躬を沈めて其箭を避射損じたりと東條景信乙矢を番ひて射る處を矢よりもはやく飛來る吉隆東條目めがけて切てかゝを景信はやく身をかはし七八合闘たりするどき切劣ちる火花景信あやうく見へたる處を郎等凡十人餘吉隆が前後左

右を退取卷減多打に切立られもとより金鉄にあらぬ躬の終に多勢に切伏られこゝに討死あしたりけり東條景信ゝ自餘の者には目もかけず高祖大士の御側へ馬一文字よ乘よせて年來の遺恨おもひ知れやと此方は徒立彼ゝ馬上二尺七すの大刀眞向に振かざし唯一打と切つくるを大士石の御手に念珠をいたゝき妙法蓮華經序品第一と九字をきり給へば大刀尖のびて數珠の母珠ふたつにゞれ餘る切先御頸右筋連に三すばかり切つくる仕損じたりと太刀取直し既に斯よと見へたる折柄空中に鬼形の鬼子母神善神現はれたまひ日月の如き御眼にはつたと睨み給へば景信が五躰すくんで動き得ず眼眩んで馬上より倒と落たる時しもあれ颯と吹來る夕風に霧立舞て遠近の物の斐目も分ざりければ大士ゝその間にこゝを逃れ天津小湊に身を置も却て便りあしかりなんと武藏住還市が坂にさしかゝり給ひしに日ゝ暮かゝるあやにく空かきくれて雲ふりいたし北風寒く身にしみて肩間の御疵も痛のたへがたくおはしければ傍の山根に洞のありけるを見そなはし此中に入て今宵ゝ此にやどり給ひ夜もすがら降雪風に御疵痛みて惱ましく御經とゝもに夜の明るを待わび給ひしに明の朝人の往還もとだへたる此山坂の雪踏分齡いと闌しひとりの老婆念珠を杖に持そへて漸くこゝに登り來つ

この洞をさし覗きしばし驚きたる躰ありしが我い此郷の土生神へ日參の歩行を運ぶものにはべり御身いかなれゞ雪に埋みし此洞に夜を明し給ふぞよ見まゐらすれゞ貴顯に疵もあり此雪風の疵口に入ゞ御爲あしくはべらんにと自身被し綿帽子を脱で大士に奉る大士いこれを押いたゞき御疵を覆ひ給ひけるこれ當來今の世に高祖の像に御綿を着奉る事の始めと知れけりさても日朗日登の両人漸くその在處を尋ね當よろあひあへるうち此日の夕つかた昨日小松原に討死なしたる吉隆の父工藤行光高祖大士のこゝに在すときゝて御迎ひにまいり自御手を取て我が天津の邸に請じ奉り我が子吉隆小松原において法華經の御爲に討死したるい天晴佛門の忠臣なり其妻も腰任すでに臨月に近し吉隆存生の日出生の兒もし男子あれゞ聖人の御弟子にあしはべらんといひし事猶耳に殘りぬと物語れい大士もしばし御涙に咽び給ひける後にこの子男子にてありけれゞ父の遺言にしたがひ徒弟とあし刑部阿闍梨日隆といひしいこれなり高祖大士い工藤吉隆が討死を憐れみ出家の儀式をもつて送葬し法名を妙隆院日工聖人と賜ひけるこゝに佛敵東條左衛門景信い小松原の時顔にいさゝかなる手疵を負けるが其疵より惣身壓爛次第に腐入その夜大熱火焔を揚五躰の節々鉄の杵をも

つて搗るゝがごとく牛の吼るが如き聲をあげて泣喚はり目も當られぬありさまにて相果ける悪き臭ひ一室に滿て妻子すら其邊りへい寄がたく非業の死を遂たるもこれ全く正法敵對の現罰なりとてこれを見聞ものゝの不測を感じ却て高祖を歸依するもの多かりける工藤行光い我が菩提所なれゞとて天津領内眞言寺といふに大士を入奉る住持の僧快よからずして此宗流を謗るこゝにおいて日澄師い此一問答をゞ我に許し給れと大士おらびに日朗聖人に願ひ住持の僧を捉て眞言の邪義を論じ破る其僧たちまち改宗して名を日宗とあらたむ大士に寺号を賜れとねがひけれゞ大士笑て日澄が手にて改宗ありたれば其儘日澄寺にてよかるべしとて即日澄聖人を以て開山と定む其寺今に歴然たり

刑部阿闍梨日隆慈父吉隆討死の地に寺を建て鏡忍坊日曉師を開山とし慈父日玉を二世とし其躰三代に順列すはじめ妙隆寺といひ今は鏡忍寺とよぶ小松原御難の舊地は今の聖人塚の地ありといふ古今道筋もすこしの違ひはあれど地理をもつて考ふれば其理あたる歟

玆に年改て文永二年乙丑の春高祖大士は房州を立て下総のかたに志し給ふ海上郡鼻

和の眞言宗の寺に宿り給ふ住持の僧敎導にあづかり法弟となり名をも日正と賜ふ寺を遁乘寺と名づくいたる處法を弘め諸宗の法敵を攻おびけ給ふこれより常陸の國筑波山の麓を過給ふにこの山男躰女躰と峯を分たる靈山にしてろのかみ釋の得一こゝに住で法相宗をひろめたりと言傳ふ霞が浦より筑波峯に見渡し遠き山水の風景を賞翫して野州奈須にいたり玉ふ斯は近き頃中風の御心地にてありければしばしおゝの温泉に湯治して御身を養生なし給ひ刈ゝ此地を發足ありけるに原中に五尺ばかりの大石の見へけれは御筆を染て題目を認め給ふ後人そのまゝに彫刻て今に傳ふ中古野火のために燒れたりとて年号見へず二年四月十三日とあるのみあり今は小兒の嗽初には必ずおゝに供物を奉るゆへ世にあれを嗽初佛といひつたへたりもぐてに藤原といふ里あり里正治郎助齡七十ばかりかひ〳〵しく大士を我が家に迎へて師檀の契を結ぶ歸依のあまり治郎助泣ていふやう我年老たり再び聖人をば拜しがたし我れ死せゞ離を導師として冥路の燈とせんとありなれゞ大士四流の旗を製して上行無邊行淨行安立經の四大菩薩の名を書て是は汝が導師なるはとて與へ給ひけれゞ治郎助よろこびにたへず寺を建て藤原山清隆寺といふこれより路を宇都宮に求め給ひ君帽氏

に宿り給ふ其家の老母剃髮して名を妙金と賜ふ後年日印聖人を請じて一寺を建立して法光山妙金寺と名づく此寺に夜光といへる御本尊を什寶とす宇都宮の城主上野守景綱の姉大士の高德を慕ひ名を妙正と改て受戒す後文永十一年おゝに一寺を建て名を長宮山妙正寺と賜ふ城主景綱はじゆ妙正尼も高祖の御身の惱ましかなるをいたはり中風の病には當國攝原の温泉功能あれはとて勸めけるにゞ前業所感の疾あれはとても愈べしと思されど人の心に戻らじとろの温泉に三日ばかりも在しけるが程おく宇都宮に歸りしばし此地に法を弘め給ふ妙正といへる老婆ありてふかく大士を歸依したるも此時のあとありけるとかや茲に十月の初めつかた上總國夷隅郡興津といへる地より星名五郎といへるもの尋來て大士に見へ奉り謹で言上やう我が主人佐久間十郎左衛門重貞元より佛道を歸依し領内に釋迦堂を建て香華を供養する事ひさし近頃聖人の宗風をつたへきゝ且ろの奇特を拜み奉り何とゞ今度聖人の請待し奉らん爲に態と此五郎御使ひを承りぬとありければ大士その遠路の處志の厚きを挨拶し程なく名星五郎を案内として興津に趣き十月十五日より廿五日まて彼の釋迦堂において御說法ありけるにゞ領主重貞一門のこらず改宗し其歡喜にたへず今年七歲に

ありける長壽麿といへる我が兒を法弟となす然るに重貞が季の舍弟ありて竹壽麿とてあれも今年七歳なりけるが長壽麿が出家するを見て我も僧におして給はれと泣て止ずあれ宿緣あらんとて子息長壽麿舍弟竹壽麿ともに釋迦堂にて剃髮せしめ法弟とす同七歳なれども伯父と姪となり大士ふかくこれを憐み給ひ伯父の竹壽を日家と名つけ姪の長壽を日保と名を賜ひ兩人ともに修學增進して後年廣くあの近國を弘通し中老僧十八人の列に入給ひけり

此興津の釋迦堂を寺として廣榮山妙覺寺と號し日家日保ともに此寺に在て弘通す弘安年中兩人心を合わて小湊誕生寺を建立す高祖をもつて開山とし日家は二世日保を三世と次第す又興津妙覺寺い同く高祖を開山とし二世は日家三世い日保と定め世の睦法の愛り斯の如くありしゆゑ此兩山を今に同根一寺と稱す

此時に當て鎌倉には猶うちつゞきたる凶變に今年も奇怪の事のゑ多かりき六月二日秋田城之助が景十三回忌の大法會無量寺にて行れ十種の供養を遂若宮別當隆辨僧正導師として說法あり伊勢入道行願始め並居追善最中に大雨大風荒いでゝ本堂の長凉くゆけ參詣あまた即死しければ諸人い命大事と逃歸が谷の山々崩れ落家人ともに牛馬までみあ土にうづめられ親類緣者を見迴るとて鰯鯨を擔て人々の驚あるくも前代未聞ときあへけり又八月十七日相摸武藏大地震十二月四日の夜彗星一天に亘るあと去年七月五日の曉の彗星より廣大にしてろの芒尖七十餘度に及ぶこの天災いかゞあらんと掃部頭範元をはじめ陰茂國繼等の司天曆學の輩出仕にて將軍家の庇の御所に出御ありて是を聞召在府の大小名い貴の子の牀に列座せり司天の官人言上告やうむかし皇極帝の時初て此星出てより今に至るまで八十五度一度として凶變ならざるはなし傳へいふ其芒氣の差ところ必ず災變ありその光りの色青き時は王公將軍破られて四海困窮するの色赤きい盜賊國に起て上下の歎ふかしまた其色黃なるは女人權威を振て國家みだる又色の黑きは海邊に賊民起て中國を惱ます毒害國土に在故にろの色天に顯ゝるゆり天あの御大事あれに過ずとありければ府內宮寺まで仰せて御祈り初りける若宮の僧正金剛童子の法を修し安祥寺の僧正い如法尊勝王の法を行ひ陰陽師業昌い天地災變の祀を修行し同國權い屬星の祀をなす又翌日陰陽師少允晴茂を御所の西の壺に召て如法泰山府君の祭祀を行しめ將軍出御有て鞍置馬一四銀造の劍一口手筥二合に紺の絹を入て取せ給ふ誠に重き御慎とて將軍こゝに恐れ給ひけり此御祈正月十一

日に始りて麗艶なる鎌倉中の春氣色も絶て詠る人もなく酒み渡りて心さびしく日を送りける中に二月朔日の朝日い出てありけれとも空曇のおとく暗くして物のあいろも定かならずたゝことならぬ日の光りやと思ふうち巳時雨ふりいて、小雹あし申時にいたり雨の色うるしのおとくあはいねにと見るうちに頻りに泥をふらしろの夜にもなりける比樹々の枝葉は泥におされて倒れふし鎌倉の町中い田の中をあゆむが如し闘鬪このかたの珍事かなとこゝろなき野夫農婦まで身をふるはして恐れけり又時の將軍宗尊親王も北條一族の我意に牽められ思ひに曇る月と日の惠とかひなき御身を歎き表には御病惱と聞へさせ給ひ密に松殿僧正法印權祭おとゝいふ名僧を招き蕘權時宗を調伏おし給ひけるが隱れたるは顯れ易く隱謀はやくも露顯におよび將軍も是非なく夫人興に召て京都にかへり給ふ十一歳の時に鎌倉にときめき下り現ともおき十五年久しく住馴し御所を立いづるとてその名殘を惜み給ひ固瀾川を渡るとて

かへり來てまた見んとのかたせ川濁りし水の澄ぬ世なれは

と遊ばしてなく〳〵帝都に登り給ふ其御子惟康親王わずか三歳にして征夷大將軍に任ぜら

れ天下の御主と成給ひしも偏に御幼君を名として政道を自在なす北條の計らひところ知られける。今年文永丁の卯。高祖大士の御母、妙蓮尊尼。久しく病の床に臥て在しけるが已に去る年妙典の經力を以て定業を廻延たる事四年なり今は此世の緣もこれ限りありとて臨終正念の御題目の外他事なく見へさせ給へば大士も御側を去ずして晝夜看病ありけるが日朗日向日澄。諸師もともに師のちからを扶け介保し奉れり。檀越工藤行光。佐久間重貞。小林寶信は盡に薪に一切の費を供養しければ妙蓮尼は何に事廢たるよしもなく其秋八月十五日睡るが如く御臨終ありければ。大士も悲みにたへたまはず。躬みづから葬式をいとなみ。塚を築き石を建て佛事をいとなみ。往て歸らぬものは年月と。わかれて再び相見ざるものは親ありとて。百日の間。其御墓に諸經し名殘おしくも房州を立て。下總に趣き給ひけり。御兩親の御墓のちに寺を建。御名を合て妙日山妙蓮寺と号す。又遠州貫名の御屋敷跡にも貫名山妙日寺を建立しともに慈父妙日尊儀を以て開祖と仰げりこれより大士は上總國垣生郡にさしかゝり給ひし處。路すがら雨のふり出けれは。茂りのうちの辻堂に立入給ひしに。あゝは傳教大師の開基にして大悲山笠森寺とて。觀世音の靈場ありければ。高祖とりあへず

うきに降る泪の雨にぬれじとて。けふ笠森の身に着するかな

と口ずさみ玆に一夜を明し給ひしに。戸の間しらむ有明がた。墨田の里なる高橋五郎時光といふ人ありとて。畏る〳〵此堂に入來り。大士の前に掌を合我い常に此尊像を持念するに。昨夜更闌て枕のうへに。夢かあらぬか觀世音現れ給ひ。我が堂に尊き聖人あり。早く迎へ率れよとありけれバ夜霧を拂て御迎にまいりぬとありけるにゞ大士其家に入て教化なし給ふ後年中老日秀聖人。當地に寺を建て。庭谷山妙福寺といふまた。藻原の邑主齋藤兼綱も。高祖を請待し。檀家と成て歸依淺からず。斯て大士い鎌倉に歸らんとして。若宮の邸へ立寄給ひしに。主富木胤繼大士に向ひ奉り。もはや今年も餘日なし殊に近年覺へぬ寒さなるに。枉て此方に年を補給へと。强ちにとゝめられ。大士もそれと心定め。あら玉の春を待たまひけり此年のうちに古河の邑主。千葉氏富木の一門なりとて大士の徒弟となり。名を日胤と賜ふ。後建治元年本尊を御授與ありて。故郷古河にかへり。法輿山妙光寺を開基せり。一日富木胤繼大士に宣やう我に一子あり。性質學問を好む今度日向師聖人の御側に在て。立振舞を見て。しきりに出家せんとを願ふ。われ徒弟の數に入給はらば。彼が僥倖一家の慶ならんとありければ。大士ゐれを

許して大戒を授け名を日頂と召る。時に齢十六歳ありける。大士も文永五年の春をあゝに迎へ日蓮をも伴ひて。霞と共に下總を立て。鎌倉名越の御菴室にかへり給ひけり

日頂聖人い伊豫阿闍梨と號す。眞間山弘法寺い天台宗の檀林ありしが。先年住持丁性僧都。富木殿に論じ破られて。逐天せしより學寮の所化も四散になり失せ。今は往する僧もなし。此寺は富木代々の香華所にありければ胤繼その無住なるを悲しむ。大士日頂あろ有緣の山ありとて。入山せしめ。開堂ありしい廿六歳の時なりけり後年大士入滅ありて。三回忌を池上ゑて營みし時。日蓮聖人い鎌倉ゑ宗論の事ありて。此法會ゑ値給はず父日常大ひゑ怒り。宗論は一生の所作ありと。三年の法會い又と來るゐとなし。殊に其身六老僧の一分にありながら。不義不孝の所爲ありとて。おれより面會なしたまはず。日蓮聖人ろの過失を悔て。中山の門前ゑ來り。銀杏の樹のもとゑ立て。實塔品の偈を誦で七日の間晝夜御敎あらん事を願へども聞入給はず。かくて正安元年の春。日常病に罹りし時日昭日朗兩聖人。その病を訪に事寄。日頂師の過を詫給へども聽ず。その躬に着て在たる法衣を脫て。兩聖人に渡し給ひ三月廿日。日常聖人示寂す。日頂聖人い邸にいたり。勘氣の身

あれば門に入給はず闇に晩づき暁て賜ひし御紀念の法衣を両の手に捧げ御經を誦誦し
障を限りに泣て立去給ひしが。ろれより何地に在しけん其終る處をしらず。日常墨人無
慈悲の親に似たれども高祖を。歸依するの厚きなり。日頂墨人又不孝の子に似たれども。
宗義を守るの固きなり此親子両人の行狀ろの是非得失凡庸の蟲蝨却て恐れありとす
思はれける

日蓮大士眞實傳三之卷畢

日蓮大士眞實傳四之卷

東海相模州　小川泰堂編述

昔天竺に。調達を賢者ありけり。此を賢者。あの調達に斯爲んと思ふ事を。立願してあれを葬る
にいかなる。廟も協はぬいなし。其調達の耳の孔の。深きと淺きとによりて。偖に高下あり常に
正法を聞たる耳い。深くして一生佛法を聞ざる耳い。ろの孔淺しとかや。茲に日蓮大士今末法
に入て二百餘年。日本國の萬人。その耳の孔の淺きを憂ひ給ひ本地秘妙の大法を既喩し給へ
ども。身の爲にする良藥は。口に苦かる世の諺語。却てこれをいみ憎みまゐらすれば。愈々彼を
不便に思召給ひけるは。誠に大慈大悲と謂つべし。今年戊辰の春。唐土大元の世祖。忽必烈ろの
國の至元三年。黒的といへる臣下を使とし。書翰を日本に贈る。朝鮮の國王王植添書をあし
て。臣下潘阜といふものを。案内として。正月十八日。京都に達す其大元の書翰を披見るに大槩
古國皇帝より。日本國王に宣す。我太祖。天命を奉し。宋國を亡し今中國に居て四海を治む高麗
國もいや我が手に入。願くい日本。我が國と好みを通じ。和親して相交らべ。四海皆一家の如く

ならん事を思ひて。使を遣す處ありとあり。又高麗國王の添書には。我が國大元の命に從て其德に懷く。皇帝今日本と。好を通ぜんとするゝ。利慾の爲にあらず。偏に萬國一致の睦をなさんとの心なり。早く貴國の返翰を待と書たり。京鎌倉の詮議區々にて。其書翰の文盲。無禮なればとて。返翰に及ばず。そのまゝ使者を追歸されける。これ大元蒙古の日本にたゝりをなす始にして。高祖大士兼て安國論に認たる。諫言こゝに符節を合せ末代の不測これに過たるゝあらじとぞ思われける。此大蒙古といふ國ゝ。唐土の西に當る戒夷あり。其先祖の起りゝ一人の寡婦あり。奥深き閨のうちに。獨起臥ありけるが夜毎に天より光明さして。其婦の懷中に入。其光に感じて自然と孕めり。月滿て安產し。三子を產。中にも季の男子孛端產れながらにして。機量拔群なりしに。其子其孫。つゝいて才覺すぐれ。終に廣大の威勢を成し韃靼と合躰し雲中九原の地を侵して。九十餘部を征伐し兩河山東數千里の間に。打殺さるゝ人民算を知ず燕京を亡し。高麗國を降參せしめ。六十六歲にて病死し。これを太祖皇帝と稱し。第三の子窩濶後を繼で太宗皇帝となり。陝西の丘汴城を攻落し。金を亡して。宋國に及ぶ太宗死して憲宗位に卽。その舍弟忽必烈世を繼でこれを世祖皇帝といふ。至元元年都を燕京に移へ易に大蒙古元

とある詞に依て元の世と唱へ今四百餘州を伐鎭め其威勢高麗までも靡き虎も畏るゝ國の名を大元蒙古と喚にあんありける今其國王日本を奪ふ心あれども表に仁義の詞をかざり此國に使をつかわす事たとへば蜜を塗たる劍のごとし。日本の厄難この時にきわまりぬる危きこと風前の燈。尙譬にあらず。いかに誓りゆく世の樣をと思ひ煩ふうち。五月十二日の朝。日輪ふたつ並び出たり。關東關西見ざるものなし。此時に當て。日蓮大師書通を認て奉行宿谷左衛門尉光則に捧ていふ。抑々正嘉の大地震。文永の大彗星。飢饉また疫癘日蓮これを御經に考へたるに。念佛禪宗等。正法の法華を邪間おすゆゑに。此禍を招けり。もし我が諫を用ひ給いずと他國侵逼難とて。異國より此國を犯すべきより。去る文應庚申の七月。一卷の書を公の御手を以て御館に奉れり。しかしてより。此方既に九ケ年今年大元蒙古より。使を此國に來らしむること。我が先言に符合し終れり。この異國の敵を招くものは念佛等の諸宗なり。又此外敵を退治するものは。唯日蓮一人なり。國の爲法のため。いさゝかこれを盲上すとぞ書たりける。奉行光則。有無の返答なし。これに依て其年十一月十一日。又一通を書て執權北條時宗にたてまつる。天下の安危存亡は。法の權實邪正に依ると前年安國論に述たるが如し。願くは當

時諸宗の學者知識を殘りなく問注所に召れ。此日蓮と掛合せ。御前において彼の宗々と。我が義と邪正明白に聞召糺られ。其邪惡の宗を捨て。此純圓一實の御經を御歸依あらば。此國の安泰ならん事掌を反すよりも速あらん。國を治め天下を平和にするの根本い。この一擧の宗論にありとぞしるしける。ろのほか平左衛門頼綱。北條彌源太極樂寺の良觀。建長寺の道隆。大佛殿の別頭隆觀。淨光明寺の行敏。壽福寺多寶寺門樂寺以上合せ十一通の書をつかいして。其邪義を責しかゞ。寺々はいづれも其由緒ありて輕からぬ寺門なれば。其日蓮の書に添書して。各々訴上るにぞ。上下萬人あれを傳へ喋々しくも罵りける。こゝに先年北條義時。蝦夷の備として。安藤五郎をつかはして奥州津輕に砦を搆へてありけるが。此秋。蝦夷謀反を企て東國に亂入し。安藤五郎あれがさめに討死して。砦さへ燒うたれたるよし。鎌倉に注進す。大士これを聞たまひ。法弟檀越に宜ふやう。哀れなるかな。我が日本國。蒙古西に動き蝦夷東に叛き國に種々の變災起る。この災難の根を知る者い絶てなし。反て法華經の行者を責惱ますゆえ愈々國に災を襲ぬるを知らず。今に見よ〳〵。諸宗の讒言を信じ。此日蓮を捕へて。又々流罪死罪におよぶべし。我弟子檀那と名乘ん者い心に隱し思いるべからず。妻子を思ふとも

れ。權威に畏るゝとなかれ。命惜さに法華經を捨たりとも。終に蒙古の爲にうち殺さるべし。とても協いぬ身ありせば。一乘法華の爲に骨身を砕き。此生死のきずなを切て。佛果を得らるべしと。進退きはまる。世のありさまを。なみだをながらにかたり給ふ。明れば文永六年二月廿一日の曉に。月三輪並び出たり。人皆奇怪として見物す茲に極樂寺の良觀上人い世に聞へたる律僧にして此年月伽藍を造立すると八十三ケ所大塔を建るあと二十基一代經藏を取立たると十四部諸國に橋を渡すこと百八十九ケ所路を造り坂を坦にしその身に二百五十戒をかたくたもち。三千の威儀を刷正女人の手より物を取らず。青蚓を路ず戒行堅固の生如來なりとて。御所館の御信仰淺からず。世の人其道德に懷くあと。小兒の母を慕ふが如し。今日しも御館に伺候し。執權奉行人と膝つき合せての物語り。我戒律の一宗を。日本國一圓におし弘め。第一國土に酒を造るあとを禁制し。米穀をゆたかにして。喧嘩口論。放埒驕奢の根をたやさんと。此年頃それを圖へどもいかにせん日蓮といふ惡僧に妨げられ其辭さへ得果さず。嗚乎寸善尺魔なるかな日蓮死あずば佛法は亂離になり國土も安穩にはあるまじ。毀りかけたる天目の茶も毒となれこの事は謀て愚僧が惡ありと。誠しやかに聞へ揚る其讒奏は末終に高祖の御大事と

こそ知られける斯てこの頃甲州の農民ありとて。彼處の往還此所の辻と。大士に つき纏て其說法をきゝ居たりしが。其法理といひ立振舞を見て。これ日本第一の名僧ありと思ひ定め大士の御巷室に來て。戒をうけて改宗す。大士その名を問給へども。甲斐の國巨摩郡今諏訪と いふ。片山里の賤の身にして。名をきあへ奉る程のものにもはべらずとて立去ける。幾程もあ く一人の童を携へ來りて。これは我が長子にてはべる。あさりに聖人の尊く覺ゆるぞ。何とぞ これを法弟になし。炊の扶ともあし給れと願ふにぞ。大士その兒を御覽あるに。眼光人を貫く これ尋常のものにあらずとて。法弟とし名を日進と賜ふ。時にそが父も。側座にしありていふ やう願くは我をも。御手を勞して。剃髮せしめ給へ。御門前塵を拂ひて。御庭の草あゞ除て事奉らんとあるに。大士頓て髮をおろし。久本坊日元と呼給ひ。親子他事なく仕事けり

久本坊日元い。俗姓嵯峨源氏。安部貞任が末裔あり。貞任滅亡の時。ろの母懷妊あが ら甲州の山里にゆかりありて。茲にかくれ。其出生の子姓を棄て農民となる。久本坊い其正 嫡なり。日進師此時十一歳。後に三位阿闍梨と稱す十三歳の時。日朗聖人とゝもに宿谷の 土の牢に入。十九歳の時桑が谷に龍象坊と問答す。正安二年駿州富士郡柚野村に竹養山

正法寺を草創し。正和二年。五十五歳の時。身延山第三世を相續す同四世日善聖人も久本 坊の子にして。此日進聖人の舍弟あり

今年卯月の初旬大元蒙古より。又書翰をもたらして。對州に來る。宗對馬守宗資あれを追かへ す。蒙古の使その歸さるに。對馬の國人。塔次郎彌三郎の兩人をとらへて。船に載て歸國せりと て鎌倉の風評。取〻にぞありける。或夜久本坊日元。大士の御肩を摩あがら語るやう我が生 國は至極の國山にて。人間も木石のやうにはあれど。山の姿水の色。風景かへつて見處多し秋 よりは寒冷の他國に勝りて。凌ぎがたけれども。青葉にしげる夏山は。木蔭冷しく。岩間を下る 瀧津瀨は。浮世の塵を洗ふが如しいかよき折を得て聖人を伴ひまゐらせたしとあり。夕る にぞ。去べ我もかねて願いしきあとあり。いでや甲斐の國より富士山に登らばやと。思ひ立日 を黃道吉日。あれより旅の要意しつ。程なくこれが道しるべにて。甲州吉田に着給ひける本よ り久本坊の職人なりとて。神殿拂屋平內の方へ入奉る。平內喜んで敎化をうけ。授戒して本尊 を賜ふ。この近き四邊法を聞て歸依するもの多し。後年こゝに寺を建て。吉祥山上行寺とい ふ。大士此地に滯在のうち。信者十人ばかりを案內として。富士に登山あし給ひ時に天晴風靜

にして。十三州は一望の眼下に遮り。鹹に聞浮無雙の名山ありと賞歎なし給ひ。兼て書寫ありて。法華經一部を。山の半腹に埋め巖石の上に座して。暫時御經あろいし給ひける其地を今に經が嶽とて。其古蹟をとゝむ。此末法萬年廣布の基を固めんとの御意なりといひ傳ふ。ろれより山を下て小立村に入しばらく憩ひ給ひしに。此里人かねて聞つる。日蓮聖人ありとて。こゝに群參て題目を唱へ。各〻手に〳〵紙をさゝげもちて。御本尊を請高祖これを數へ見給ふに。二十八枚あり。これ御經の數ゝとて。此紙をひとつに粘合て一紙とあし。大筆に題目を書て村長渡邊藤太夫に渡し給ふ。今駿州岡宮光長寺に傳來し岡宮二十八紙の曼多羅とて。世に高名し。ろれより山梨郡勝沼北原を過て。田並にやどり給ふ。主翁の願にまかせ。大黒天を畫て授給ふ。今に存在す。又此地に黒川といふいろの頃金銀山有て。千軒餘の竈賑しかりしかば大士も此里に入て。弘經あし給ひけりすべて。當國は大法有緣の國にやありけん。しばしの弘通に。改宗のもの多く。いまに勝紹に上行寺。黒川に法蓮寺。北原に立正寺等有てその靈跡をとゝむろれより相川足柄郡板橋といふ地にかゝり。象が鼻といふ處の石に。腰うちかけ此わたりより。安房上總の方。波間はるかに見ゆるにぞ。古鄕なつかしくおぼしめし。しばし兩眼を閉

て妙日妙遵へ。御追福の御題目を唱へたまひける。後に朝慶聖人。あの地に寺を建て。象鼻山妙福寺といふ。高祖大士ハ。漸く長月の頃。松ばが谷に歸り給ひしに歸依の男女は是を喜び不歸依の族ハ。又いかゝる事をか言出んと。たがひに憑み語りける。さるに年改りて文永七年午の二月十四日。慈父妙日尊儀の十三回に當りければ。大法會を修行して。厚く其冥福に備給ふ此頃些いとまを得て。十章抄秀句十勝善無畏抄等數篇をあらはして。門弟中に示し給ふ。しかる處に。安房上總の檀越より。鎌倉に人を馳。此春の末ゟ夏にかゝり。又々疫病の流行前年の如し。あハれ聖人御渡り有て。其横死を救ひ給ハれとありければ。高祖佛工師に命せて。我が肖像を彫まし め白布に題目を書して。其本像の手にかけ。是を使に渡し。此像ハ我に異る事なし持歸て前年の如く。浦々の海に曳渡すべしと。仰ありければ彼の國の海岸に是を執行し。程なく病難うすらぎける。國中大ひに喜で改宗の者多かりしとぞ。此尊像今に江戸に傳へ布引の祖師とて。牛込幸國寺に安置せり。かくて今年も吳羽鳥梭よりはやき年月のあらたまりたる文永八年辛の未世ハ春なれど何となく。穩ならぬ近年近日人の心も臘夜の影さだめなき心地して。花さへ待ぬ彌生のはじめ。大路の砂を蹴立つゝ京都よりの早馬ハ。また何とか出來つ

ると。耳を側てきくもうき。大元蒙古の國王より。兩度の使に返事おきゝの怠慢を憤り趙良弼を使として。又々築紫に來るよしの註進にぞ有ける。かく靜ならぬ世の中にかて〻加へて此春より。雨一滴も降ずして。夏にいたりて大地乾き。田植時ある入梅にさへ。雨氣催す氣色もなく。六月にゝ江河の水涸はて〻。魚い炎天に焦れ草木い色をうしなひ井の水竭て渴を凌ぐ術もなく。人の命も頼なき。大旱魃。海の潮さへこのごろい引潮有て滿汐なくこれぞ天下の大事と見ゆるにぞ。極樂寺の良觀上人を御所に召れ。貴僧年頃持戒の法力をもつて。雨を八大龍王に請。四民を潤し給はれと。懇に台命ありければ。良觀上人身い不肖あれども。佛力法力をもつて。頓て驗を現し奉らんと。御受をあし退出ありしい。尊くもまたいさましく見へにける。此良觀といふい。大和國磯島の人にして。姓い伴氏十一歲の時より。志貴山に學問し十三歲の時。五辛肉食を斷じ其頃戒行堅固の譽たかく。建長四年關東に下向して。律宗を弘む北條義時の三男陸奥守重時ふかく此を信じ極樂寺を建立す後入道して其境内に別莊をしつらひ弦に念佛して終る。其子長時業時いよ〳〵信仰す。ゆゑを以て今度この雨請の大任を仰つけて。其名僧の譽を。天下に知らしめんといふ。北條家一門の結構といはれける

極樂寺い靈山山と號す。眞言律宗にして。南都西大寺の末寺なり。其頃關東十三ケ寺御祈願所のその一にして。七堂たかく雲に聳へ。境内四十九院。世に目ざましき大寺なり今い衰廢して。本堂と寺中の吉鮮院のみ殘れり。寺領今い九貫五百文を寄らる。むかし良觀上人大佛門前の。西桑が谷といふ地に。一院を建。世に賴あき病人を聚め。食料醫藥を施し別て癩病は。前世の宿業あればとて。戒を授け念佛せしむ。此時癩病人多くあつまるよし元享釋書に見へたり。世に癩寺といひしい。此もゑあらんか

一輪の梅を見て。天下の春をしり。半杓の水を汲で大海の味を辨ふ淺きはもつて。深きを知り小い以て大に喩へつべし。茲に良觀上人。既に天下の台命を受て。靈山が崎にひろく壇を搆へ。大慈大悲の雲を招き。甘露の雨を四海にろゝがんものと。六月十七日早天より。修法始るよし。高祖大士これをきゝ給ひ。これ幸ひの時節なりとて。良觀上人の弟子に。入澤の道淨坊周防坊といふ二人あり。大士此両人の招て宣ふやう。我は經文に任せて。律宗を國賊といふ良觀上人はまた我を惡僧とのゝしる。鎌倉府内の上下萬人心の眼盲たれば。いづれを善と譯る人なし。良觀上人今度雨を祈給ふよし。道理よりは證據。又ろの證據より現證にしく事あし此般の

雨請をもつて。良觀上人と我と法の邪正を定むべし若。七日の間に雨降ば。我この法華經を捨て。良觀御坊の弟子と成。鐘を敲て念佛すべし。若又雨ふらずハ。良觀上人我慢の心をひるがへして來て。我が弟子と成て。一乘法華の行者と成給へ。むかし傳教と護命と。守敏僧都と弘法大師と雨の祈りに依て。法の勝負を定めたる。先例ありと宣へば両人雀躍してよろこび。極樂寺に歸て。斯と告けるに。良觀上人も心得給ひ。さらば一七日のうちに。大雨を降せ日蓮を我が弟子とおし。鎌倉中の目を驚さんと。百廿人の僧を。八面に列坐せしめ。上人ハ中央の壇に登て修法おし給ふ。遠近の男女。數千人ろの奇特を拜まんと。處席まで居並んだり讀經の聲天に轟き。念佛のひゝき。地を動し。日々夜々の丹誠も。既に五日に及べども雨の降べき氣色もなし松樂が谷より。御使を立られ。今日もはや第五日目。雨のふらぬいかにぞと有ければ。良觀上人聲あらゝげ。今ハ修法の眞中なりとこたへたり。これより泉が谷の多寶寺の僧二百人を助行にたのみ請雨經といふ。御經を聲の限りに讀立て。既に廿四日になりければ。大士より今日滿願の日あり雨いかにと。問せ給ふに。良觀苦しき息をつき。此上七日と日を延ければ大士ろの意に任せ給ふに。天下の雨請といひ。また日蓮と法のわらうひ。賭ありと。近郷遠村にまでいひ傳へ。その勝負を見物せんと追々增る數万の參詣。金も爛れ石も焦るゝ六月の炎天。雨氣絶たる一百餘日。靈山崎の人の山崩るゝばかりの其中に。聲も嗄たる三百餘人。こゝを一世の大事ぞと。汗は五躰にあがれても。雨にあらねば諍に勝よしもあき良觀上人。いかゝはせんとおぼす處に。廿五日より大風吹出。暑氣を拂て。熱湯の如き風天邊より吹おろすにぞ鎌倉中の土煙。虛空に高く吹立て眼鼻も明ぬ祈りの場所。汗にまぶれし砂埃。人ハ誰とも別がたくたがひに顏を見合て。眼珠右眼左眼ばかりそり。其時松葉が谷より。高祖大士。使をもつて責給ふやう能因といふ。破戒の僧あり。旱の時伊豫の國にありて。雨請のうたとて

天の川苗代水をせき下せ天降りますな神ならば神

と讀たりければ大雨忽ち降來り。又嫗女の和泉式部といへる婦女も。歌を詠て雨を降らすときく。かゝる破戒の能因。婬乱の婦女。わずか三十一字をつくしてさへ。易々雨は降したり戒行堅固の御身といひ三百餘人の丹誠助行。二七日まで祈りても。雨一滴もふらざるハいかにぞや。此をもつて思召せ。三尺の小溝を跨得ざる者が。二丈三丈の堀を越べしや世に手易き雨さへ降しにぬ人が。一期の大事たる往生成佛遂ふべきや。尊無過上の法華經の行人を。惡しと

おぼす御身あそ。此旱を招き。民の歎きと成し給ひし根本ぞ。千日万日祈り給ふとも雨の降べき道理あし。眞觀上人實の出家にし在すあらば。我慢を棄て來り給へ。雨を降す法と。佛に成道とを敎へ奉らん。いざゝらば末法應時の經力を見給へとて。御弟子両三人うち隨へ。靈山が崎より。西に當り。田邊が池といへる古池あり大士彼處に趣き給ひ。小板子に御經を書したゝめ田邊が淵に是を流し。御唱しづかに讚經はじまり。すでに御經二の卷にいたる頃ほひ。南の天に一點の雲起ると見へしが。忽ち大風にひろがりて。さしも烈しく。吹たりし風も止海上恰も鏡の如く。いと穏かに雨降いで。田畑山林しと〳〵と。樹茅草木石瓦うるほひ初し法の雨三日三夜ふりつゞき。人畜鳥類昆虫まで。活かへりたる色見へて。天下の喜び大方あらず。是全く八大龍王の擁護にて。法華現證の利益とぞ思れける

田邊の池い。七里が濱より。西に入ること五町ばかり。金洗澤の上あり。今は墾て田となり中央の高き處に。一丈ばかりの石を建て。題目を彫付たり。此南の田の中に蛇枕といふ塚あり。其池の跡歴然として物凄し鎌倉繁榮の頃。この池に雨請のあと。往々東鑑に見へた

魚は水を已が世界と見。餓鬼は水を火と見。天人は瑠璃と見。人間はこれを水と見る同し一の水なれども。一水四見の道理に。其身の業により。これを見るの姿同じからずとかや今正法現證の力をもつて妙法の雨天下を潤せども信ずるものいすくなく饑るものい愈々多しとぞ故に七月八日扇が谷。淨光明寺の行敏といへる住僧。書をしたゝめて。松葉が谷に贈る大士これを拔き見給ふに。法華經の外一切諸經。皆佛の妄語といひ。念佛を無間といひ禪を天魔と爲り。大小の戒を持つを國賊と演らるゝよし。あれ論外の敵佛ありと。種々に惡口を雜へ喧嘩欲さの難問を書たりける。大士も今い論判反て。亂坊の基あらんと。おぼしめし。盲ひ越されたる不審の條々。自己の問答無益なり天下の決斷所において。あれを答へん宜しく其とを計らるべしと返答す。今日しも十二日。盂蘭盆會の御心携の處に。四條頼基訪奉りけふい慈母の忌日ありとて。白米一斗。油一筒。錢一貫文を。盆の供物に奉り此盂蘭盆といふいいかなるとの起りにいへるやと尋奉るる。大士は扇を笏に取直しされば。とよ往昔目蓮尊者の慈母。一飯の施しを惜みて。人に與へず。其上に與へさるよし僞り給ひし慳貪の罪により。五百生が間餓鬼道に墮給ふ。うの御子目蓮尊者。佛の御弟子とあり。其慈母を救ひまひらせしよし御經に見へたる

ぞ。あれ盂蘭盆の始なりける。その餓鬼道三十六種あり。食吐。食水有財無財あざすべて心に飽足あるをしらず是を救はんにハ。法華醐醍の法味あらでハ。飢ひがたし。御母妙法尼の靈魂も此施餓鬼の功德にて。佛にあらせ給ふべきよし。細々教化あし給ひけるかゝる御物語の處へ入澤道淨坊あいたゝしく尋きて。我今朝より淨光明寺に遊びて在しに。此程聖人より。相對の問答御斷ありしとぞ。行敏和尙。聖人の流義を邀々非難したるを。一通となしてこれを御館にさし上るとて。見せられたるを。我もかたの如く。後生を願ふ心にてあれバ。潛かにこれを寫しもて參りロ。これ見給へとさし出すを。大士手に取りこれを讀で。斯淺々しき法門は答へ力もあらざれど。言ずバ愚おるものは。詰りたりと思ふべし。さらばとて料紙硯の塵うち拂ひ。殿きぬ筆の走り書。さら〳〵と認め終り。是を入澤の入道に渡〳〵給ふ。其論義のするどきと電光のおとし。行敏もこれを見て膽を消し口籍んで見へけるが。いかんとも爲すべなく。所詮我が力にハ協ひがたしと。廿二日問注所へ訴狀を差上けるやう。近來日蓮といふ。惡僧佛法の次第も辨へなく。諸宗門を地獄と爲り。愚昧の男女を誑らかし。彌陀觀音の像を火に燒川に流し劍戟兵具あど。室の內にかくし持。無頼の惡者をかたらひ聚め。先年流罪御赦免のうへは。惡行を

も止べき筈の處左ハおくして。亂坊以前に十倍し。良觀上人雨請の時も。天下の御祈の場所と知りながら。再三弟子をつかはして廟呼におよび。此旱魃は禪念佛の事なれバ。建長寺。壽福寺大佛殿燒拂ひ。諸宗の僧の頸を切らば。雨立處に降べしあど。惡行雜言古へ守屋が惡逆も。僧の頸をきれとはいはず。願はくは此毒惡の日蓮が邪義を。停止あらば。佛法王法とあにさかへ天下の萬民安堵に住し。その御仁德を仰がんとぞ訴へける。又良觀上人も。一通をさゝげてこれを歎き訴へ。其餘諸宗の本山本寺。力かひなき痩法師までろの虎の威を假んとて。我後れじと訴へ出。又はひそかに。北條の御一門。後室尼御前奧方鶴女達に取入て彼日蓮奴が此程ハ時賴重時御兩君を。無間地獄に落たりといひ。諸宗の寺を燒拂ひ。かねて御歸依の道隆禪師良觀上人の頸を切と。屬るよしあど。あらぬ事まで。種々に言上るにぞ。奧方尼仁御前など聽きたまひろは勿躰おきいひ條かな。日蓮とかいふ僧の。疾いましめずやと。婦女心のやるかたなく唯一筋に。大士を惡み奉る。此內外の讒奏つもりて。九月十日。日蓮問注所へ出よと名寄られ諸寺院より御訴出たる。其條々遂一に尋問。ろのう〳〵先君時賴重時御兩代地獄に墮給ひしと云よしそは實にやと。眼に角立て睨らまへば。大士つゝしんで。世界を照らす日月さへ。法華經の御敵